昭和58年11月1日・15日号（毎月2回1日、15日発行）第26巻・第21－22合併号　通巻595号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1983
21-22
11



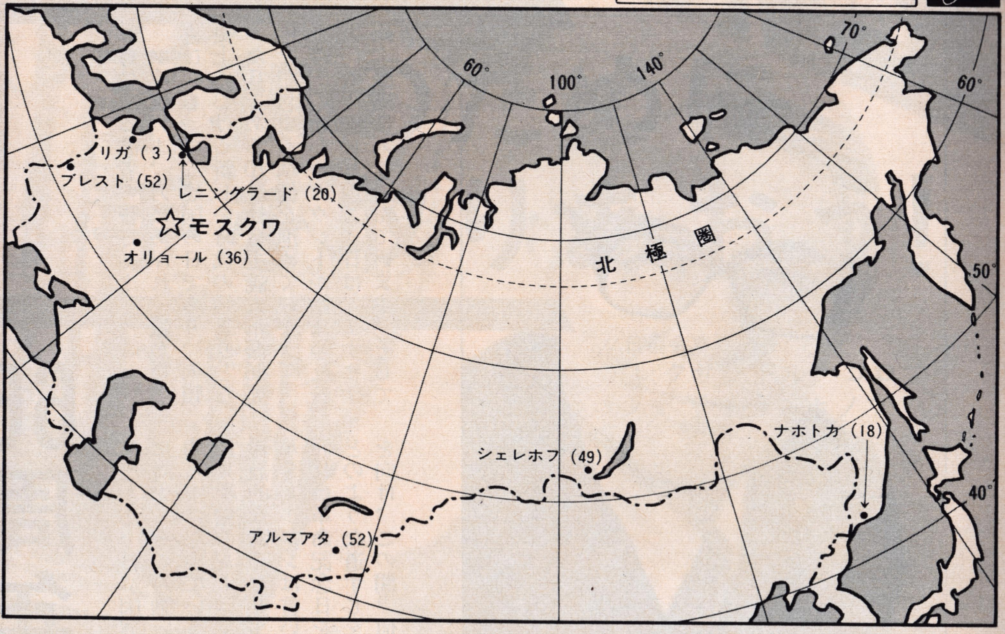
脈々と続く革命の伝統　レニングラードのブイボルグ地区

文豪ツルゲーネフが愛したロシアの自然

第21・22号　1983年11月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

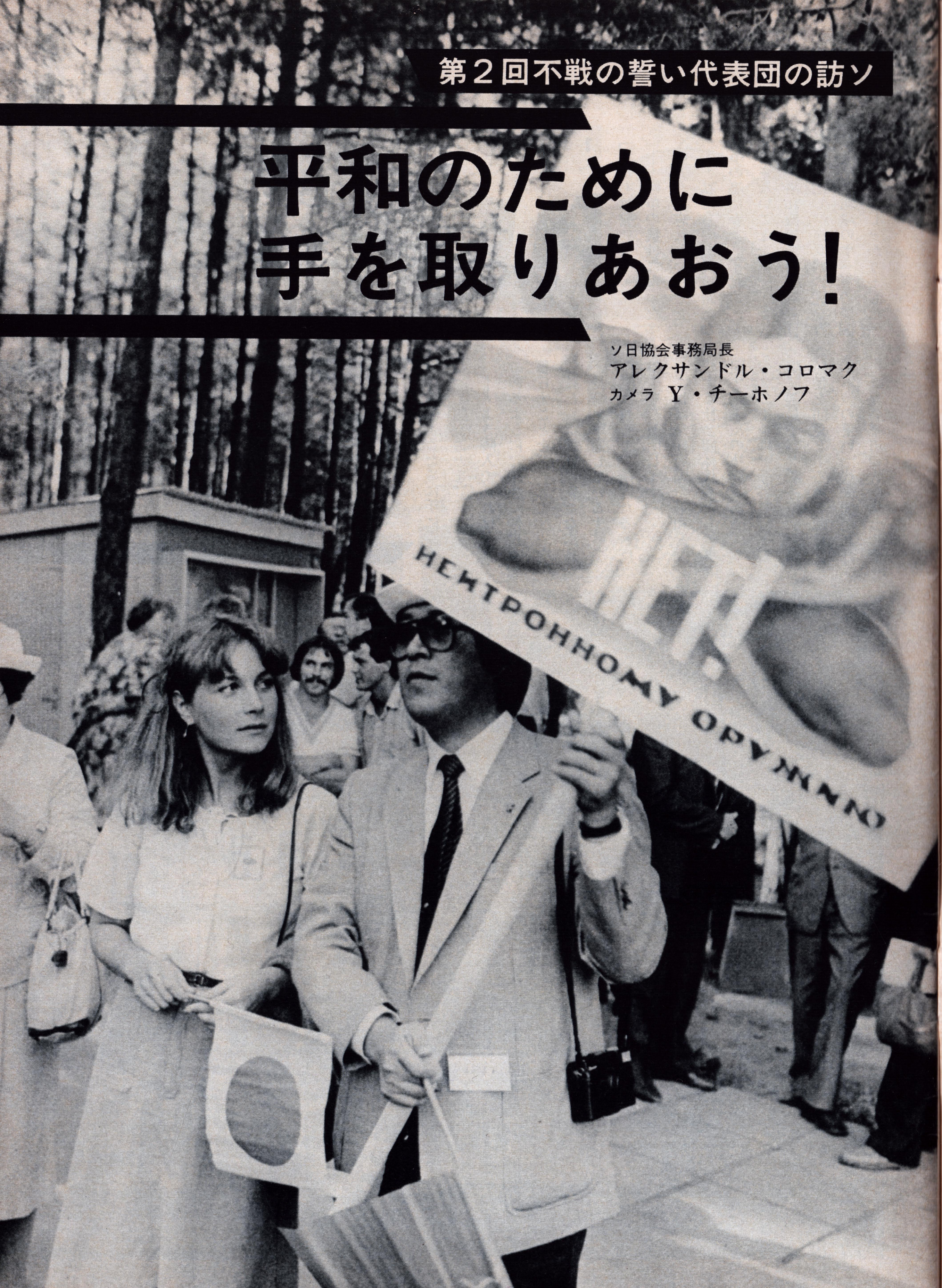
発行所　(株)新時代社　電話03(263)2811
〒101 東京都千代田区西神田2—7—12
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

第2回不戦の誓い代表団の訪ソ

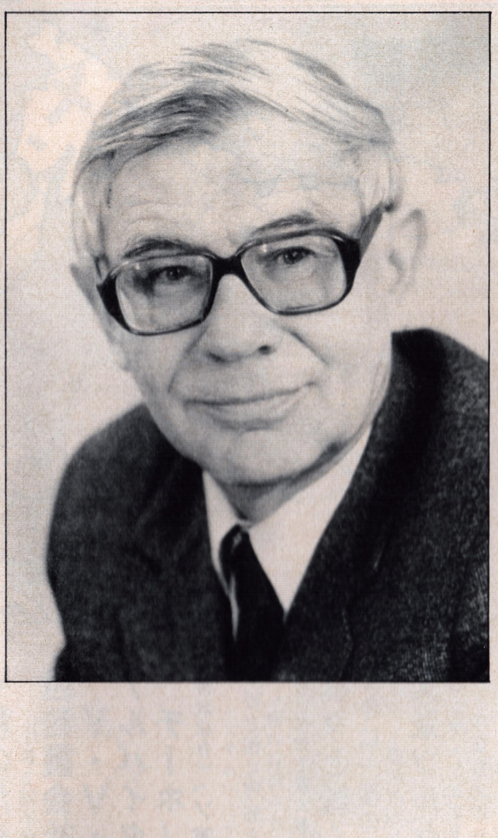
平和のために手を取りあおう！

ソ日協会事務局長
アレクサンドル・コロマク
カメラ Y・チーホノフ



住む国は違っても、平和への願いは同じ……

10月社会主義大革命66周年にあたって



尊敬する読者の皆さん！

ソ連はいま、力にあふれ、厳かに、喜びをもって、建国の日であり、人類史上における新しい時代の始まりとなった日である10月社会主義大革命66周年を記念する準備を進めています。

時間の新しいカウントが始まった一九一七年の10月のこの日は、ますます深く歴史に入り込んでいます。そして年ごとに、わが国の運命、世界の運命に対するその力強い影響は、ますます明らかになっています。大衆をつかんだ共産党のレーニン的思想は、偉大な建設的な力となりました。ウラジーミル・レーニンは言いました――「われわれは革命記念日を祝うとき、革命がどのような道すじを通って来たかに目を向け、この間、何が達成されたかを見るべきである……」。今日、革命のこの道すじに思いを致せば、われわれは後れた、半ば文盲だった国で、ひとりの人間の人生のうちに、発達した社会主義社会が建設された、と誇りをもって言うことができます。

自分たちの成果を正当に評価するにあたって、われわれは決して困難についても忘れていません。ソ連国民、わが国家は、それらの困難と断固闘い、われわれのもとに建設された社会主義社会をあらゆる面で改善しようと努力しています。

ソビエト国家が発展の現段階で当面している国内的課題は、かなりの程度まで対外政策を規定しています。対外政策の現在の主要な目的は、地球上の平和を維持し、強化することです。

軍国主義勢力は人類を最も危険な淵にますます追い込んでいます。このような危険な政策は、世界情勢を一層不安定にし、諸国家の正常な関係を破壊しています。そしてこのような冒険主義的方針が、手のつけようのない悪い結果をもたらさないとは、誰も保証できません。

ソ連は軍拡競争の中止と世界の恒久平和を断固一貫して求めています。それはソ連の対外政策のかなめの目標であり、全ソ連国民から支持されています。そのことは、さる10月初めモスクワで行われた八〇万人の未曾有の規模の反戦行進が証明しています。

ソ日関係について私がもう一度強調しておきたいのは、われわれが実務的パートナーシップや安定した互恵の大規模な経済協力、幅広い学術・文化交流をめざしていることです。政治面でも大きな相互理解を達成するための余地は少なからずあります。わが国家の元首Y・V・アンドロポフが述べているとおり、「ソ連は日本のよき平和な隣国でありたいと願っています」。

われわれとしては、たとえば極東・太平洋沿岸諸国間の相互信頼を固め、この地域での軍事行動を制限する方途を日本と審議する用意がつねにありますし、これらの目的をとげるために協力し合う用意がつねにあります。私はソ日両国間の友好と建設的協力が、アジアと全世界の恒久平和の最も重要な要素の一つになりうることを信じてやみません。

ソ日両国民の共通の課題は、お互いをもっとよく理解しあい、協力の年月にさまざまな分野であげた実際的な成果を倍増し、それを土台にして前進することだと思います。

この機会を借りて、本誌の読者の皆さんと日本の全国民に、平和と幸せとご無事を希望いたします。

駐日ソ連大使
ウラジーミル・パブロフ
東京、一九八三年11月



「私たちは誓います。
——戦争の犠牲になった多くの人々を忘れないことを。
——私たち両国民が新たな戦争の渦に巻き込まれることを許さないことを。
——平和擁護者の隊列の団結を強化し、核兵器の完全なる廃絶と地球のすべての諸国民の平和のしっかりとした保障を確保するために手に手をとって闘うことを。
——よき隣人であればそうであるように、平和に仲良く暮らすことを。
私たちは世界に新たな広島と長崎を準備しているすべての者に対して、断固たる《反対!》を表明します……」

これはソ日両国の平和を愛好する社会団体代表たちの共同アピールの抜粋である。このアピールは、瀬谷英行・参議院議員・日ソ親善協会事務局長を団長とする第2回日ソ「不戦の誓い」代表団が訪れたソ連各都市の大衆集会で響

1　不戦の誓い代表団の幹部とリガ市ソビエト執行委員会幹部との会見。アナトリー・ラスコロホフ・リガ副市長からプレゼントを受け取る瀬谷英行・参議院議員・日ソ親善協会事務局長。
2　リガ市内での平和行進
3　リガ旧市街の古い建物を見物。

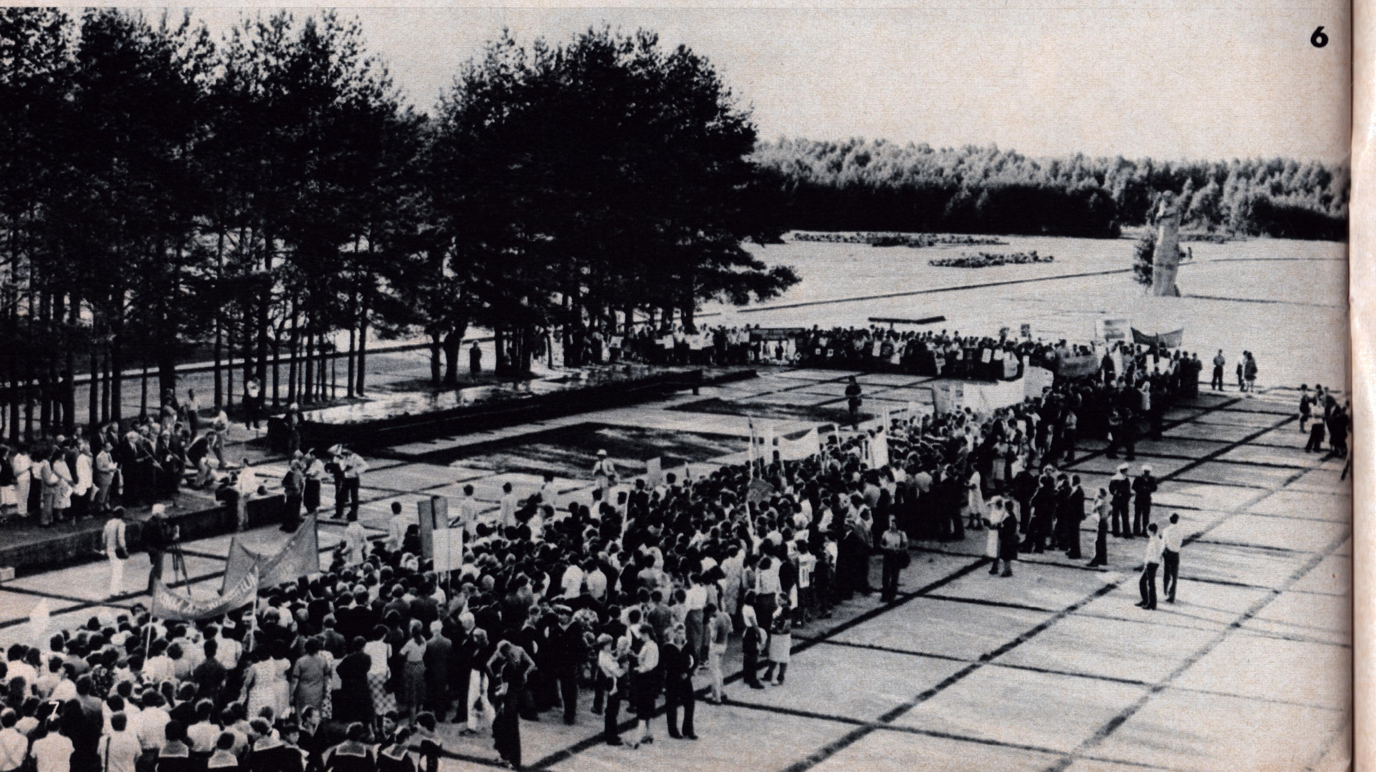




き渡った。
大衆的なソ日反戦集会――不戦の誓い集会がソ連対外友好・文化交流団体連合会、ソ日協会、日ソ親善協会のイニシアチブで開かれるようになってから2年目になる。
昨年の本誌20号にはソ日両国社会団体の代表たちによる最初の反戦集会について紹介されている。この集会は「不戦の誓い」というスローガンのもとにレニングラード、ミンスク、ボルゴグラード、モスクワで開かれた。今年は8月19日から29日までリガ（ラトビア共和国の首都）、レニングラード、モスクワ、ハバロフスクで行われた。ソ連側からはこれらの都市の市民数千人が集会に参加し、日本からは16の都道府県の労組活動家、青年団体と婦人団体の会員、地方自治体の議員、主婦、学童、労働者、事務員などが参加した。
反戦集会はリガ市内の平和行進とサラスピルス（リガ市近郊）での大衆集会から始まった。サラスピルスは第2次世界大戦中ドイツ・ファシストによって死の強制収容所が設置されていた場所で、今ではメモリアル公園になっている。詩人のアンドリス・ベヤンス・ラトビア平和擁護委員会議長がサラスピルスの集会で開会の辞を述べ、次のように語った。「私たちはいま、かって隅から隅まで人間の血を浴びた場所に、日本から来た志を等しくする人たちと共に立っています。私たちは同じ一つの太陽を持っています。この太陽は毎日夕方にはサラスピルスの松林の向こうに降り、東洋の日本の空に再び昇るためにバルト海の波間に沈みます。サラスピルス、広島、長崎の悲劇的な過去を繰り返してはならない！という神聖な遺訓も、私たちを結びつけています。核兵器反対闘争、平和擁護闘争では共に行動しなければなりません。なぜなら平和の白いハトと幸福のツルの存在を信ずるからです」
瀬谷英行団長は演説の中で、日本国民は東洋でソ連の最も近い隣人であると強調した。「隣人同士は平和に仲良く暮らさなければなりません。すべての国民、すべての国が自分の隣と平和に仲良く暮らすならば、何人も明日の心配をする必要はなくなるし、世界のどこでも戦争の恐ろしい警鐘が再び鳴り響くようなことは二度となくなるでしょう。私たちは、日本国民が平和を守るために頑張っており、世界に決して再び戦火が燃え上がらないように全力を尽くすことを改めて証言するためにやってきました」
サラスピルス集会の参加者たちは、世界の諸国民に向けた「日ソ不戦の誓い集会参加者の共同アピール」を拍手で迎えた。そこには次のように述べられている。「私たちはその実施が緊張をやわらげ、核兵器不使用の完全な保障を確かなものとし、軍備削減を始めるうえで、よい政治的情況をつくり出すことを実質的に促進するすべてのイニシアチブと提案を断固支持することを表明します。
私たち第2回不戦の誓い集会参加者は広島、長崎の宣言に賛同し、地球のすべての地域を非核地帯に変えたいとの希求に連帯します」
不戦の誓い集会の行事はレニングラードで続けられた。ピスカリョフ記念墓地では集

4


5


6


4　サラスピルス・メモリアル公園（リガ近郊）で開かれた集会で。

5　リガ市民たちの心からの歓迎……

6　サラスピルス・メモリアル公園での不戦の誓い集会（8月21日）



会が開かれ、不戦の誓い代表団のほかに訪ソ中の労働大学代表団員たちも参加した。

モスクワで不戦の誓い代表団一行は無名戦士の墓に献花し、地球上の平和のために生命を捧げたソ連将兵の不滅の功績をしのんだ。ハバロフスクでの最後の集会とデモ行進には大勢の人々が参加した。第2回不戦の誓い集会は、平和に仲良く暮らし、世界を脅かしている核破局を防止しようというソ日両国民の熱意を新たな力をもって示した。集会参加者たちはこの偉大な目的を達成するために全力を尽くす決意をいま一度確認し、今後ともソ日合同反戦集会を開催し、将来この集会により広い性格を与える意向があることを声明した。



7　ソ連の子どもたちに折りヅルの作り方を教える日本代表団員たち

8　ラトビアのダンスで交流……

西独議会社会民主党議員グループへのY・V・アンドロポフの回答

ドイツ連邦共和国議会の社会民主党議員グループからY・V・アンドロポフ・ソ連最高会議幹部会議長にあてて、欧州核軍備制限問題に関するソ連最高会議代議員へのメッセージが寄せられた。

メッセージの筆者たちは、欧州核軍備制限ジュネーブ交渉が決定的な局面に入ったことを指摘し、一九八三年末までにこの交渉で転換をかちとることができないかもしれないと憂慮し、これに関連して本年が軍拡競争の劇的なエスカレーションによって幕を閉じることになりかねないと危惧の念を表明している。

ドイツ連邦共和国は世界でも核兵器の配備密度の最も高い国で、その領土に約六〇〇〇個の核弾頭が配備されている。世論調査の結果によると、西独住民の72%が米国の新型核ミサイルの配備に反対している。

以上のように述べたメッセージは、さらに次のように指摘している。世界の多くの地域が貧困にあえいでいる条件のもとで、人々はますますひんぱんにこう自問している。実際に世界は死をもたらす兵器の量の増大を必要としているのだろうか？　飢餓対策に向けられるよりも何倍も多い資金が軍備のために使われているがゆえに、世界で毎年一〇〇〇万人をこえる児童が死んでいる現状を放置することは、犯罪ではなかろうか？

われわれは、今世紀に他の諸国民に多大の苦しみを与えたファシスト・ドイツの罪を自覚している。社会民主党議員は戦争の惨禍を知っており、そのゆえに次の要求を支持するよう切に要請するものである。――あらゆる核軍備を即時停止すること。すべての核兵器を凍結すること。SS20ミサイルの量を削減すること。巡航ミサイルとパーシングⅡミサイルの配備をやめること。

メッセージは、ジュネーブ交渉が前向きの成果をあげるよう尽力することを呼びかけている。ソ連、西独両国民はそれを必要としている。両国民は、あらゆる種類の大量殺りく兵器から解放された欧州の創設という目標に近づくことに、真の安全を保障し互恵の協力を発展させることに関心をもっている、と。

以下はこのメッセージに対するユーリー・アンドロポフの回答。

尊敬する議員の皆さん、

ソ連最高会議代議員は全ソ連国民と同様に、軍拡競争の激化について、この競争を阻止するばかりでなく軍縮、なによりもまず核軍縮へと事態を導くべき交渉で進展が見られないことについて、あなたがたのメッセージの中で表明された憂慮の念を、共にわかち合うものである。

われわれの深く確信するところでは、現在進行中の事態は、欧州と全世界の諸国民の根本的な利益と志向に、まっこうから矛盾している。その責任は、国際関係の安定破壊、社会主義諸国に対する、そしてそれと同時に他のすべて

の国々に対する軍事的優位の達成を当てこんだ連中にある。

歴史はすでに一度ならず、こういった計画や意図をくつがえしてきた。今回もそうなるものと、われわれは確信している。しかし、このためには、事態の危険な進展を転換させ、核の脅威を人類から遠ざけ、いま行われている軍縮交渉で転換をかちとるための最も活発な断固たる行動が必要である。

世界は死をもたらす軍備の増強を必要としていない。世界はそれを抜本的に削減し、それによって浮いた資金を経済・社会発展の緊急な要求に利用することを必要としている。

これがソ連の深く確信するところである。これがワルシャワ条約のすべての加盟国の見地である。これがあなたがたのメッセージの中心的な質問に対する答えである。ソ連は核破局への転落をおしとどめるため、あらゆる努力を払っている。人類の将来にとって最も重要なこの問題で、ソ連はすべての国と広く協力する用意をもっている。

あなたがたは、あらゆる核軍備を停止し、すべての核兵器を凍結し、米国が巡航ミサイルとパーシングⅡミサイルの欧州配備をやめた場合にはソ連のSS20ミサイルの数を減らすことを、われわれに呼びかけておられる。

ソ連はこれらの要求に完全に同意し、これを支持するとともに、もっとずっと先まで進む用意をもっている。われわれはすべての核軍備を量的、質的に凍結すること、つまり核軍備のすべてのコンポーネントの量的増強をやめ、新しい種類や型の核軍備を展開しないこと、新しい種類や型の核兵器送達手段の実験をも含めてあらゆる核弾頭の実験にモラトリアムを施行することを提案している。中距離核をも戦術核をも含めた核兵器を欧州に置かないことにするというわれわれの提案も、依然として有効である。

そしてこれらすべては、単なる結構な願望ではない。われわれは、このプログラムをただちに条約による義務の言語に翻訳し、続いて一歩一歩その完全実現をめざして進むことを主張している。ソ連と米国は、他の核保有国も同様に行動することを念頭に置きながら、この端緒を開くことができる。

ソ連のSS20ミサイルについて言うなら、ソ連は削減後、英仏両国が保有しているのとちょうど同じ数の中距離ミサイルを欧州に残す用意がある。

最近われわれは、もちろん米国がその新型ミサイルの欧州展開をやめること、中距離航空手段をしかるべく削減することを含めて、欧州全体の核軍備の問題について相互に受けいれ可能な協定が達成された場合の話だが、自国欧州部で削減されるミサイルのすべてを廃棄することに同意し、合意達成のために新たな大きな一歩を踏み出した。われわれのこの善意の一歩は、削減される中距離ミサイルのソ連欧州部からアジア部への配置換えを、われわれがやらないであろうということを意味する。これらのミサイルはいつかなる時に以前の陣地に戻されるかわからないという西独でも述べられている危惧は、このこと自体によって解消するだろう。

このように、ソ連は欧州の中距離核兵器を大幅に、$\frac{1}{3}$に削減し、今後ここに新型の核兵器を展開しないようにしようと主張している。この場合ソ連は、NATOの保有数を上回る軍備は、ミサイル一基たりとも、航空機一機たりとも要求していない。ソ連は自国の軍備の数量を大幅に削減することに同意している。そこで疑問が出てくる。誠実で公正な合意のために、このほかにまだ何が必要だと言うのだろうか？　そもそも米国その他のNATO諸国は、合意を望んでいるのだろうか？

七〇年代の初め、ソ連と西独は共にデタントのゆりかごのかたわらに立っていた。われわれ両国民は戦争の惨禍と平和の価値を知っている。両国民は〝冷戦〟の再発にはだんこ反対であり、われわれの大陸の平和な将来のために東西欧州の諸国の共同の努力でつくりあげられてきた前向きのもののすべてを、欧州とは無縁の利益のために抹消する試みが行われているのを、無関心に見すごすことはできない。

あなたがたのメッセージでは、西独住民の72%が米国の新型ミサイルの配備に反対し、ジュネーブ交渉の続行と合意達成を求めていることが指摘されているが、この事実もまた以上述べたことと関連して特徴的である。貴国領土が全人類に地獄の苦しみをもたらす恐れのある戦争の脅威の源泉となることを、あなたがたは望んでいない。われわれもそれを望まない。そういう事態が起こらぬよう、全力を尽くさなければならない。これはわれわれにできることであり、両国と欧州のすべての国の国民の利益になることである。

国家権力の最高機関であるドイツ連邦共和国議会の議員諸氏が、自己の義務と責任を深く自覚して行動されることを期待したい。世界が軍拡競争の新しいラウンドに引きずり込まれていくのを防ぐ可能性は、まだあるのだ。

（プラウダ、一九八三年9月21日号）

アルバイター・ツァイトゥング紙に対するチーホノフ首相の回答

N・A・チーホノフ・ソ連閣僚会議議長は、オーストリアのアルバイター・ツァイトゥング紙マンフレッド・ショイヒ編集長の質問に次のように回答した。

問い フレッド・ジノワッツ・オーストリア共和国首相は、ソ連公式訪問の招待状を受けとった。この点に関連して、現在のソ連・オーストリア関係をどう評価するか？

答え 一九五五年の国家条約とオーストリア共和国による永世中立宣言をベースとするソ連とオーストリアの関係は、きわめて順調に発展し、明るい展望をもっている、と完全な根拠をもって述べることができると思う。このことは、政治、経済、科学技術、文化、スポーツその他、実質上すべての分野におけるわれわれの交流の良好な状態や動向によって裏付けられている。

本年10月モスクワでソ連・オーストリア経済・科学技術協力合同委員会の定例会議が開催されることになっており、両国の共同計画や今後の重要なプロジェクトを討議する。われわれは、協力のこの重要な分野を互恵と均衡にもとづいて今後も前進的に発展させるため必要なことすべてを行う。

国会レベルの接触も強化された。この秋、われわれは、ソ連を返礼公式訪問するオーストリア国会代表団を受け入れる。

現在の国際情勢のもとでソ連・オーストリア協力は、安定性の要因の一つとなっている。両国は相互尊重、互いの必要と利益への注意深い配慮、平和の理念と国際安全への献身を特徴とする真に同権の関係の良好な見本を与えている。われわれは、他の中立諸国や非同盟諸国と共に行動しつつ、マドリード会議の作業とその成功裏の終結に目立った寄与を加えたオーストリアの建設的な努力を、しかるべく評価している。

両国の指導者の個人的な接触が、疑いなく、ソ連・オーストリア善隣関係の強化において重要な役割を果たしていることを指摘したい。このような会談は、よい伝統となった。トップレベルでの会談は国家間関係を刺激し、その一層の発展の重要な契機となっている。昨年、ルドルフ・キルヒシュレーガー・オーストリア大統領がソ連を訪問した。

われわれは、ジノワッツ首相の訪ソをも歓迎するだろう。ソ連公式訪問を要請するソ連指導部からの招待状は同首相に手渡されている。この訪問が両国間の協力の一層の拡大、オーストリア政府も支持しているデタント政策の強化に役立つことを確信している。

以上述べたことすべては、両国関係の発展の高いレベルをかなりはっきりと特徴づけていると思う。協同行動と協力の経験は少なからず蓄積された。それらを今後もしっかりと管理し、蓄積し、新たな行動によって豊かなものにすることが必要である。

問い オーストリア政府はデタント政策を一貫して支持しており、最近〝冷戦〟気候が再発生したことを遺憾に思っている。中立国であるわれわれは、二つの超大国が—— ソ連のSS20ミサイルの配備やアフガニスタンへの軍隊の投入も、レーガン政権の発言も同じ程度に—— このことを促した、と考えている。この喜べない状況の原因は何か、いかにしてそれを変えることができるか？

答え 激化した国際情勢に対するオーストリア人の不安には全く同感である。しかし、あなたがたは西側の同僚と同じように、ソ連と米国のいくつかの行動を同一視しようと試みており、問題の設定そのものが私には間違っているように思われる。しかしながら、比較できない行動、いわんや対立する政治路線の同一視はつねに、間違った結果をもたらすものだ。ソ連の旧式化した中距離ミサイルを最新のSS20ミサイルに取り替えたことによる近代化

が欧州の戦略情勢を変えなかったことを思い出して欲しい。これは、欧州における米国の前進配備核手段とそのNATO同盟国—— イギリスとフランスの同様の兵器がつくり出した脅威に対する回答、しかもいやおうなしに強いられた回答として行われたものである。七〇年代の初めからすでに米国は、欧州のNATO核戦力近代化・増強計画の実現に着手した。ソ連のSS20ミサイルがまだ配備されていなかった一九七四年、当時のシュレジンジャー米国防長官は〝パーシング〟型ミサイルの開発に資金を割り当てるよう議会に要求した。これは一九七九年の有名なNATOのブリュッセル決議の中で〝パーシングⅡ〟という名で登場する型のミサイルである。この時期までにすでに欧州〝戦域〟用に米国の新しい中距離兵器体系を製造する契約が締結されていた。このように、あなたがたが述べた現在の喜べない状況と〝冷戦〟気候に対する責任を、米国と共にソ連にも負わせようとする試みには全く根拠がない。

デタントの過程で達成された協定や条約を放棄しはじめたのはソ連ではない。規模において前例のない核軍備増強計画を採択し、実現し、欧州における〝限定核戦争〟ドクトリンを作成し、SALTⅡ条約の批准を拒否し、核実験全面完全禁止や他の一連の問題に関する交渉を失敗させたのは、ソ連ではない。

貿易や科学技術交流を政治圧力の手段として利用し、全欧会議最終文書第二章に直接違反して他国に対する差別的な制裁に訴えているのは、ソ連ではない。

アフガニスタンはどうかと言えば、この国の正当な政府の要請によるソ連軍部隊の投入に先立って、この中立・非同盟国家に対する米国の宣戦布告なき戦争があり、その独立の存続を脅かしていた。ソ連のミサイルやアフガニスタンの出来事に問題があるのではない。問題は、ワシントンが世界情勢を激化させるための口実を露骨に探していたところにある。あらゆる点から見て、ホワイトハウスは、緊張情勢のもとではグローバルな支配に対する自己の要求を正当化し、世界における軍事的優位を獲得するための巨大な軍備増強計画の実現を容易にすると判断したのだ。

以上述べたことから、現状をいい方向に変えるためには何を誰がすべきか、明らかだと思う。

問い 米国製新型中距離ミサイルの欧州配備は、現存の兵器のストックより危険だと考える理由は？ ジュネーブ交渉で成功をかちとるためのチャンスはあるか？ もし交渉が失敗すれば、どうなるのか？

答え 米国製新型核ミサイルがソ連国内のきわめて重要な目標を攻撃する使命を担っていることは、秘密ではない。核戦争が可能であり、ほとんど許容されうるかのような考えがワシントンで宣伝されている条件のもとで、われわれの国境のごく近くにこの兵器が配備されることは、西側と東側のおよその力の均衡を大幅に破り、ソ連国民とその同盟諸国にとって軍事的脅威が目立って増大することを意味するであろう。そして、これはソ連国民や同盟諸国にとってだけのことではないことを、指摘したい。すべての欧州人にとって増大するのである。このような兵器によってつくり出される脅威の性格と規模を説明したい。米国のミサイルはごくわずかな飛行時間で目標に到達するので、人間の主観的なミスあるいは技術上の故障の結果としても生じうる紛争を防止する可能性はほとんどなくなる。だがこのようなミスや故障の起こる危険性は、兵器の量の増大と共に増大しているのだ。

このような脅威から欧州、そして全世界の安全を守るため、われわれは、あらゆる核兵器—— 中距離核も、戦術核も—— から欧州を完全に解放することを提案した。もしこれがまずいというのなら、われわれは、相互主義のもとで中距離核軍備を大幅に削減し、イギリスとフランスが保持しているミサイルの数と同数のこの型のミサイルしか欧州部に残さない用意がある。

われわれは、欧州で二つの軍事・政治グループがミサイルにおいても、飛行機においても、弾頭においても平等を、しかも可能な限りより低いレベルでの平等を保持すべきだと主張している。その結果としてソ連は、欧州部において中距離ミサイルも、それに装備された弾頭も、われわれがSS20ミサイルをもっていなかった一九七六年以前よりもはるかに少ない量をもつことになるはずだ。

Y・V・アンドロポフ・ソ連共産党中央委書記長・ソ連最高会議幹部会議長は最近、プラウダ紙の質問に対する回答の中で、ソ連が欧州中距離核軍備問題の前向きの解決のために踏み出す用意をもっている新たな大きな一歩について述べた。米国が新型ミサイルの欧州展開をやめることを含めて、相互に受け入れ可能な協定が達成された場合、ソ連は、自国欧州部の中距離ミサイルをイギリスとフランスのミサイルと同数になるまで削減し、削減される分を廃棄することに同意した。つまり、現実的な軍縮の大きな措置が提案されているのだ。これは相互に受けいれ可能な合意を著しく容易にする措置である。

真に公正で、すべての当事者の安全の利益を考慮した協定をジュネーブで

達成するための時間は、まだある。もし絶好の機会が失われ、米国製新型核ミサイルの西欧配備が始められるならば、ソ連は地域的な規模、つまり欧州の規模でも、グローバルな規模でも、力のバランスを維持するための対抗措置を即時にとらざるをえなくなる。その結果、均衡は回復されるが、しかし、それはすでにより高い、平和の維持にとってより危険なレベルでの均衡である。

問い　社会主義インターの見解とは異なり、レーガン政権は、第三世界の社会・革命運動をソ連の影響力の結果とみなすことが多い。たとえば、中米がそうだ。ソ連はこの地域に関心をもっているか。もっているとすれば、どんな関心か？

答え　ソ連の対外政策の基本原則となっているのが、主権の完全な尊重と他国に対する内政不干渉だ。ソ連は、中米も含めて、あらゆる国との関係で、実際にこの原則を無条件で守っている。〝関心〟についていえば、ここでも、あらゆる地域と同様、われわれの関心は一つだ。地上の平和を守り、相互尊重、信頼、あらゆる分野での互恵・対等協力を土台にして異なる社会・経済体制の諸国との関係を築くことだ。

しかし、おわかりの通り、別の〝関心〟もある。ワシントンの公式筋は、中米・カリブ海地域の（そこだけに限らない）主権国家や民族解放運動に対する直接的干渉、しかも、武力干渉のキャンペーンをくり広げているが、その狙いは、まさに、米国の私利私欲に根ざした〝関心〟を保障してくれる反人民的軍事政権や血に飢えたカイライ政権を存続させることだ。

全世界は、ニカラグアに対して、そしてエルサルバドルで行われている米国の侵略政策やテロ活動を断固として糾弾している。確信をもっていうことができるが、このような政策はこの地域の諸国民の独立と自由をめざす闘争を止めることはできない。ソ連政府は、中米・カリブ海諸国はそっとしておかれるべきで、これら諸国に対する外部からの内政干渉は停止されるべきだと考えている。

問い　資本主義経済が深刻な危機に陥っていることは疑問の余地がないが、ソ連経済にも供給問題と同様、成長率でも危機的現象がみられる点は、奇異に思われる。これをどう説明されるのか。また、これらの問題とどのように取り組んでおられるのか？

答え　ソ連経済が直面しなければならない問題や困難は、危機的なものと呼んだり、西側にみられるような現象と同一視できるものとは思わない。生産縮小、失業とインフレ、生活水準の悪化、社会福祉計画の縮小といった、危機のあれこれの現れは、西側の何百万もの人々にはおなじみでも、ソ連には存在していない。

もちろん、わが国の経済の発展の上でそれなりの問題はある。国民経済は労働力不足を痛感している。対ファシズム戦争の時の死者二〇〇〇万人という重大な損失が人口動態に及ぼす後遺症がいまだになお現れているのだ。

第二に、わが国には大量の有用鉱物資源があるが、その採掘は年々ますます困難になっている。エネルギー・原料資源の開発、国内の北部や東部での新しい大型生産設備の建設に、年々増える一方の巨額の資金を投じなければならないのだ。

農業もわれわれにとっては少なからず悩みのタネだ。過去数年間の天候はわれわれにきびしかった。農産物の増産のために土地改良、化学肥料や農薬や最新機械の生産を目的として大型投資が必要となっている。

これらすべての問題を解決し、国民経済の効率を引き上げるために、全国で経済機構の改善、計画化と経済管理の方法の改善をめざす大がかりな作業が進められている。この作業の目的は、社会主義社会の発展と新しい運営条件が提起している要求に管理を合わせることだ。ソ連では科学技術進歩の促進という課題が粘り強く解決されている。

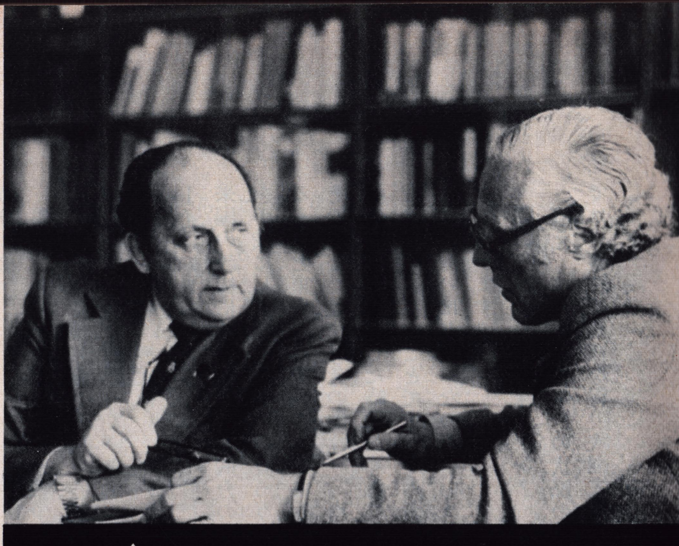
この作業はすでに良好な結果をもたらしつつある。5カ年計画の中間年にあたる一九八三年に、ソ連国民経済は、さらにダイナミックに発展し始めた。事実上あらゆる経済指標が改善された。昨年と比較して、工業生産の成長率が高まった。運輸、基本建設、農業の状況もよくなった。大規模な住宅建設計画も実施中だ。要するに、社会的生産の効率が高まっているのだ。国民経済の最重要部門——工業、建設、鉄道輸送——での労働生産性の伸び率も、昨年を上回っている。

全体として、現在、ソ連国民経済に大きな変化が少なからず起こっているのだ。これらは良い方向への変化だ。これらはすべて国民生活の物質的・文化的水準の不断の向上を保障するという、一貫して変わらないソ連経済の主要目標の達成に役立つものだ。

（プラウダ、一九八三年９月23日号）

お知らせ

本号は都合により、第21・22合併号（11月1日・15日号）にさせていただきました。なお、予約読者の皆さんには、予約期間を1号分延長いたしますので、ご了承下さい。



▲オランダのジャーナリスト、オルトマンス氏（右）と対談するアルバートフ科学アカデミー会員

抄訳紹介

『ソ連の立場——デタントのほかに道はない』

——アルバートフ・ソ連科学アカデミー会員と西側ジャーナリストの対談。日本でもサイマル出版会から近刊

ゲオルギー・アルバートフ著、ウィレム・オルトマンス協力の『80年代への入り口で』と題する本がノーボスチ通信社の出版局から発行される。同書の翻訳は一九八一年に西ドイツで、一九八三年に米国でそれぞれ出版された。この本はオランダのジャーナリスト、オルトマンス氏がモスクワの米国・カナダ研究所長として著名なアルバートフ・ソ連科学アカデミー会員に何度もインタビューした結果できたもので、二人が交わした話の内容は現代の国際関係の焦眉の問題に触れたものばかり。本書はオルトマンス記者が出した一五〇の質問にアルバートフ所長が答えるという形をとっている。

欧米で反響を呼んだ本書は、近く東京のサイマル出版会からも『ソ連の立場——デタントのほかに道はない』（仮題）という書名で翻訳出版される。

本誌ではこれに先立って、本書のごく一部を紹介させていただくことにした（ここに掲載した抄訳の訳文は本誌編集部によるものです）。

なお、サイマル出版会の『ソ連の立場——デタントのほかに道はない』は11月中に発行の予定（Ｂ６判三八四ページ、定価一六〇〇円）。

問い　70年代は緊張緩和の10年でした。80年代は第2の〝冷たい戦争〟の10年になるでしょうか？

答え　なにも運命論に染まって10年間をひとからげにして描き出さなくてもよいでしょう。とはいえ、ここ数年のあいだに国際情勢が全体としてひどく悪化し、50年代の〝冷戦〟時代を思わせる点が多くなったことは議論の余地がありません。

現下の情勢を判断する場合、第2の〝冷たい戦争〟が最初のものよりはるかに大きな危険をはらんでいるという点を見ることが大切です。大量殺りく兵器が新しいレベルにまで発達しているいま、歯止めのない敵意と対決へ逆戻りするようなことになったら、軍事紛争は前とは比較にならないほど破局的なものになるでしょう。80年代に〝冷たい戦争〟の竜巻が起こったら、巻きこまれる国は前よりはるかに多くなり、核兵器の拡散は事実上避けられなくなるでしょう。

今後数十年の間には天然資源の枯渇、環境汚染、飢餓などといったグローバルな問題が極度に先鋭化します。これらの問題は緊張緩和や軍備統制、国際協力ならその解決の助けになるが、〝冷

たい戦争〃の条件のもとでは解決できなくなるでしょう。

問い カーター前米大統領の顧問だったパトリック・カーデルはかつてこう言ったことがあります。「小さな戦争をやれば大統領に人気が出るものだが、戦争をやらないというだけでは大統領に政治的利益をもたらさない。歴代のどの大統領も思い切った軍事行動をとることによって自分のまわりに国民を団結させてきた。アイゼンハワーには朝鮮戦争とレバノン紛争、ケネディにはキューバ紛争とベトナム戦争、ニクソンとフォードにはベトナム戦争があった」

答え カーデルの言明は、戦争を政治的成功の手段に変えている政治制度の重大な欠陥を物語っています。

腰の拳銃をいきなりぶっ放すカウボーイはいまなお米国では人気者だが、米国の政権には軍拡競争と武力の行使を手段にして自己の安全を計ろうとするもっと重大な心理的原因があります。そのひとつは、思考の惰性、〃冷たい戦争〃が生み出した時代おくれの考えを捨てられないことです。その考えはたまらないほど簡単なので、いまなお力があります。

問い どういう意味ですか?

答え 〃冷たい戦争〃の状況のもとでは、事件は素朴な冒険映画式に展開します。観衆の目の前にいるのは、諸悪の根源であるところの具体的な敵なのです。目的は単純明快、その敵をやっつけることです。相手に大きな損害を与えれば与えるほどいいのです。強硬外交、外国人嫌い、生き方も外貌もちがう者への敵意といった時代逆行的な感情や民族的優越感に訴えることができます。白か黒か、尺度が二つしかない世界にいるのです。その際、1、2分のテレビ放送時間内に自分の政綱を述べる能力のあることが特別に重要です。

緊張緩和の哲学は無限に複雑です。広く考え、辛抱強さを発揮し、社会体制も政治制度も価値観も好き嫌いの感情もまったく異なる国同士の共存と協力が必然であり望ましいことを理解しなければなりません。こうした国同士の関係は、片方が勝ちならばもう一方は必ず負けになるというような勝負事とは違うということ、どんな矛盾があっても双方がきわめて重要な共通の利害をもてるということを理解する必要があります。

また、自制、節度、妥協の用意といった、英知だけでなく政治的な決断力も必要とする資質が、際限のないうぬぼれやごう慢、力ずくの強がりなどよりましだということを理解する必要があります。さらには、相手側を理解しようとすること、自分の政策が相手側の視点から眺めるとどう見えるかと自問することが必要です。

本当の意味での緊張緩和は数年しか続きませんでしたが、それに先立つ〃冷たい戦争〃は数十年も続きました。その数十年は固定した誤解と偏見だけでなく、特定の機構を置きみやげにしたのです。私の言っているのはいろいろな軍拡機構とか、現在の軍事・政治同盟とか、〃冷たい戦争〃に奉仕するために生まれた巨大なインフラストラクチャーのその他の部分、たとえば〃心理戦〃、隠密作戦行動そのほかの同じような目的の作戦行動を行うための施設と組織のことです。こういった機構は生きながらえ、自己を永続させようとしているので、そのためには国際緊張をつくり出し、軍拡競争をあおり、〃外敵〃にたいする不信と憎しみの種子を播かなければならないというわけです。

こうした機構の動きが米国社会で強まっているのは、財界のきわめて有力な筋がこのような機構の存在に物質的な利害関係をもっているからです。

問い 国際政治は複雑になる一方です。それにもかかわらず、ソ米関係は世界的諸事件の主軸の役割を演じつづけています。

答え 言われる通りです。もっとも、あらゆる世界的事件をソ米関係のプリズムを通して見るのは間違いですが、ソ米関係が人類にとってもつ意義は過大評価しすぎることはないでしょう。私ならこう表現します――モスクワとワシントンの関係改善があらゆる不幸を救う万能薬にはならないとしても、両者間の際限ない敵意は全文明を滅亡に導くだろう、と。

問い ハーバード大学の心理学者B・F・スキナーに、現代の一番重要な問題は何だと考えるか、と質問したら、〃生きながらえること〃という簡単な答えが返って来ました。

答え 生きながらえる――これはソ米間の重要な共通の関心ですし、これが平和共存をまったく不可欠なものにしているのです。どちらの国も地球を捨てるつもりはありません。どちらも、地球上の生命の存在そのものを無視して他の側を滅ぼすことはできないからです。つまり、われわれはお互いに平和に暮らすことを学ばねばなりません。もしそれを学ぶことができれば、生きながらえるばかりか、ソ米両国にも、世界全体にも利益をもたらすような関係を確立できるでしょう。

問い 西側はソ連の対外政策をどれほど正しく理解しているでしょうか?

答え 肝心な問題は、わが国の対外政策に対する西側の理解が正しいかどうかではなく、西側がソ連にどういう態度をとっているかです。西側は長い間共存の事実そのものを受け入れようとはしなかったし、いまなお西側には

この事実を認めたくない人々がいます。ソ連に対する態度が偏執病的としか言いようのない人たちもいます。西側の一定層が現実を頑として受け入れようとしていないことが、おそらくもろもろの困難の主な根源であり、しかるべき相互理解が欠けている主な原因だろうと思いますね。

リチャード・パイプスあるいはヘンリー・ジャクソン上院議員のような人を相手に論争し、たとえ最良の弁護人よりもりっぱな雄弁を振るっても、彼らの見解が鉄筋コンクリートの反ソ主義で固められている限り、彼らを説き伏せることは無理だからです。

もちろんいまこうした人々は少数ですよ。しかし彼らの立場はもっぱらタカ派のものであり、一方自分をタカ派と見ていない他の多くの人々も、平和的共存の考えを論理的に未熟なものとして排除するというタカ派と同じ前提を多分に身につけています。

しかし西側には別の要人もいます。そうでなければ、デタントなんて考えられないのではないでしょうか。私が言っているのは、広いカテゴリーにわたって物を考え、平和的共存が人類に切実に必要であることを認識している冷静な政治家・現実主義者です。

問い その何人かの名を挙げて下さい。

答え ドゴールとブラントは西側政治家のそういうタイプのまず適当な代表と言えるでしょう。もちろんこの二人は、政見その他多くの点でとても違っていますが、共通しているのは二人とも西欧の大国の指導者として、偏見や常套的な考えを乗り越える能力があり、多くの同時代人よりももっと現実的に世界を見る力がありました。二人とも自国の幾つかの基本的利益を認識する能力がありましたし、同時にソ連の利益を無視するようなことはありませんでした。

こうした二人の現実的な態度は、第2次世界大戦中の経験によるものでしょうね。ナチの迫害を受けたブラントはやむなく亡命し、反ファッショ闘争に参加しました。ドゴールはヒトラーに占領されていたフランスの解放のために戦いました。ドゴールとブラントのこの経歴は大きな意義をもっていると思いますね。なぜかというと、西側がソ連のモチーフ――ソ連の戦争に対する態度をわかることが、おそらくとても大事なことだからです。西側の人々、とくに米国の人々はソ連国民にとって第2次世界大戦がどういう意味をもっていたかを、理解していないことが多いようです。ロシア人は第2次世界大戦で二〇〇〇万人の人命をなくしたのだから、核戦争でさらに二〇〇〇万ないしは四〇〇〇万人さえなくしても全然なんとも思わないなどという恐ろしい言葉をはく人さえいるのは、そのせいです。

問い そういうことを言って何を証明したがっているんですかね?

答え ソ連が大きな損害を恐れず核戦争を始めようとしていることを証明したがっているんですよ。これは自動車事故で重傷を負った人間が、ひどい傷害になれて、こんどは頭を割るために車に乗るという話と同じです。いい加減ばかげていますよ。

ソ連国民は一九四一―四五年の大祖国戦争でナチス・ドイツに栄えある歴史的勝利を収めました。しかしこの戦争を通じてわれわれは、以前にもまして平和を大切にしなければならないことを学びました。平和はソ連の対外政策の主要目的です。

問い あなたはソ連が平和を大事にしていると強調されるが、その反面モスクワが自国の軍事力に大きな関心を払っていることは否定しないでしょうね。

答え ええ、否定するつもりはないですよ。最近特に、米国と西側はこの点で大きな選択をわれわれにさせないようにしているのじゃないですか。

もちろん、われわれが平和を守ることに熱心だからといっても、それはわれわれが圧力に屈するということにはなりません。わが国民は戦争を望んでいないが、必要となれば、自国の安全に対するいかなる脅威にも反撃する用意があります。まるで、ソ連を軍拡競争で〃くたくたにする〃ことができるかのような幻想が、米国でまたもや復活しているので、反撃の用意があるということを言っておくのは大事なことです。米国内のこのような目算は、全く非現実的なものです。

さらに西側でたびたび軽視される要素が一つあります。われわれは、わが国への内政干渉を断じて許さないということです。ソビエト国家が誕生して以来、新社会の建設を妨げようとする試みは、しょっちゅう行われてきました。一九一七年にわれわれが選んだ道を踏みはずさせるために、軍事干渉から巧みな宣伝まで、ありとあらゆる手段が使われてきました。

歴史は、外からの内政干渉の企てに対して高い警戒心を身に付けるようわれわれを教育しました。これは恐怖のためではありません。なぜならわれわれは十分に強く、自信を持っているからです。この警戒心は、干渉が通常敵意ある破壊的な目的を追求しているという事実を反映しているにすぎません。

お詫び

18号48ページの「日ソ親善協会本部代表団の訪ソ」の記事中、レーニン廟に献花する日ソ親善協会本部代表団の写真は、別の代表団のものでした。ご迷惑をおかけした関係者に、謹んでお詫びします。

友好と相互理解を深めたナホトカ市民との交流

「ナホトカの船」事務局 丹波一郎（写真も）



港の広場で開かれた歓迎集会（8月17日）

八月十六日から二一日まで「ナホトカ青年の船」（団長・上田卓三衆議院議員、団員約二七〇人）がプリモーリエ（沿海）地方ナホトカ市を友好訪問。ナホトカ市民との活発な交流をくりひろげた。

「ナホトカ青年の船」は、日ソ青年の対話と交流を通じて相互理解を深め、日ソ関係の改善と世界平和の強化に貢献する目的で一九八一年以来毎年開催されているもので、今年で三回目。

東京、大阪を中心に広島、長崎、鹿児島など各地から参加した二七〇人を乗せたソ連客船ジェルジンスキー号は、十六日正午すぎ福井県の敦賀港を出航。一路ナホトカをめざした。船内では、日ソ関係や平和運動についての洋上講座やロシア語講座が開かれ、また乗組員による船上コンサートやディスコ大会、卓球試合など盛りだくさんの企画で参加者を楽しませた。

十七日午後五時にナホトカに着いた一行は、ブハンツォフ市長をはじめナホトカ市民、コムソモールの青年、ピオネールの子供たちが出迎える中を次々と下船。さっそく港の広場で歓迎集会が開かれ、その後市内のレストランでパーティーが行われた。

歓迎集会であいさつに立った上田卓三団長は、日ソ関係が最悪の今こそ民間レベルの交流を活発化させ、関係改善の糸口をさぐる必要があることを強調し、「日ソの対立と緊張をあおる〝ソ連脅威論〟に反対し、青年の友情と交流で日本海を平和の海にしよう」と述べ、盛んな拍手を浴びた。



ブハンツォフ・ナホトカ市長を表敬訪問した「青年の船」代表団（左から3人目がブハンツォフ市長、5人目が上田卓三団長）

十八日の午前は映画と講演会。午後はバスに分乗して市内見学。夕刻から船員友好文化会館の前で「反戦平和集会」が開催された。

反戦平和集会には、日ソ双方あわせて千人以上が参加。「軍拡競争を止めよ」「核を凍結せよ」「中性子爆弾反対」「世界に平和を」など、日本語とロシア語で書かれた横断幕やプラカードを手にした参加者を前に、日ソ双方の青年代表がそれぞれ平和への誓いを表明し、平和と軍縮、日ソの関係改善と友好の促進をうたった共同声明を採択した。



8月18日に行われた反戦平和集会には日ソ双方から千人以上が参加した。

集会のあとは友好文化会館でナホトカの青年たちによるコンサートが開かれ、民族衣装姿による踊りと歌、ロックバンドの演奏などを楽しんだ。日本側からも子供たちの合唱や「仕事の歌」「コサックの子守歌」などの歌が披露され、好評を博した。

一九日は、午前中各グループに分かれて施設見学。ピオネール・キャンプや保育所、病院、博物館、技術専門学校、音楽学校、船舶修理工場などを見学し、そこで働いている労働者との交流を行った。また同時刻に、日ソの代表約三〇名ずつで政治討論会を開催し、日ソ関係と平和の課題に果たす青年の役割について率直な意見交換を行った。

午後は、ナホトカ市郊外の浜辺のキャンプ場でスポーツ交流。水泳や日光浴はもちろん、浜辺でのつな引きやバレーボール、ピンポンなど日ソ青年いり乱れて打ち興じた。

あっという間に三日間が過ぎ、二十日の朝にはもうお別れ。午前十時から港の広場でお別れの集会を開き、出国手続きを経て正午すぎにナホトカ港を出航。ジェルジンスキー号は三日間の交流で育まれた日ソ青年の友情の思いを満載して、二一日午後三時過ぎに敦賀港に帰着した。

わずか六日間のナホトカ旅行ではあったが、二七〇人の参加者は全員、ナホトカ市民のあたたかい歓迎ぶりに大感激。〝百聞は一見にしかず〟の言葉どおり、実際にソ連の社会の実情と人々の様子を目のあたりにして、日頃日本国内で宣伝されているソ連像がいかに間違ったものであるかを口々にもらしていた。参加者の多くはアンケートに答えて、「ソ連に行く前と行ったあとでソ連に対する見方が変わった」「ソ連の人々は何よりも平和を大切にし、戦争を本当に憎んでいるということがよくわかった」「日ソの交流をもっと深め、平和の基礎を固める必要がある」「もう一度ソ連を訪れ、もっと多くの町で、もっと多くの人々と語り合いたい」……と書いている。



反戦平和集会で日本側を代表して平和の誓いを述べる北川修二・日本社会党松原総支部書記長。

なお、ナホトカへの行き帰り、船中で催された講座の講師とテーマは以下のとおり。①「日ソ経済交流の現状と課題」＝鈴木啓介氏（日ソ経済研究家）、②「ロシア革命と現代世界」＝大賀正行氏（部落解放研究所）、③「反核平和運動と教育」＝坂巻毅治氏（長崎市教組委員長）、④「アフガン、ベトナム、カンプチアから見た国際関係」＝田中稔男氏（前衆議院議員）、⑤「レフチェンコ事件の真相」＝松本健男氏（弁護士）、⑥「ロシア革命の歴史」＝小森春雄氏（労働問題研究家）。

催し物のお知らせ

☆ロシア・ソビエト芸術祭

▽ミハイル・プレトニョフ（ピアノ）公演

立川市民会館（11月5日）、大阪ザ・シンフォニーホール（7日）、我孫子市民会館（13日）、新宿文化センター（16日）、松本市民会館（17日）、東京文化会館（19日）

▽スビャトスラフ・リヒテル（ピアノ）公演

1984年1月9日から東京、大阪ほか10都市で公演の予定。

▽以上の詳細についてのお問い合わせは、ジャパン・アーツ（電話03・235・1661）へ。

☆ソビエト女流映画監督作品上映

①『新しい家族』

イスクラ・バービッチ監督、1982年ベルリン国際映画祭審査員奨励賞、1982年バンクーバー国際青少年映画祭審査員特別賞。

11月4日まで東京・神田神保町の岩波ホール。

12月17—31日まで大阪・三越劇場。

②『インタビュアー』

ラナ・ゴゴベリーゼ監督、サンレモ国際映画祭大賞。

11月5日から30日まで東京・岩波ホール。

84年1月10日から19日まで大阪・三越劇場。

▽お問い合わせは、岩波ホール（電話03・262・5252）、あるいは㈱日本海（03・262・4131）へ。

☆ソビエト名作映画鑑賞会

11月＝レニングラード交響楽（11月16日）

12月＝モノローグ（12月16日）

▽会場：日経小ホール（東京・千代田区大手町、日本経済新聞社9階）

▽開映時間：午後6時15分

▽入場料：800円（会員600円）

（上記会場では毎月1回、ソビエト映画が上映されています）

▽お問い合わせは、㈱日本海（電話03・262・4131）へ。

10月社会主義大革命66周年に寄せて

脈々と続く革命の伝統

——レニングラードのブイボルグ地区

本誌記者 アーラ・ベリャコワ
カメラ A・ワルフォロメーエフほか



▲伝統あるメタリーチェスキー工場



若手労働者と懇談するカール・マルクス記念工場のベテランたち



ネバ川越しに望むブイボルグ地区。手前は冬宮（ここの一部がエルミタージュ美術館になっている）と宮殿前広場。

11月7日の革命記念日はソ連国民にとって最大の祝日である。ことしは10月社会主義大革命の66周年にあたる。旧暦一九一七年10月25日（新暦では11月7日）から26日にかけての夜、革命的な労働者、兵士、水兵の部隊はブルジョア臨時政府の所在地だったペトログラード（現在のレニングラード）の冬宮を強襲した。国権は労働者、農民、兵士の代議員ソビエトの手に移った。

ペトログラード最大の工業地区——ブイボルグ地区の勤労者は、社会主義革命の準備と遂行、10月武装蜂起に重要な役割を果たした。ブイボルグ地区の名はソ連のさまざまな世代にとって革命の理想への奉仕のシンボルになった。

ブイボルグ地区の光栄ある歴史と伝統について、今日のレニングラードのブイボルグ地区について、本誌記者アーラ・ベリャコワがご紹介する。



ブイボルグ地区の建物に描かれた一九一七年10月の武装蜂起を象徴する絵。

革命の伝統——ブイボルグ地区



メタリーチェスキー工場の革命的労働者の集会（1917年6月）。前方中央でプラカードを持っているのがワシリー・ビノグラードフ（本文参照）。メタリーチェスキー工場の労働者はこのプラカードを掲げて1905年の第1次ロシア革命に参加した。この写真は同工場に保存されているもの。



▶革命当時、メタリーチェスキー工場の労働者はこの鐘の音を合図に集会を行ったり、ストライキを組織した。



◀一九一四年4月にラボーチャヤ・プラウダ紙創刊2周年を記念して発行された絵ハガキ（レニングラードの10月革命博物館に保存されている写真から）。

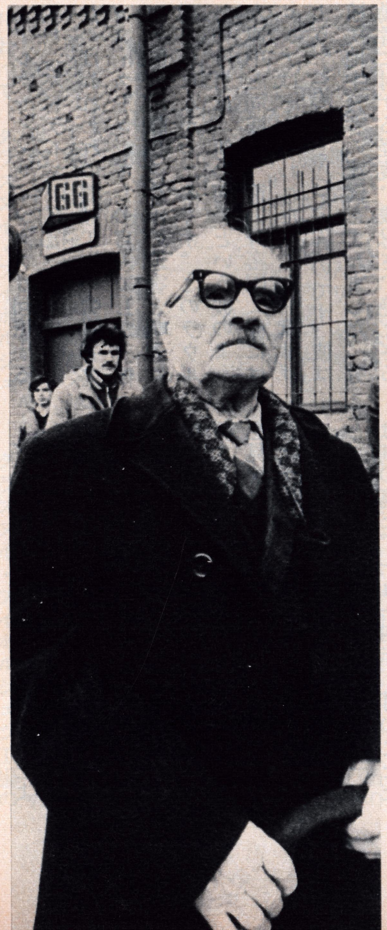
労働者の堡塁

レニングラード市内を流れるネバ川はここブイボルグ地区のあたりで大きく湾曲し、フィンランド湾へと向かう。左岸には古めかしい宮殿や寺院の美しい姿がそびえている。〝ブイボルグ方面〟と呼ばれる右岸にはスベルドロフ記念アルセナル工場、クラスヌイ・ブイボルジェツ工場、メタリーチェスキー工場の建物が並ぶ。これら赤レンガ造りのずんぐりした建物は、まるで堡塁のようだ。事実そうなのだ。それはペトログラードの労働者の堡塁であり、ブイボルグ地区の栄光と誇りであり、その生きた歴史である。

かつて旋盤工で一九三八年から一九四六年までソ連最高会議幹部会議長だったミハイル・カリーニン（一八七五—一九四六）は言った——「ロシアの労働者階級、とりわけペトログラード



◀フィンランド駅前にあるレーニンの像



革命にも参加したアレクセイ・ザイツェフ（本文参照）

革命の伝統――ブイボルグ地区

の労働者階級はそのヘゲモニーのもとに他のすべての労働者を導いたが、ペトログラードではブイボルグ地区の労働者が第1バイオリンを奏でた……」

〝ブイボルグ方面〟という呼び名は二八〇年まえ、皇帝ピョートル一世がネバ河畔にロシア帝国の未来の首都を築いたときに生まれた。すでに当時、ブイボルグ市（レニングラードの北西約一二〇km）に通じる道があるネバ川右岸全体が〝ブイボルグ方面〟と呼ばれていた。この道に沿って平屋の木造家屋が立ち始め、一七〇九年にはピョートル一世の命令でここに、ポルタワの戦いでのスウェーデン軍に対するロシア軍の勝利を記念して聖サムプソニエ教会が建立された。ブイボルグ市への道はサムプソニエ大通りと呼ばれるようになった。ブイボルグ区の幹線道路であるこの道は現在、カール・マルクス大通りと命名されている。

19世紀になるとブイボルグ地区に最初の工業企業が現れ始めた。蒸気機関のための水が手に入りやすかったからだ。また、ネバ川は原料や製品を運ぶのにも便利だった。19世紀末にはブイボルグ地区には約30の大企業があった。それらの所有者は、ご多分に漏れず外国人だった。所有者の名前が工場の名前になっていた――ローゼンクランツ工場、ノーベル工場、レスネル工場といった具合だ。そこでは約七万人の労働者が働いていた。公式な帳簿では〝職工〟と呼ばれていたこれら労働者の生活条件は厳しく、1日に13―14時間働いて得る賃金はごくわずかだった。違反をするたびに罰金を取られた。住宅条件は耐えがたいものだった。当局でさえ、「ブイボルグ方面の住人は墓地の区画より狭いところに住んでいる」と認めていた。何万人もの家のない人々が、艀や橋の下を住み家にしていた。

だからブイボルグ地区は市の〝火薬庫〟でもあった。絶望的なまでに貧しい人々は、巨大な革命的エネルギーを蓄えていた。ロシア資本主義は、マルクスが『共産党宣言』の中で予言したように、ここで〝自分の墓穴〟を掘っていたのである。

一八九四年、ブイボルグ地区の労働者ピョートル・ドミトリエフの家に24歳のウラジーミル・ウリヤーノフ（レーニンの本名）が現れた。彼は労働者のために最初のマルクス主義サークルを組織した。一八九五年の秋には、サークルは全市的な社会民主主義組織に成長転化し、やがて「労働者階級解放闘争同盟」と呼ばれるようになった。レーニンの闘争同盟の指導のもとで、労働者の自然発生的な反乱は自覚的な闘いへと変わり始めた。ブイボルグ地区で一九〇一年にメーデーのストライキが行われ、ここで初めて1日8時間労働の要求が打ち出された。

ブイボルグ地区で最年長の労働者アレクセイ・ザイツェフは、「ストライキのために解雇、一九一三年4月」と書かれた労働手帳を保存していた。これは一九一三年4月に始まった新レスネル工場（現在のカール・マルクス記念工場）労働者の一〇二日に及ぶストライキの形見である。

アレクセイ・ザイツェフは回想する――「ストライキの直接の原因となったのはわれわれの機械工房の労働者ヤコフ・ストロンギンの自殺でした。彼は外国人の職長ラウルの迫害と嘲弄に耐えられなかったのです。このラウルという男は、他の何千という彼のような連中と同様に、遠い野蛮国（彼にはロシアはそう思われた）で〝一旗挙げよう〟と思ってやって来たのです。彼は植民地主義者の流儀をまねました。労働者に対する軽蔑、残忍さ、絶えざる罰金。そのためのいろいろな口実を考えました。急いで歩くと罰金、私語を交わすと罰金、職長に逆らうと罰金、主人の御者に文句を言っても罰金……といった具合です。給料日には賃金の1/3はこれで差っ引かれたものです……」

ストロンギンが自殺すると、怒った労働者はラウルを解雇するよう要求した。管理部は拒否した。労働者は仕事を中断し、市内の多くの企業の支援を受けて、一〇二日間ストライキを打った。プラウダ紙の呼びかけで、労働者はストライキ支援の資金を集め、ストライキ中の労働者[illegible]った。資金は一万八〇〇〇ルーブル集まった。多くの企業は[illegible]政府からの注文を断った。ツァー政府は労働者の団結に危険を感じた。一九一四年6月3日には警察が労働者の集会に発砲した。労働者は弾圧に対して一大政治ストライキで対抗した。ブイボルグ地区にはバリケードが築かれた。

当時メタリーチェスキー工場で働いていた古参ボリシェビキ党員ワシリー・ビノグラードフはその頃のことをよく覚えている。彼は現在88歳。だが、かくしゃくとしており、記憶力も衰えていない。

ワシリー・ビノグラードフは長い人生のすべてをブイボルグ地区と結びつけてきた。彼は腕にある二つの切り傷を見せた。一つは子どもの頃のもので、百姓仕事をしていて鎌で切ったのだ。「おかげでライ麦の刈り方を覚えたよ」とビノグラードフは言った。もう一つは剣の傷だ。一九一四年1月のことだった。国会ではボリシェビキの代議員がツァー政府の世界大戦準備に反対し、軍事予算に賛成することを拒んだ。閣僚会議議長ゴレムイキンが演壇に立つと、ボリシェビキの代議員は拳を振り上げて〝引っ込め！〟と叫び、拳で机をたたいた。ボリシェビキの代議員グループは国会の15の会議から排除された。代議員の不可侵権にもかかわらず、彼らは力ずくで会議場から引きずり出されたのだった。

これらの代議員を国会に選出したペトログラードの労働者は激高した。ブイボルグ地区の労働者は真っ先にデモンストレーションに出た。

ワシリー・ビノグラードフは言う。

「私はメタリーチェスキー工場の隊列にいましたが、デモは平和的なものでした。非武装の労働者に騎馬の憲兵が襲いかかり、乱闘が始まったのです」

ビノグラードフは先頭の方を歩いていた。ふと見ると、馬が後足で立ち、赤い顔にヒゲを生やした警官が馬上で剣を振り上げていた。頭を守ろうとして、ビノグラードフは右手を上げた。剣が振り下ろされた。

「それは私の〝洗礼〟でした。一九一五年に私はレーニンの党に入りました」

非合法の文献を所持していたこととビラを印刷したことのためにビノグラードフは投獄され、そののち流刑の代わりに前線に送られた。一九一七年に2月革命が起きると、彼はペトログラードのメタリーチェスキー工場へもどり、党活動に専念した。ボリシェビキは社会主義革命を準備していた。

レーニンゆかりの地

ブイボルグ地区の特筆すべき出来事となったのは、一九一七年4月3日の、亡命先からのレーニンの帰還だった。ビノグラードフもフィンランド駅へレーニンを出迎えに行った人々の中にいた。

「レーニン帰還の喜ばしい知らせは労働者街や兵舎に急速に広がりました」とビノグラードフは回想する。「夜の10時頃、駅前広場は労働者や兵士で一杯でした。列車がプラットホームに近づく。デッキにレーニンが現れた。中央委員や工場の労働者代表団の代表がレーニンを取り囲む。そのとき新レスネル工場の鍛冶工でボリシェビキのイワン・チュグリンがホームの上のレーニンに近寄りました。『私はあなたの祖国帰還を記念して、あなたに党員証を手渡すよう委任されました。ブイボルグ地区のボリシェビキはあなたを自分たちの党組織の一員だと考えています』と言って、彼はレーニンに№六〇〇の党員証を手渡しました」

レーニンは演説をするよう頼み、労働者、兵士、水兵は彼を助けて装甲車の上に立たせた。レーニンは装甲車の上に立って演説をし、「社会主義革命万歳！」と叫んで装甲車の上の演説を終えた。

一九二四年にレーニンが死ぬとすぐに、建築家シチューコはレーニンの記念碑の制作に取りかかった。資金は工場の労働者が集めた。こうしてクラスヌイ・ブイボルジェツ工場の記念碑『装甲車の上のレーニン』ができ上がった。作業のためには35人の人手が必要だったが、希望者ははるかに多かった。鋳造に必要な数十tの青銅がなかったが、労働者は戦時から取っておいた砲弾の薬きょうを溶かしてそれに充てた……

ブイボルグ地区にはレーニンゆかりの場所が27カ所ある。歴史的な一九一七年10月25日の夜、革命の本部となったスモーリヌイ宮殿までのレーニンの足取りが、大きなパネルに記されている。足取りはセルドボリスカヤ通り35号館4号室から始まる。ここでレーニンはペトログラードでの武装蜂起の準備状況についての報告を聴いた。

10月24日の朝、ブルジョア臨時政府は新聞「ラボーチー・プーチ」の閉刊を命令した。セルドボリスカヤ通りで臨時政府の密偵たちから身を隠していたレーニンは、スモーリヌイへ行く許可を中央委員会に要請した。彼は4号室で『中央委員会への手紙』を書き、その中で、早急に決定的な行動を起こすよう呼びかけ、臨時政府を打倒し、きょうの夕方か夜、権力を掌握するよう提案して、「行動をおくらせることは死に等しい」と指摘した。

10月24日の夕刻、レーニンはボリシェビキ党員エイノ・ラフイを伴ってスモーリヌイへ向かった。敵に気づかれないよう、彼は変装した。古ぼけた外套を着て、鳥打帽をかぶり、スカーフで頰かむりをした。最初は徒歩で、それから路面電車でスモーリヌイに着いた。そして、ただちに蜂起の指揮を執った。

ブイボルグ地区の労働者は赤衛軍部隊に加わり、冬宮の強襲に参加した。古参党員アレクサンドル・コロトコフは回想する。

「私はメタリーチェスキー工場の見習工でした。工場のボリシェビキたちが武装蜂起の準備を始めると、私はすぐに同年齢の仲間たちと一緒に労働者部隊の参謀長のところへ行きました。工場の部隊は約二〇〇人の労働者から成っていました。彼らは軍事教練を受け、武装蜂起に備えていました。私は運よくブイボルグ地区部隊に入り、冬宮の強襲に直接参加しました。強襲のあと、私たちはスモーリヌイを哨戒したり、橋を守ったり、地区内をパトロールしたりしたものです……」

権力を握った労働者

革命後、工場は労働者のものになった。工場には憎らしい所有者の名前に代わって、クラスヌイ・ブイボルジェツ（赤いブイボルグっ子）とかカール・マルクス記念工場といった新しい、革命的な名前がつけられた。

〝工場は、きのうまでは主人のものだったが、きょうからは自分たちのものだ〟という急転換は、労働者の意識の中ではすぐに実現したわけではなかった。

クラスヌイ・ブイボルジェツ工場の古い労働者は次のような出来事を覚えている。鋳造工の作業班がオシャカを作ってしまった。作業班長が弁明して言った――「大したことじゃない。いまは帝政じゃないから、これが理由でひどい目に合わされるようなことはないよ。これはオレの責任だ。だとしたらだれがオレを罰するんだい？」。だが、鋳造工たちは別な風に考えた。全員集会は、責任者を罰して、無報酬で製品を鋳直させることを決定した。

一九二九年1月20日、プラウダ紙はレーニンの論文『競争をどう組織するか？』を掲載した。そこには次のような言葉があった――「何世紀にもわたる他人のための労働、搾取者のための強いられた労働ののちに、いまや初めて、自分のための労働……の可能性が現れている」

レーニンはこの論文を、労働者が権力を掌握するという第一歩が踏み出されたばかりの、革命のすぐあとで書いた。それが発表されたのは、国が社会主義的工業化の道に踏み出した時期だった。党は経済発展5カ年計画を作成し、計画は工場で広く討議に付された。

クラスヌイ・ブイボルジェツ工場の

労働者ミハイル・プチンはプラウダ紙でレーニンのこの論文を読んで、自分の考えが正しかったことを確信した。技術の秘訣を隠したりせず、互いに援助し合って、各人がどれだけの能力を持っているかを示すために、労働者同士、作業班同士、競争させる必要があるのだ。そうなれば、山を動かすことだってできるだろう！

プチンは作業班の仲間に、労働生産性とコストの引き下げについて話し合い、義務を負うことを提案した。義務は署名によって保証し、義務がどのように遂行されているかチェックできるよう、義務をみんなに公表して、そのあと他の作業班に競争を呼びかける、というものだった。だれが勝っても、得をするのは工場である。

ノートの紙にあまり上手でない文字で署名された最初の協定が、貴重な品物として工場の博物館に保管されている。

当時、プチン作業班の7人は、自分たちの思いつきがやがて全国に広がるだろうなどと、知るよしもなかった。数日、数千の作業班が競争に名乗りをあげた。われこそは生産を高め、よい仕事をする！と。国民のイニシアチブのこの巨大な波が、5カ年計画の期限前遂行を可能にした。この運動の発端になったのも、ブイボルグ地区の一労働者だった。

彼はどこに競争の力を見ていたのだろうか？　人間が自分のために働く条件、人間の才能が開花する条件が作り出されたことの中にである。そのときには、一丸となった人々の中から、新しい組織者、新しい指導者、新しい名人が次々に生まれてくるのである。

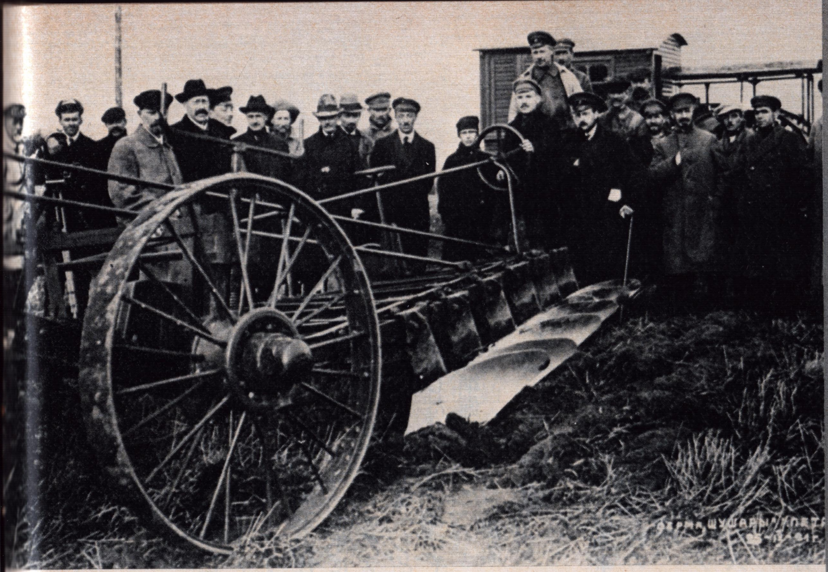
革命的伝統の後継者

ブイボルグ地区が社会主義競争の端緒となった日から半世紀以上が過ぎた。

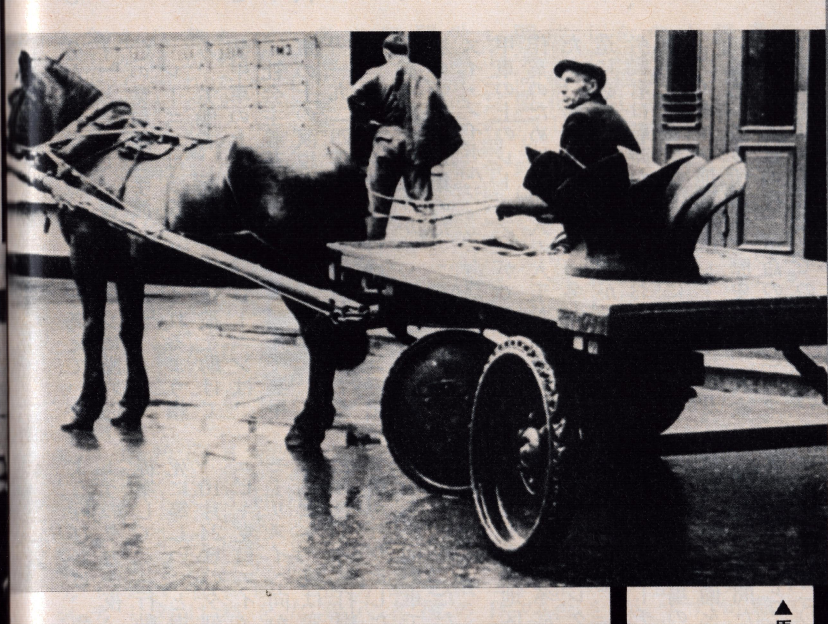
ミハイル・プチンやその他の先駆けの後継者たちは自分の祖父や父親よりも先を進んでいる。現代の労働者は単なる遂行者でもなく、機械の付属物でもない。彼はますます頻繁に探求者に、創造者になっている。いま大多数の者が中等教育を修了しているが、それは決して無駄になっていない。

クラスヌイ・ブイボルジェツ工場ではこのような労働者が技師や学者とともに、何らかの複雑な技術問題を解決するために設置される総合作業班に加わっている。たとえば、溶鉱工のアナトリー・ポドモストコフは技師のヤコフ・クテポフと一緒に、銅を精錬するさいのスラグから貴重な成分を抽出する問題を研究した。何カ月にもわたる研究は実を結んだ。工場は新工程を導入したおかげで、数十tの純粋な銅を余分に得るようになった。アナトリー・ポドモストコフは鉄鋼業省で新方法についての報告をした。冶金学者たちはその方法を高く評価し、他の企業にも導入するよう勧告した。

メタリーチェスキー工場に保存されている写真から



工場で製作した電動すきのテスト（一九二一年）



▲馬車で運ばれる水力タービン第1号（一九二四年）



一九三三年に製造された成層圏気球



古参党員ワシリー・ビノグラードフ



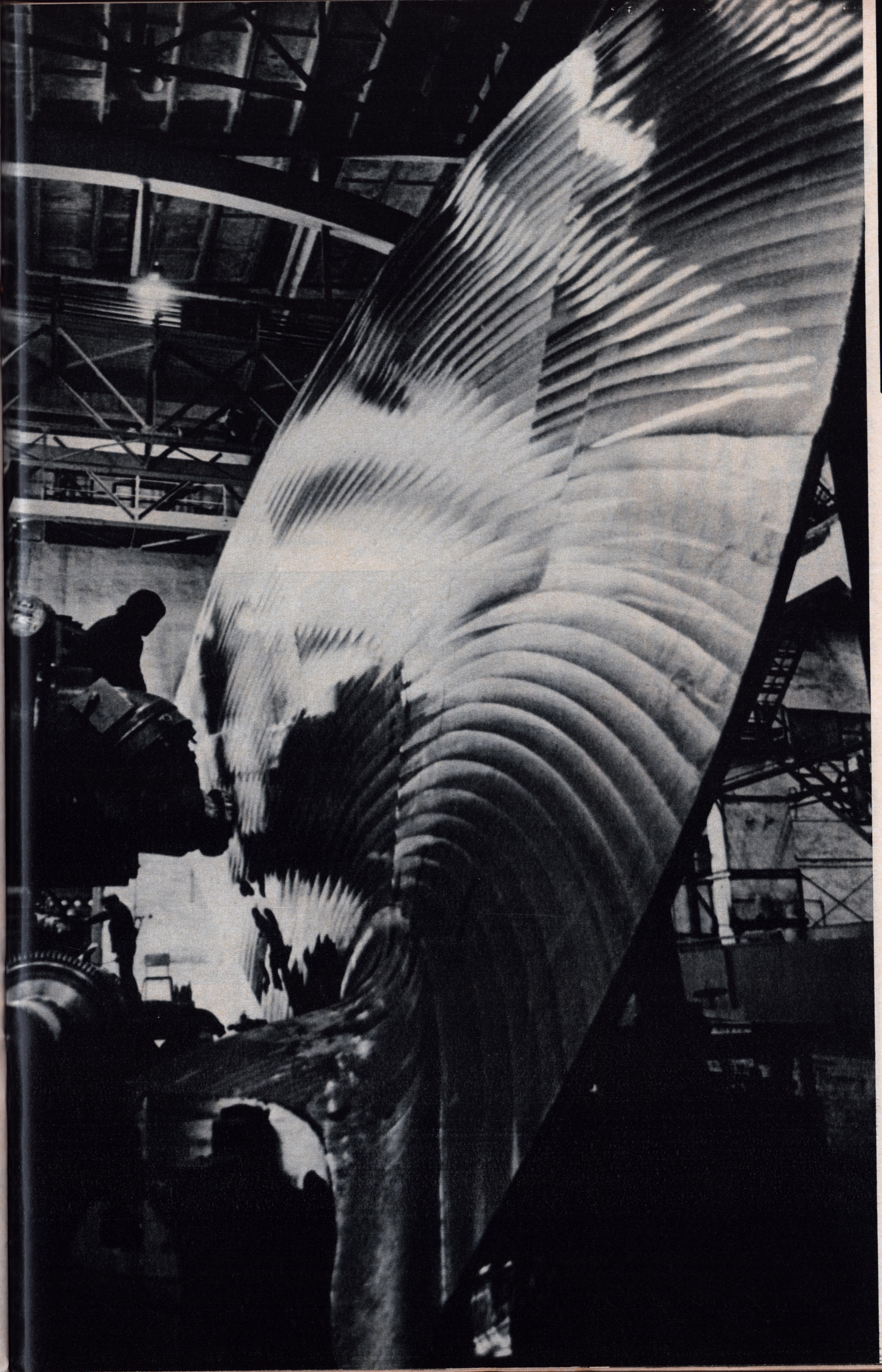
機械分工場を視察する（前列右から）ミハイル・カリーニン・ソ連邦中央執行委員会議長、クリメント・ウォロシーロフ軍事・海事人民委員、ワシリー・ビノグラードフ・メタリーチェスキー工場長（一九二六年、肩書きは当時のもの）。



▲志願して前線へ赴くニコライ・コンドラシン（一九四一年7月3日）。第2次大戦中、多くの労働者が前線で戦った。



イリーナ・ブルイギナ（前列）を長とする女性の戦車修理作業班。後方で女性たちは男性に負けない仕事をした。



▶メタリーチェスキー工場で製造中のチェボクサルイ水力発電所用のタービンの羽根

年金をもらいながら働くニコライ・コンドラシンとイリーナ・ブルイギナ

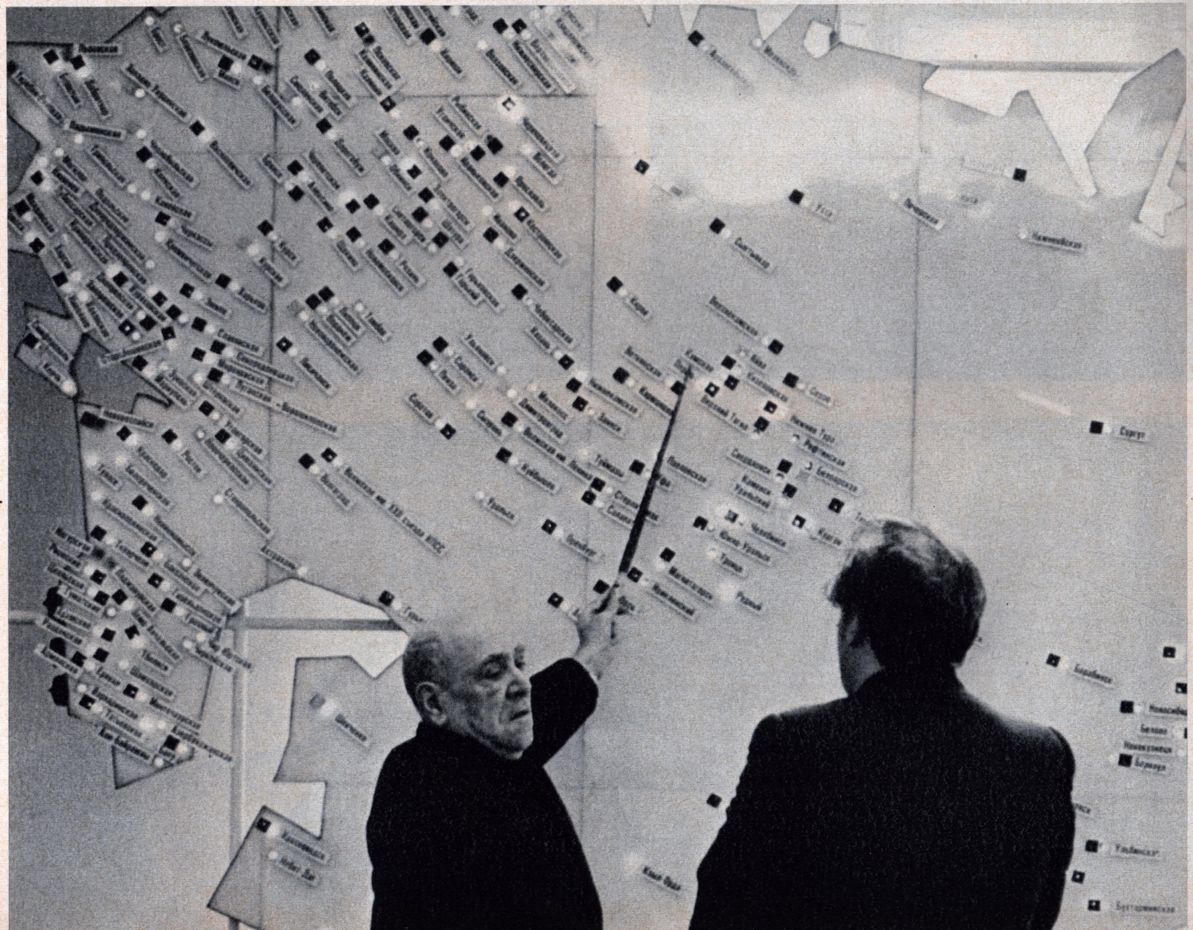


ゲオルギー・コノノフはブイボルグ地区で有名な人だ。彼は社会主義労働英雄（この称号は経済、文化の面で功績のあった人々に授けられる）であり、ブイボルグ地区の作業班長協議会の議長であり、党地区委員会の役員である。

彼は単に優れた労働によってだけでなく、新しいものへの不断の鋭敏な志向によってこの称号をかちとった。コノノフはカール・マルクス記念工場の優秀な旋盤工である。この20年間に工場で生産されたすべての試作機械が、彼のすぐれた技術の恩恵を受けている。彼は新しい一つ一つの注文の遂行を、いかに業務をより正確に、より速く、より簡単に遂行するか、という探求から始めている。

しかしそのような彼の人生にも、経験だけでは足りない、ということを悟る時期がやって来た。46歳で夜間学校に通い、50歳近くで中等教育修了証書をもらった。

コノノフがリーダーになっている作業班はいつも評判が良かった。しかし彼自身は、班全員の努力を結集し、仕事に対する全体の責任を高めるならば、もっと良く働くことができると感じていた。班員たちは、単一の指令に従って働き、各人が自分の仕事の一部に対してではなく、遂行された課題全体に対して賃金を受け取るようになった。もちろん、これはリスクを伴っていた。班にはさまざまな人がいる。古参労働者は経験もあり、賃金も安定しているが、若い労働者はそれよりも稼ぎは少ない。古参労働者は迷惑しないだろうか？　初めのうちはそうだった。コノノフもなぜそうなるのか分かっていた。



「わが社の製品はここで活躍しています」と説明するアレクサンドル・コロトコフ。コロトコフも一九一七年の冬宮攻撃に参加した。

革命の伝統――ブイボルグ地区

古参労働者は皆、自分のために働き、若い人たちへの援助のことなど考えていなかったからだ。そこで班長は模範を示した―― 長年の間に彼の身には少なからぬ巧妙な適応能力、特別な解決策が蓄積されていた。彼はすべてを班の管理にゆだね、若者に自分の技術のあらゆる秘密を明かした。班長の手本に倣って古参労働者も若者を援助した。若手労働者の技能資格が高まり、その結果、班全体の労働生産性と賃金も大幅に上昇した。

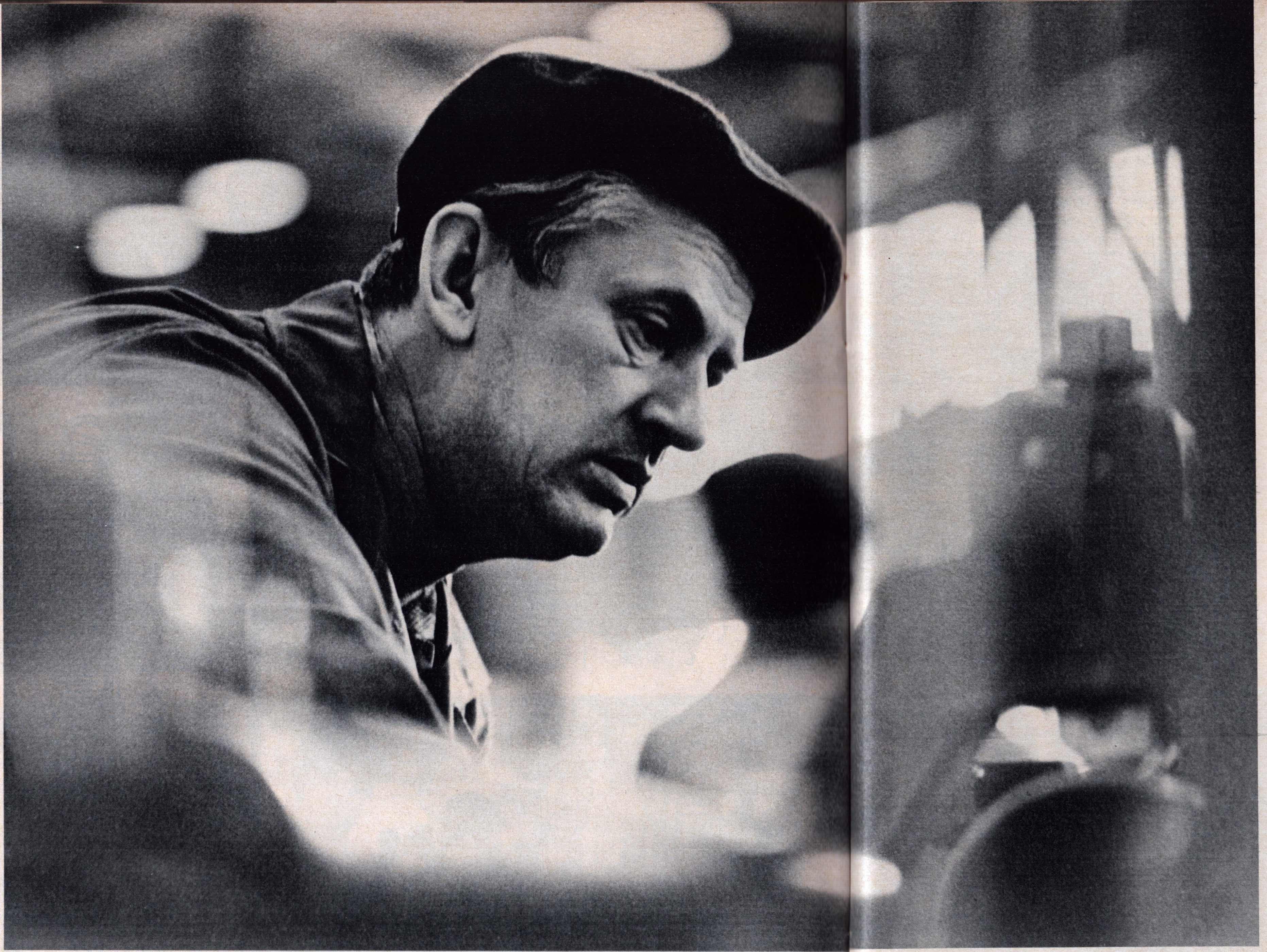
一九二四年にメタリーチェスキー工場で出力二〇〇kWの最初のソ連製水力タービンが製造された。その部品は3台の馬車で工場から運び出された……いまここでは出力一〇〇万kW以上の機械がつくられている。巨大な発電機は一度には目の中に収まらないほどだ！

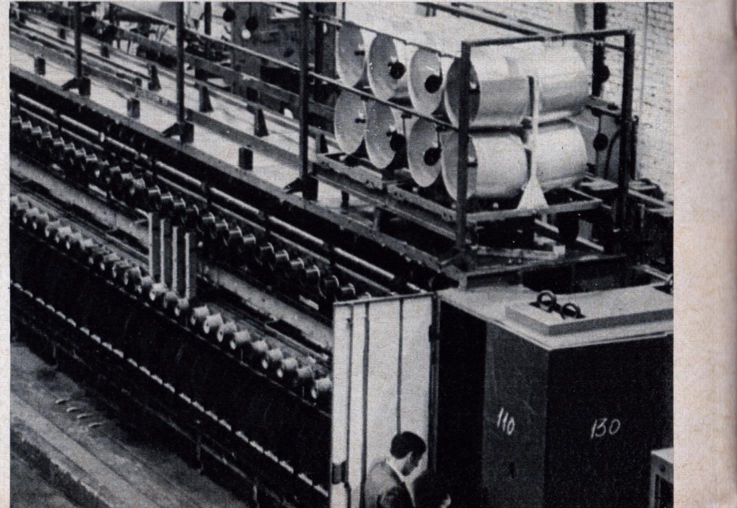
もちろん、科学技術はこの数十年間に巨大な前進をなしとげた。最も複雑な製品をつくる労働者の労働は見違えるほど変わった。しかし労働や生産に対する態度そのものでは、ブイボルグ地区の労働者の現在の世代は自分の光栄ある先駆者たちの経験に頼り、その経験を伸ばし、豊かにしている。

……私たちはブイボルグ地区を歩く。この地区にはいまレニングラード市の四つの区がある。ガラスとコンクリートでできた新しい工場の建物がレンガの壁のそばに続々と建てられている。新しい住宅街はかつて郊外だった土地へと進出した。ブイボルグ地区はレニングラードの他のどの地域よりも速く成長している。

ブイボルグ地区の労働者の縦列は毎年、メーデーや10月社会主義大革命記念日を祝うデモ行進に登場する。それはブイボルグ地区の工場で働く一〇万人を代表する縦列である。そこにはベテラン労働者もいれば、将来の世代である職業技術学校の学生もいる。彼らは、カール・マルクス記念工場の一人の若い労働者がソ連共産党に入党するにあたって次のような言葉で表現した各世代の関係を体現している。

「私を党員に採用するようお願いします。自分の全生活と労働によってレーニンの思想、共産主義の思想に忠実であることを証明し、ブイボルグ地区の光栄ある伝統を守るために、共産党員になりたいのです」







▲旋盤工ゲオルギー・コノノフ（本文参照）は一九八一年に再びソ連共産党レニングラード市ブイボルグ地区委員会の役員に選出された。

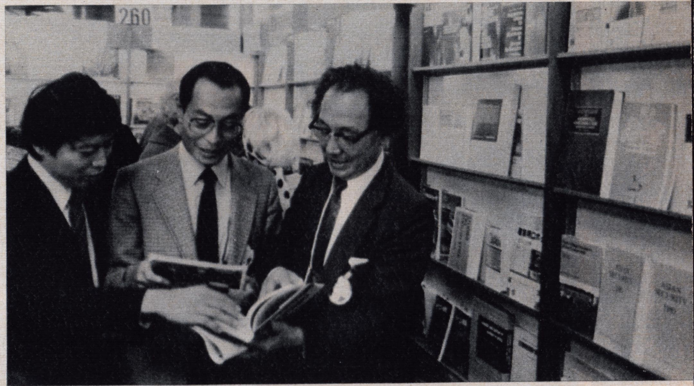
下右 ブイボルグ地区社会経済発展会議で発言するゲオルギー・コノノフ。

下左 カール・マルクス記念機械製作合同（かつての新レスネル工場）は化学繊維織物工場用の紡糸機とドローツイスターを生産している。

2年に一度の出版文化の祭典

――盛況だった第4回モスクワ国際書籍見本市

社団法人 出版文化国際交流会　落合　博康



▲左から筆者、吉野達治・裳華房社長、金子健・日ソ著作権センター代表

下　第4回モスクワ国際書籍見本市には世界96カ国が参加した。

左上　人気を集めた日本書籍の展示会場（筆者撮影）

左下　世界中の二三〇〇を上回る出版社や団体、15の国際機関から出品された書籍がソ連国民経済成果博の2つのパビリオンに所狭しと陳列された。

去る9月6日から12日まで、モスクワのソ連国民経済成果博覧会場において第4回モスクワ国際書籍見本市（ブックフェア）が盛大に開催されました。

現在20を超える国際都市で軒並みブックフェアが開かれている中で、モスクワ・ブックフェアは歴史こそまだ4回目と浅いのですが、その規模と実績において今や共産圏最大のブックフェアであり、東欧圏との最も実りある商談の場として高い評価を受けています。96カ国という参加国数は、最も伝統あるフランクフルト・ブックフェアのお株を奪う程であり、東欧圏諸国のみならず、欧米や日本の出版界にとっても見逃すことのできないフェアです。

今回日本は㈳出版文化国際交流会を通じて38社が参加、約60平方mの日本







会場を構成して約一〇〇〇冊の図書が展示されました。一九七七年（第1回）の初参加以来、日本の図書に対するソ連の関心は高く、エレクトロニクスや建築などの学術専門書から生花・刺繍・空手・指圧などの一般書に至るまで、あらゆる分野にわたって高い関心が寄せられています。

9月6日午前10時、チャイコフスキーのピアノ協奏曲の冒頭が会場一杯に鳴り響くと同時に開会の幕が切って落とされました。世界中から出品された20万冊にものぼる図書が所狭しと一堂に展示される様はまさしく出版文化の祭典といえるでしょう。しかも単にビジネスの場としてばかりではなく、文化交流の場としてもこのフェアは第一級のイベントです。

例年日本の会場はフランスなどと並んで最も人気が高く、あまりの混雑に紛れて本が紛失しないよう常時入場制限を行うほどで人込みの交通整理に汗だくの毎日でした。ビジネスの方でも前回を上回るかなりの成果がありました。日ソ間の翻訳出版のための版権契約は前回の倍以上成立しています。今回結ばれた契約によって両国の優れた図書がお互いに翻訳され、日本とソ連の一般読者の手に渡される日も遠くないでしょう。

「平和と進歩に奉仕する書籍」をモットーとするモスクワ・ブックフェアが、今回はからずも国際的な波紋を呼んだ不幸な事件のさなかで開かれたことは誠に残念という他はありません。しかし、このように国際間の緊張が高まっている時にこそ文化交流の出窓は更に大きく開かれていなければなりません。その意味でも、出版物を通じて国際間の相互理解を深めるという使命を持つモスクワ・ブックフェアが果たすべき役割は益々大きいといわなければなりません。





第1パビリオンの展示場。壁の文字はこのブックフェアのモットー――「平和と進歩に奉仕する書籍」（筆者撮影）

上 ラードガ出版所のV・ネズナモフ所長（右から3人目）と懇談する日ソ図書株式会社の代表・藤川 亨氏



下 2つのパビリオンに展示された世界中の書籍は二〇万点にのぼった。



一般の入場者と話す国際文化出版社の鍵山松彦編集長



下 ブックフェアはモスクワ市民にも大変な人気だった。



父祖伝来の領地スパスコエ・ルトヒノホのツルゲーネフの家　結婚を記念してここを訪れる若いカップルも多い

文豪ツルゲーネフが愛したロシアの自然

カメラ　Y・カーベル

ことしはロシアの文豪イワン・ツルゲーネフ（一八一八―一八八三）の生誕一六五周年（11月9日）、没後一〇〇周年（9月3日）にあたる。ツルゲーネフが没した日はユネスコのカレンダー〝偉人と歴史的事件の記念日〟に記載されている。

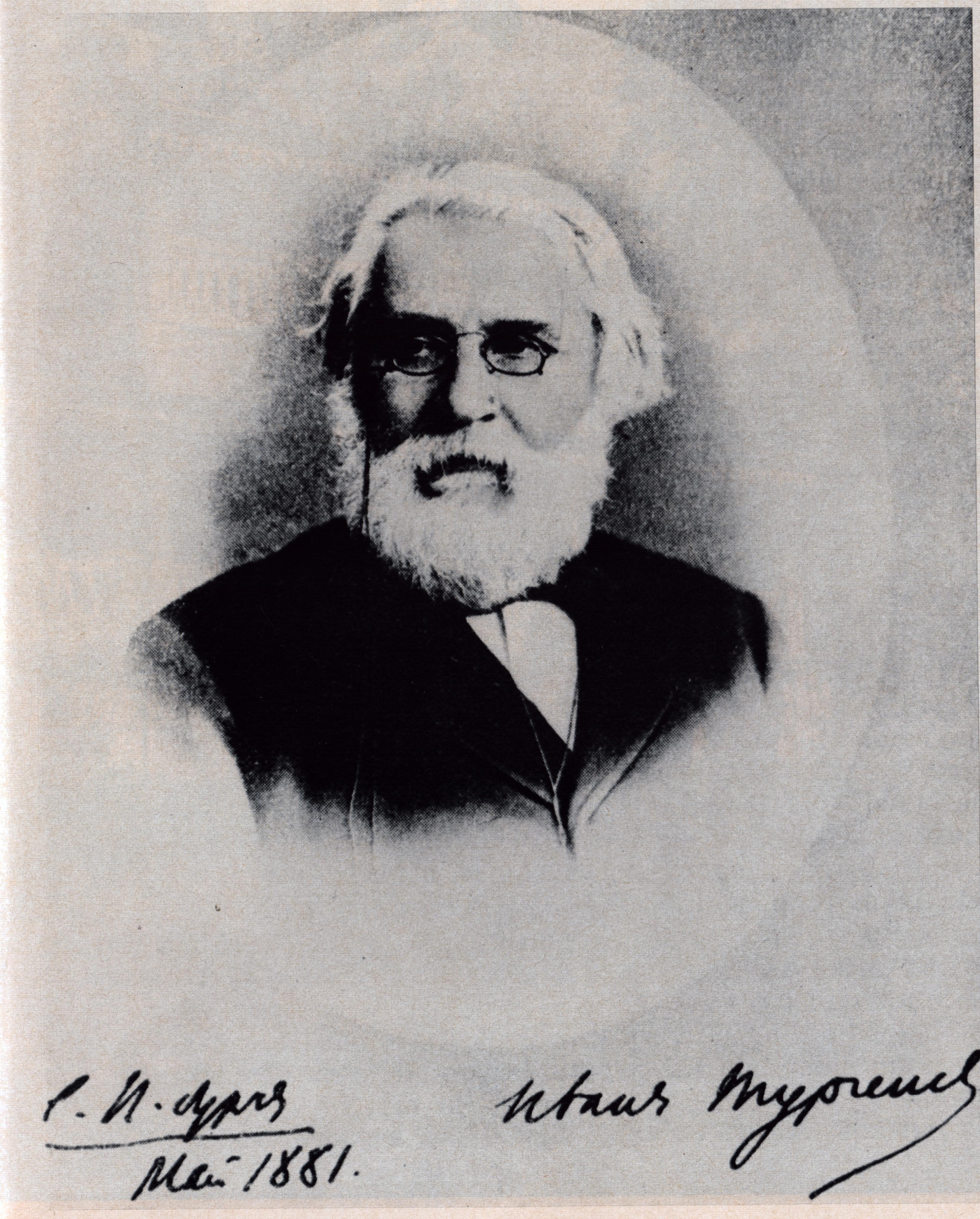
「いま私はふたたび古巣にいます」、「私は家にいます」――ツルゲーネフが父祖伝来の領地スパスコエ・ルトビノボから友人にあてて出した手紙の多くは、このような書き出しで始まっている。

ロシアの古都オリョール市（モスクワの南西四〇〇km）からスパスコエ・ルトビノボまでは70km。道の両側には中部ロシアの半ステップ地帯に特徴的な風景が展開する。野原、若木林、谷、丘、ヤナギが繁る小川……ここがツルゲーネフの故郷である。モスクワにいても、パリにいても、ペテルブルグにいても、ロンドンにいても、ツルゲーネフはつねに生家であり、故郷であり、〝詩の揺りかご〟であったスパスコエ・ルトビノボに心ひかれていた。「果てしない野原が広がるところへ」「村へ、ボダイジュがあんなにも大きくて、木陰を投げかけている薄暗い庭へ、スズランがあんなにも清らかに香り、エニシダが水面に頭を垂れ、太ったカシワの木がヤナギの茂みの上にそびえ、アサとイラクサが匂う薄暗い庭へ……」つねに心ひかれていた。ここに立つと、ツルゲーネフの「周囲一〇〇〇露里四方は故郷ロシアである」という文句が思わず口をついて出る。

オリョールで生まれたツルゲーネフが初めてスパスコエ・ルトビノボへ行ったのは、まだ3歳にもならないときだった。ここでツルゲーネフは6編の長編小説のうちの5編を書き、多くの中編小説や短編小説を書いた。「ここの空気は思想に満ちているようだ」と彼は言った。

レフ・トルストイは初めてスパスコエ・ルトビノボを訪問したあと、一八五六年5月31日付の日記の中で、ツルゲーネフの特異な、複雑な個性とロシアの自然との一体性を深く分析して、次のように書いている――「彼の家は私に彼の本質を見せてくれ、多くのことを説明してくれた」

一八三九年と一九〇六年の2度の火事で、この家は文字通り消滅した。残っていた土台によってまず、ツルゲーネフが晩年をすごした建物の部分の復元が可能になった。写



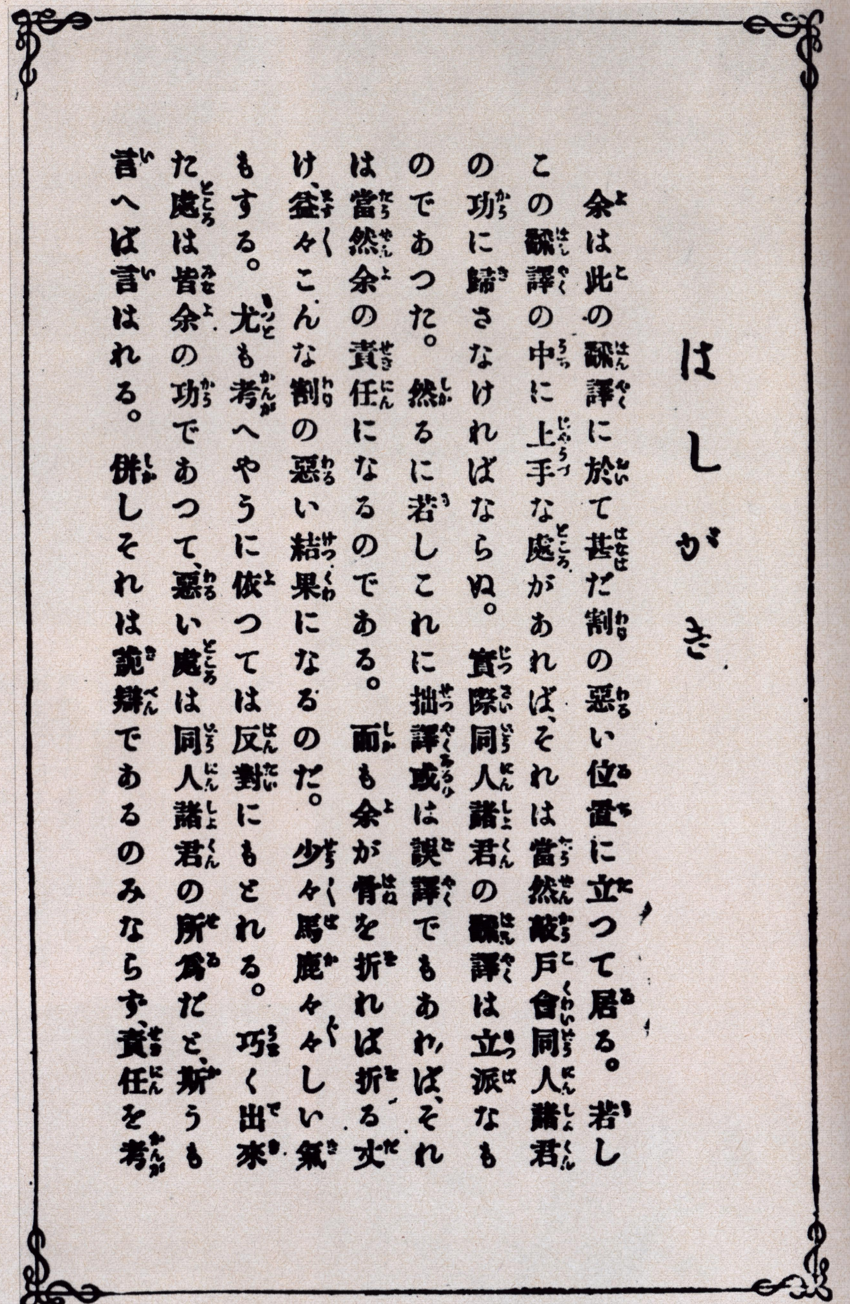
右 イワン・ツルゲーネフ（一八一八 一八八三）

左 日本語訳『猟人日記』初版本（一九〇九年）の戸川秋骨のはしがき

真や絵や回想録を研究して設計図を作成し、建物を復元するのに、ほぼ10年かかった。建物は一九七六年にようやく当初の姿で完全に復元され、記念館として公開された。

「ツルゲーネフの屋敷を復元するにあたって私たちは、すべてを正確に、ということに心を砕きました」と語るのは記念館長で生涯をツルゲーネフの研究に捧げてきたボリス・ボグダノフ。「私たちは作家自身が使った品物をたくさん集めることができました。それが本物だということは作品や手紙によって検証することができます。ですから、建物自体は新しくても、その中にある物はすべて往時の、ツルゲーネフの物だと言ってもいいでしょう」

たとえば、短編小説『旅団長』の中で描かれている英国の〝リバース父子〟商会の時計、書机、椅子、愛用のソファなどがそれだ。ツルゲーネフはスパスコエ・ルトビノボからフランスの作家フローベールにあててこう書いている——「あなたは私の住居の様子を知りたがっていましたね。木造のとても古い家で、小割板を張り、薄柴色の水性ペンキが塗ってあります。家の前面には木づたがからまったベランダがあり、両方とも緑色


はしがき

余は此の飜譯に於て甚だ割の悪い位置に立つて居る。若しこの飜譯の中に上手な處があれば、それは當然蒲戸會同人諸君の功に歸さなければならぬ。實際同人諸君の飜譯は立派なものであつた。然るに若しこれに拙譯或は誤譯でもあれば、それは當然余の責任になるのである。而も余が骨を折れば折る丈け、益々こんな割の悪い結果になるのだ。少々馬鹿々々しい氣もする。尤も考へやうに依つては反對にもとれる。巧く出來た處は皆余の功であつて、悪い處は同人諸君の所爲だと、斯うも言へば言はれる。併しそれは詭辯であるのみならず責任を考

に塗ったトタン屋根です」（一八七六年6月23日付）。「家はあまり暖かくありませんが、家具は立派です。すばらしい書机と葦で編んだ2人掛けの肘掛椅子！ さらに、非常に危険なソファがあります。横になったとたんに寝込んでしまうのです。私はできるだけそれを避けています」（一八七六年6月18日付）。

膨大な蔵書もまたスパスコエ・ルトビノボでのツルゲーネフの熱心な仕事ぶりをうかがわせる。屋敷のかなり正確な描写（ツルゲーネフ自身が「すべてがありのままに描かれている」と書いている）がある中編小説『ファウスト』の中では、蔵書について、つねにどこへでも持ち歩いた本と並んで、両親や祖母、曾祖母の本さえあった、と書かれている。

ツルゲーネフがやはり何年か暮らしたことのある傍屋には、文学記念品が展示されている。作家の私物の中では、狩猟用具が注意をひく。熱心なハンターでもあったツルゲーネフは、オリョール州内をくまなく歩きまわっていた。だが、彼は猟の成果にだけ魅せられていたのではなかった。根っからの芸術家であったツルゲーネフは、狩猟からもインスピレーションを汲み取っていたのである。郊外の村の名、住民のいかにもロシア的な姓、地元の人々との出会いや、人々から聞いた土地の歴史、風景—— これらすべてがツルゲーネフの作品の中でロシアの生活の鮮明な情景に変わり、独特のツルゲーネフ的詩の世界になっている。

ツルゲーネフはロシアの作家であるだけでなく、世界的な作家でもある。スパスコエ・ルトビノボの記念館や作家が生まれたまちオリョール市の博物館の展示品はそのことを納得させてくれる。オリョール市の博物館はソビエト政権樹立2年目の一九一八年に開設された。ツルゲーネフの作品は世界のほとんどすべての言語に翻訳されている。オリョール市の博物館のホールの一つには、作家の生前に外国で出版されたいくつかの作品が展示されている。『猟人日記』のドイツ語版とフランス語版、『貴族の巣』のフランス語版（パリ、一八六一年）、『父と子』の英語版（ニューヨーク、一八六七年）、『けむり』のフランス語版（パリ、一八六八年）などがそれだ。別のホールにはブルガリア、ハンガリー、ポーランド、チェコスロバキア、インド、日本などで出版された作品が展示されている。

ツルゲーネフは欧州の多くの国へ行き、フランスで長年をすごした。博物館にはフランスのオペラ歌手ポリーヌ・ビアルドー夫人との長い交際を物語る展示品もある。夫人のアルバムのわきに、夫人あ



「……暗い澄んだ空が神秘的な壮麗さをたたえて私たちの上に掛かっていた……焚き火だけが静かにはぜ、少年たちがそのまわりに座っていた……」（『猟人日記』の中の『ベージンの草原』より）。この作品に描かれているように、いまでも夏休みには子どもたちが、炎天を避けて夜、馬を放牧に連れ出す。

左上　ツルゲーネフの書机。ここで長編小説『父と子』（一八六一年）が書かれた。壁の肖像画は作家の友人でロシアの文芸評論家ベリンスキー（下）とやはり友人で俳優ミハイル・シチェプキン。隅の聖像画はイワン雷帝の時代（16世紀）からツルゲーネフ家に伝わるもの。

左下　「……日が暮れてきた。夕焼けが火事のように燃え出し、半天を包んだ。太陽が沈む……」（『猟人日記』の中の『森と広野』より）。ツルゲーネフは幼い頃からスパスコエ・ルトビノボの自然をこよなく愛した。



てのツルゲーネフの手紙が添えられている――「私は喜んで言いましょう。あなたよりすばらしいものをこの世で見たことがない、と。人生の途上であなたに出会ったのは生涯の最大の幸福だった、と。あなたに対する私の忠誠と感謝は無限であり、私が死ぬまでつづくだろう、と」

ツルゲーネフは多くの外国語――フランス語、ドイツ語、英語、イタリア語、スペイン語を自由に読み書き、話すことができたし、ポーランド語を学び、ラテン語で書くこともできた。ツルゲーネフはペテルブルグ（現レニングラード）大学を卒業したのち、ベルリン大学に学んだ。



右下　ツルゲーネフの傑作の一つである〝猟人日記〟は一八四七年から一八七四年までに発表された25編の独立したスケッチ風の短編を集めたもので、この中でロシア文学史上初めて、ロシアの農民の生活が単一の生きた社会組織として感じられるように描かれている。ここに紹介するのは一八八三年サンクト・ペテルブルグ刊〝I・S・ツルゲーネフの〝猟人日記〟のために有名な女流画家エリザベータ・ビョームが描いた（上から）〝ホーリとカリーヌイチ〟、〝クラシーバヤ・メーチャのカシヤン〟、〝エルモライと粉屋の女房〟のさし絵。









博物館の展示品はツルゲーネフの作品がどのようにして作られたか、作品が出るたびに、特に長編小説『父と子』と『その前夜』が出たあとに燃え上がった政治論争がどのようにして展開されたか、詳細に跡づけている。前記の二つの長編小説の主人公バザーロフとインサーロフは、単なる芸術的形象であるだけでなく、最新の社会的、哲学的諸潮流に精通した、教養ある、当時の先駆的な活動家でもあった。

ツルゲーネフはプーシキン、ゴーゴリ、サルティコフ＝シチェドリンの作品をフランス語に訳すなど、翻訳の面でもたくさんの仕事をした。トルストイの作品を最初に外国語に翻訳したのもツルゲーネフだった。それと同時に、彼はフランスやドイツの作家、詩人の作品をロシアに紹介する仕事も活発に行った。ツルゲーネフはフローベール、ジョルジュ・サンド、メリメ、ゾラなどのフランス人作家と親交が厚かった。「彼のような人間は、世界のすべての理性ある人々から愛されるだろう」とモーパッサンは書いている。

博物館にはモーパッサンの肖像画が掛かっており、そのわきにツルゲーネフに対する彼の告白が書かれている――「あなたはずっと以前から私にとって教師でした。しかし、あなたを研究すればするほど、あなたの才能は私を驚かせます。あなたの文体の情熱と同時に抑制、人間を描くときの思いやりと風景に込められた思想が私を狂喜させます……」

展示品の中でも特に興味深いのは、古くなって黄ばんだ一冊の本だろう。それはプロスペル・メリメの訳による『父と子』のフランス語版である。この本はきわどい運命をたどった。表紙にはソビエト作家ボリス・ポレボイが次のような銘を書いている――「この本はオリョール市で一九四三年8月5日、ツルゲーネフ博物館の廃虚の残骸の中から発見された……」。いまではこの言葉は信じられないほどだ。しかしこのすばらしいオリョール市は、ヒトラー占領者によって廃虚と化したのだった。

スパスコエ・ルトビノボには、ツルゲーネフが植えたカシワの木のすぐそばに、ソビエト兵士の共同墓地があり、そのわきにオベリスク〝英雄たちへの永遠の言葉〟が立っている。一九四三年7月にクールスク大会戦（本誌一九八三年第13号参照）が開始されるまで、1年半にわたって前線はスパスコエ・ルトビノボから数kmのところにあった。いまでこそここは静かだが、それは生命をかけてわが国の





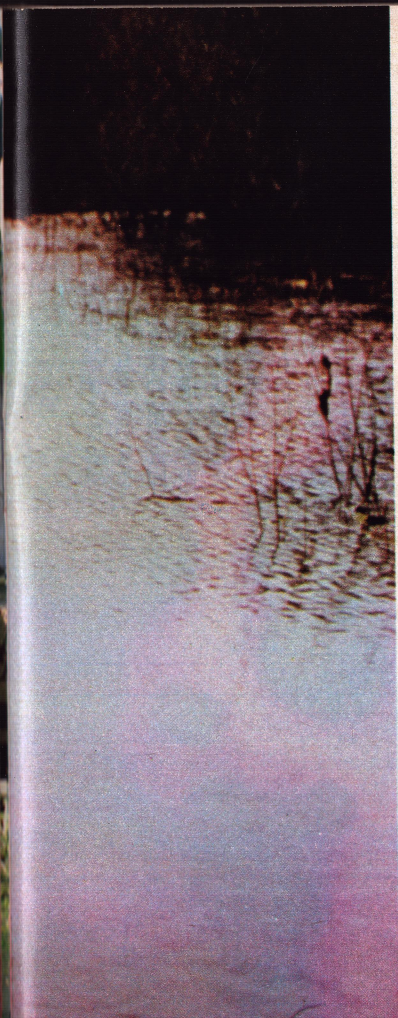
右　ツルゲーネフの家の居間
中　ツルゲーネフが愛用したソファ
左　ツルゲーネフの母方の親類ルトビノフ家の墓にある廟

文化財を守った英雄たちのおかげである。

ツルゲーネフが最後にスパスコエ・ルトビノボへやって来たのは一八八一年。このとき彼は、もはやふたたびロシアにもどれないだろうなどとは夢にも思っていなかった。数カ月後、彼はパリで重病に陥り、故郷へもどるという願いはかなわぬものとなった。彼は友人である作家のポロンスキーに書いた――「スパスコエへ行くことがあったら、家や庭やカシワの若木に、恐らくもう決して見ることがないであろう故郷に、私からよろしくと伝えて下さい」

ツルゲーネフはペテルブルグのボルコボ墓地に葬ってくれるようたのんで、パリ郊外のブジワールで死んだ。遺志はかなえられた。警察の禁止にもかかわらず、作家の野辺の送りには四万人が集まった。真っ先に棺に花輪を捧げたのはスパスコエ・ルトビノボの





右上　「6月の最後の日。周囲一〇〇〇露里四方は故郷ロシアである」とツルゲーネフは散文詩『農村』の中でうたった。美しいスパスコエ・ルトビノボとその周辺はツルゲーネフの創作の故郷でもあった。

右下　スパスコエ・ルトビノボの近くにあるペトロフスコエ村は当初ルトビノフ家の世襲の領地だった。ツルゲーネフは猟銃を携え、犬を連れてしばしばこの辺を歩きまわった。

岸辺の谷間から湧き出る泉の水がイスタ川と合流する美しい場所は、いまでも往時と同様に〝マリーナの泉〟と呼ばれている（『猟人日記』の中に同名の短編がある）。



農民たちだった。

作家の命日には、特に大勢の人々が記念館を訪れる。彼が不朽の名声をかちとったこの世で、彼についての記憶を敬虔に保存しているのは、多分、大地そのものだろう。ツルゲーネフが花弁を手紙の中に入れてビアルドー夫人に送ったライラックが、作家の生前と同じように咲き、作家が植えたボダイジュの並木が枝をそよがせ、庭では小鳥たちがさえずっている。一八五五年にツルゲーネフが長編小説『ルージン』を執筆したあずまやもそのまま立っている。そのときツルゲーネフが心の奥から発した言葉は、生活そのものと同様に、いまも真実に満ちている――「ロシアはわれわれのうちのだれがいなくてもやって行けるだろう。だが、われわれのうちのだれひとりとして、ロシアなしにはやって行けないだろう」



5年振りのボリショイ・バレエ

バレエ史家　薄井憲二



9月から11月にかけて日本でロシア・ソビエト芸術祭（主催・同芸術祭実行委員会、ジャパン・アーツほか）が開催されている。ソ連から来日した多数の一流アーチストが東京、大阪をはじめ各地でバレエ、音楽、演劇の公演をして好評を博した。本号ではそのうち、ボリショイ・バレエとレニングラード・ボリショイ・ドラマ劇場の公演について日本のバレエ、演劇関係者に感想や意見を聞いた。併せてボリショイ・バレエの芸術監督ユーリー・グリゴロビチにインタビューした（編集部）。

ボリショイ・バレエ団が五年振りに来日した。総勢一五〇名という大掛かりな引っ越し公演で東京、大阪は勿論のこと、北は宇都宮から南は鹿児島まで一六の都市を一カ月以上かけて巡演した。

演目は極め付きの『白鳥の湖』、現存する最古のバレエの一つ『ジゼル』のほか、総帥ユーリー・グリゴロビチの新演出による『ロミオとジュリエット』である。この中で最も注目すべきは最後にあげたこのシェークスピア原作の作品である。

作曲者プロコフィエフはこの曲を一九三五年に完成したが、種々の理由があって初演は一九三八年にのびた。そしてその場所はソ連ではなくチェコのブルノ、振付者はキエフ生まれのチェコ人、モンテカルロ・ロシア・バレエ団にあって優れた演劇的舞踊家と謳われたワーニャ・プソタである。ソ連での初演はその二年後、レオニード・ラプロフスキーの手によりレニングラードのキーロフ劇場で行われた。

この『ロミオとジュリエット』は舞踊と演劇を成功裡にないまぜた、ソ連バレエの一時期を画する作品として非常に高く評価された。一九四六年にはモスクワ・ボリショイ劇場にも移植され、同五六年には不世出の名バレリーナ、ガリーナ・ウラーノワを主演者に迎えた映画も製作されて、世界中のバレエ・ファンの賞賛を浴びた。

ボリショイ劇場の現首席メートル・ド・バレエ、ユーリー・グリゴロビチは、この定評ある作品に挑戦し、自己の舞踊に対する主張を具現しようと試みたのであるから、並々ならぬ自信も持ってのことに違いない。

グリゴロビチはまずこれをパリのオペラ座バレエ団を使って演出した。一九七八年のことで、一九七六年の『イワン雷帝』につづく二度目のパリ遠征であった。幸いこのときの公演は成功を収め、演劇の流れを象徴的に舞踊の言葉でとらえた、ユニークな作品という評価を得た。

しかしグリゴロビチは、この成功に飽き足らず、尚も原典の点検を重ね、初演時にカットされ、一度も演奏されたことのない楽曲を何曲か発見した。そしてこれらの曲を追加し、主役の人物像を更に明確に浮き彫りにする手法を考案し、現在の『ロミオとジュリエット』が完成したのである。

それは台詞で表現されるものは何ひとつ逃さず、その奥にひそむ深い意味さえも舞踊の言葉で提示するという、高度に完成された作品であった。一九七九年のモスクワ初演以来絶えることなく上演され、海外公演にも必ず持参されて好評を博している。

またボリショイ・バレエの強みのひとつはその踊り手の層の厚さにもあろう。今回はそのベスト・メンバーを選りすぐっての来日だが、本拠のモスクワには、通常の公演を支障なく行えるほどのバレリーナ、舞踊手が揃っているのである。

来日メンバーにはタチヤナ・ベススメルトノワ、リュドミラ・セメニャカ、ナジェジダ・パブロワなど、既にわが国のバレエ・ファンにはおなじみのバレリーナが顔を揃えているが、私は、古典の作品『ジゼル』の第一幕で、〝村人のパ・ド・ドゥ〟という重要なパートを踊る、マリナ・シドロワという踊り手に注目することをおすすめする。

舞踊家に最適の、ほっそりした小柄な体軀、美しい曲線を描いてのび、しかも強靱な爪先、中高の上品な顔立ち、すべてが明日のバレリーナとしての資質を物語っている。前述の村娘を踊っては難しい技術を楽々とこなし、巧まざるコケットリーを見せて観客を魅了する。

男性舞踊手のうちではアレクセイ・ラザレフが最大の成長株かも知れない。現代の男性舞踊手は、技術に優れ、バレリーナの支え役となっているだけでは不十分で、強烈な演劇的表現力を具えていなければならない。純粋な古典の演目、『眠れる美女』の青い鳥、グリゴロビチの最新作『黄金時代』の悪漢ヤーシカを得意とするラザレフはまさにその要求を満たす踊り手で、近着のソ連専門誌「ソビエト・バレエ」にも若手の代表として大きく紹介されている。

このほか、群舞の一員として踊っている人達も、話して見ると本国では重要なパートを踊っていることが多く、ボリショイ・バレエが世界一の名をほしいままにするのも、強力な指導者に加えて、この踊り手たちの力にあると痛感せざるを得ない。

ボリショイ・バレエの芸術監督

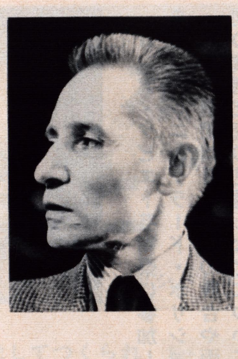
グリゴロビチにインタビュー



マリナ・シドロワ



アレクセイ・ラザレフ



9月14日、ボリショイ劇場バレエ団の東京公演初日（NHKホール＝『白鳥の湖』）の幕間に、本誌記者は同バレエ団の芸術監督で首席バレエ・マスターのユーリー・グリゴロビチ（写真）を楽屋に訪ねて、国際的に注目を集めているこの振り付け家の創造の源泉になっているものなどについてインタビューした。

――あなたの場合、創造意欲をかき立てるものは何なのです？

創造の源泉というのはいろいろありますが、私の場合一番多いのは音楽と文学かな……音楽はそれが気に入れば、聴きながらすぐにいろいろな舞踊の仕草が目に浮かんで来る。音楽は即座に舞踊の形象を生み出しますからね。それに文学。まだ音楽がないうちから、あ、これは舞踊にしてみたいと思わせる作品があります。特に私は主題のあるものが好きですから……　この場合は最初に主想があり、ドラマトゥルギー（戯曲作法）があり、それをもとに作曲家に曲を依頼し、それからバレエ芸術の形象がふくらんで来る。でも、創作のヒントを得るものはいろいろありますよ。芝居、映画、日常の何気ない会話……

――創作のインスピレーションが湧くように、感覚を磨くとか、心を養う努力がいりますか？

努力というよりこれはもう芸術家の才能の問題だろう。誰でも独創的なもの、新しいものを創作したいと思う。だが、努力だけでは出来ないのです。心を養うというのは、それはプロですから、いつもそのことばかり考えているわけです。

――特定のバレリーナや舞踊手のために創作することもありますか？

私の場合、たいてい先にダンサーでなく形象がある。その形象にふさわしい踊り手を探すのです。最近はナターシャ（プリマで夫人のベススメルトノワ）と仕事をすることが多くなったんだが（私の形象の具現化に近づいて来たから）、彼女との創作は楽しい。新しい舞踊の最初の踊り手が私の意図することを理解し、互いに高めあい、相互に何かを得ながら仕事が出来る時もあるし、そうじゃなくて結局、ありがとう、さようなら、と別れてしまうそんなダンサーとの出会いもあります。

――バレリーナ志望の女の子が多いのですが。

女の子は誰でも一度はバレリーナか女優さんになりたがるものでしょう。男の子は消防士とか運転手になりたがるんだ。だが、手足がどんなによくてもそれだけではあまりにも少なすぎる。バレリーナの素質が、天分が、才能がなければ。バレエの才能というのは肉体的現象ではない。バレエは肉体を通して自分の精神的世界を表現しなくてはならないのです。もしその精神的世界がなかったら？　どんなにいい手足をしていても、それが何も語らなかったら？　才能がいい教育と結びついた時いいアーチストが生まれます。

――バレエの場合、家庭環境は才能と関係があるでしょうか？

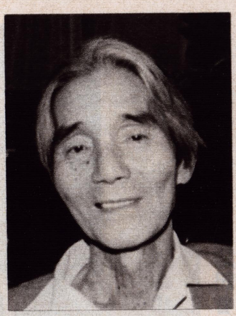
ないとは言えないでしょうが、平凡な両親からすばらしい子どもが出来る時もあるし、とても優秀な両親からまるで才能のない子どもが出来る時もあるしね。こういうのをロシア語では、自然が子どもの代に休養をとっていると言っていますが……

――面白い表現ですね。最後に、作品を通して訴えたいものは何でしょうか？

バレエも他の芸術と同じように、人間を感動させている諸現象を特殊な手段を通して表現しています。哲学的な感動にとっては言葉のあるドラマの方がいい伝達手段でしょう。バレエはエモーション（情緒）に結びついた芸術ですから。バレエの基盤は人間に存在する情緒的感情を情緒的に伝達することだといっていい。人間の世界を、芸術家の理解を通して反映し、生活・生命の新たな側面を人々に見せたり、人々を考えさせたり、自分が気に入ったこと、憎悪しているものを人々に感じさせること――あらゆる芸術と同じように、人々の心をゆさぶり、動かすことがバレエ芸術の課題だと思う。ヒューマニズムこそが芸術の基盤――これが私の持論です。あらゆる反人間的な現象は芸術には受け入れられません。真の、偉大な人間的特性を表現すること――これが芸術の課題です。

BDTとトフストノゴフ

——宇野重吉氏に聞く



ロシア・ソビエト芸術祭に参加して来日したレニングラード・ボリショイ・ドラマ劇場（BDT）の舞台や両国間の演劇交流の見通しなどについて、劇団民芸の俳優で演出家の宇野重吉氏（写真）に本誌記者がインタビューした。

——宇野さんはこれまでずい分ソビエトの演劇をご覧になっていると思いますが、今回のBDTの公演について、またBDTという劇団についてどういう印象をお持ちですか？

忙しかったので、東京公演最後の『ワーニャ伯父さん』だけ見ました。こんどの上演作品のうちで『小市民』は以前にレニングラードで見ていましたが、あとの二つ（『検察官』と『ある馬の物語』）はまだ見ていません。『ワーニャ伯父さん』の舞台のでき上がりは完璧だと思いましたね。美術、音や音楽の使い方、俳優の演技——非常にすばらしい出来でした。よほどの訓練の結果でしょう。だから、芝居を見たぼくらの仲間たちは大きな勉強になったし、反省させられたと思います。

劇団については、一九五六年にトフストノゴフが首席演出家になってから、彼なりの強い力で新しい芝居を作るチームを再編成して、見る見るうちに変わっていった劇団だという印象を持っています。そのためには若干の犠牲も伴ったらしいけれど、劇団という芝居をつくる一チームの管理、運営というのはなかなか難しいものです。ぼくは民芸という劇団をみんなと一緒にやっていますから分かりますが、トフストノゴフの場合はもっとどでかいスケールの劇団ですからね。違うのはぼくらは全くの私企業であり、自分たちで劇場を借り、自分たちで衣装を作って、自分たちで大道具を頼んで、入場料をもらって、といったぐあいですが、彼の方は国家的援助があり、経済的な裏付けがあるわけですから強いですよ。恐らく彼の劇団から新人がどんどん育ってくるでしょうし、彼もきっと優秀な才能を見つけて、教育していくでしょう。だから、彼の劇団のこれからの成長をぼくは楽しみにしています。とにかく、彼の劇団には古くさい、はぎおとさなければならんという感じがないようですね。

それから、人から聞いた話では、東京公演の前半は空席が目立ったとのことで、気の毒でした。本拠のレニングラードでは切符を手に入れるのも大変な劇団ですから、こんなことは俳優たちにも初めてのことではなかったでしょうか。

このことで、日本はボリショイ・ドラマ劇場を受けつけなかったと伝えられては困りますね。日本人は芝居が分からないのではないし、外国の芝居だからといって排他的になるわけでもなく、良いものは良いと素直に賞賛するのですが、何よりも今回の劇団公演のことは日本の演劇関係者に余り知られていなかったということは言えますね。

ぼくはトフストノゴフとは知り合いですが、今回の公演に関しては何の相談もありませんでした。これはトフストノゴフ自身も言っていましたが、東京公演が行われた国立劇場は、小劇場ならともかく、芝居向きの劇場ではありません。チェーホフの芝居にはチェーホフの芝居に適した劇場というものがあるわけです。

前にモスクワ芸術座が来たときは、準備も宣伝もゆき届いて、日本の演劇人も協力して、うまく行きました。

——日ソ間の演劇交流について、あるいは今後の見通しについて何かご意見がありましたら…

日本では能とか狂言、歌舞伎、それから新派、新劇など、いうなれば芝居の流派というものが多様なのです。いろいろな流派がある日本の演劇人とソビエトの演劇人がつきあうというのはなかなか面倒で、一筋縄では行きません。一本の線で結び合うというわけには行きません。

また、ぼくら日本の新劇にはせいぜい六、七〇年位の歴史しかありませんが、ロシア演劇、ソビエト演劇には比較にならないほど長い伝統がある。今度のトフストノゴフの芝居を見てもロシア演劇の伝統が根強いことが分かります。だから、そういう違いのある日本の演劇、ソビエトの演劇が芸術の問題を一緒にどう考えていくかということは、なかなか難しいと思います。これからの、ぼくらのあとの演劇人がもう少し交流を深めていけば、何か新しい問題提起も出てくるでしょう。

そのためには、お互いの演劇的事情を研究し合い、日本の演劇人のソビエト演劇に対する関心、ソビエト演劇人の日本演劇に対する関心がどこにあるかを、両者が知ることですね。それを妨げるものは何もないと思います。言葉の難関はあるけれど。

われわれ日本人としてはソビエト演劇の新しい作品、すぐれた作品をまず見ることが大切です。

ソビエトの演劇人には日本の完成された演劇である能、狂言、歌舞伎をまず見ていただきたい。ソビエトの人が今まで見たことのないジャンルの演劇を満喫していただきたい。ここ数年はそういった形で交流していったらいいと思います。

“シェレホフは第二のふるさと”

——森・根上町親善使節団長は語る

東シベリア駐在本誌記者　ウラジーミル・スミルノフ



シェレホフと根上町の友好を記念してつくられた「ネアガリ」小公園を訪れた使節団一行とアルヒポワ市長。右から２人目が森　茂喜町長。

8月初め日ソ協会石川県連会長森茂喜・根上（ねあがり）町長を団長とする根上町親善使節団が、東シベリアのまちシェレホフ（イルクーツク市の南西18km）を訪問し、大歓迎を受けた。

マイナ・アルヒポワ・シェレホフ市ソビエト議長（市長）は使節団を歓迎し、「人口の大半が30歳未満の青年であるシェレホフ市の住民は、根上との友好関係の強化に真剣に努めている。実生活が示したとおり、姉妹都市の住民の友好はソ日両国民の平和、善隣、協力に役立っている」と述べた。そのあと市長は森団長にシェレホフ名誉市民の肩綬を手渡した。



アルヒポワ市長（左端）と懇談する一行。森町長にはシェレホフ名誉市民の肩綬が贈られた。

代表団一行はバイカル湖を見物し、シェレホフの新建設場と児童施設、市の中央の根上記念小公園（一九七六年に姉妹都市協定調印を記念して造成）を訪れた。森団長は地元のテレビ放送に出てあいさつした。

シェレホフ市長と根上町長は一九八四—八五年度姉妹都市間の親善行事計画に調印した。この計画によれば従来の伝統的行事（代表団や各種展示会の交換など）のほかに平和・反核大衆行動デーが双方で催されるほか、軍縮行動週間やポリティカル・ソングの祭典が行われる。

シェレホフ市ソビエトでの懇談のさい森団長は次のように述べた。

「もし私が死んでこのシェレホフに私の骨が葬られるなら、われわれ双方のまちの友好の根はもっと深いものになるだろう。この私の希望についてはシェレホフの皆さんは以前から知っておられる。私はシェレホフを第二のふるさとだと思っている。私の身内の者や友人、根上の全町民もシェレホフが第二のふるさととなるよう望んでいる……」

代表団の帰国に先立ってシェレホフ市民は、森さんに軟玉製の首ながビンと杯を２個贈った。古い言いつたえによると、軟玉は病気を防ぎ、その人の長寿を約束するという。



″人類は歴史の最後の分岐点にいる″

——物理学者エブゲニー・ベリホフ・ソ連科学アカデミー副総裁は語る

「人類がこれほど正しい道を選ぶ必要に迫られたことはなかった」——平和・反核ソ連学者委員会議長エブゲニー・ベリホフ・ソ連科学アカデミー副総裁(写真)はこう断言する。

核戦争発生の危険性と核戦争が起こった場合の悲惨な結果について、ベリホフ副総裁はガリーナ・ゲラシチェワ本誌記者に次のように語った。

「戦争は好きなときに始められ、やめる手段が見付かれば終わる」という説が中世の頃からあったが、核戦争にはこういう言い方は通じない。

核戦争の異常さやそれ以前のすべての戦争との違いは、いったん始めたら最後、核戦争は人の手に負えなくなることだ。人類はこの点をよく念頭におかねばならない。核戦争を始めるのは人間の意のままだが、ここでただ一つ忘れてならないのは、この地球上で生命を維持する方法は核戦争を始めないことしかない、ということだ。

最近、核兵器の性能が向上するのに伴って、西側では局地戦とか、だらだらした長期戦とかそのほかの形の核戦争ならやってもかまわないという、えせ科学的ないろいろな考え方が生まれている。遺憾ながら、これはたんなる抽象的な議論に終わっておらず、それに影響されて新しい戦略方式がつくられたり、またよく軍縮交渉が足ぶみしたりしている。

この地球上に住んでいる人たちの大半は日常生活のなかでこのような問題にごくたまに関係をもつことがあるが、大抵は全く無関係である。それにつけこんで、ときどき西側のマスメディアが、核戦争をしても2、3年たてばどこかの社会(たとえば米国)が政治、経済体制を立て直し、戦争による損害を取り戻して、政治的な面で核戦争に勝ったと同じになるという説を躍起になって広めている。

これは極端な見解で、ほんのわずかな学者や軍人たちから支持されているだけだ。こういう連中は核戦争の副次的効果がまだはっきりと分かっていないことにつけこんでいるのだ。核戦争のあと大気圏にどのくらいのエーロゾルが日光を遮るかどうかという点は実のところ学者にも正確に分かっていない。だが、おそらく植生が残らず滅亡し、長いあいだ日がまったく差さなくなることは、はっきりしている。

同時に西側諸国の国民のあいだには、核戦争の後どうなるかが学者にもよく分からないのならば、多分恐ろしい事態はなにも起こらないのではないだろうかという考え方が現れている。

こんにち実際にすべての学者の意見が一致していることが一つある。それは、核紛争が起こった場合、われわれが核紛争をどうしてもコントロールもしくは限定できない以上、人類は全面的な破滅を迎え、数億の人間が死に、人類は甚大な心理的損害をこうむり、文明は破壊され、「生き残った者が死んだ者をうらやむ」ような状態が生じる、ということだ。だからこそ、こんにち多くの学者が核軍拡や核戦争を防止するたたかいに進んで参加しているのである。学者たる者は核戦争の本当の影響を国民に説明してこそ、その責務を完全に果たすことになると、私は考える。

21世紀についての二つのシナリオ

核兵器は通常兵器と全く違う。われわれには昔から戦争の仕方の「基準」という考えがあるが、核兵器の使用はその「基準」の中に入らない。核兵器を使うとまず第一に非戦闘員の住民が死ぬ。米国の国際政治学者ジョージ・ケナンの言い方によると、人類が自殺兵器を発明したのであり、従って、人類が自殺したいと望んでいるかいないかという点に問題のすべてがあるのだ、という。

もしも世界がいまここで思い切った選択をしなければ、21世紀初頭はたして人類はどうなっているだろうか。

私は、世界が二とおりの姿の、どちらかになる可能性があると考える。その世界の未来の姿を一つずつ描いてみよう。実は、その一つの姿はすでにレーガン米大統領が「描いてくれた」のである。レーガンの説に従うと、こういうことになる。20世紀末に世界には広範囲に展開配備された膨大なミサイル迎撃防衛体系をもつ国(たとえば、米国とソ連)が存在し、しょっちゅう攻撃用核兵器と防御用核兵器の生産競争をやる、というのである。

分かり切ったことだが、こうした考え方は、核兵器というのは、たんにより改良された性能のよい種類の兵器にすぎず、いろいろな政治的・軍事的課題を解決処理できる手段だという間違った考えに立脚している。この目的のために、もしくはレーガン大統領の科学顧問エドワード・テラーの言葉を借りると、「共産主義者の世界奪取の必然性」を未然に防ぐために、ホワイトハウスの「宇宙計画」の一部もしくは全部が実施されよう。同じテラーの考え方によると、この「宇宙計画」の核心は、つまるところ「……米国はできるだけ早く宇宙を征服しなければならない。軍事的に宇宙を制する者は地球をも制する」ということになる。

ところでソ連の見解は次のようなものになる。つまり、20世紀末までに世界は核兵器の完全廃絶にこぎつけなければならず、世界のすべての諸国民の悲願に報いるこの人道的計画を実現するために、人類はただちに平等と同等安全を条件に交渉に入り、具体的措置をとらねばならない。

ソ連は建国以来一貫して平和競存政策をとってきた。米ソの違った政治制度のあいだの競争は、この二つの国そのものまで滅ぼしてしまうような方法で片づけてはならない。「核実験の全面禁止」交渉や「すべての兵器の宇宙打ち上げの禁止」交渉の意味を正直に国民に説明すれば、私はこの二つの交渉の完結と実施は今よりはるかにはかどると考える。いまもし全世界的なアンケートをやったら、世界の過半数の人々は今日にでも、戦略的に貯蔵されている中距離核ミサイル、戦術核兵器およびそのほかのあらゆる種類の自殺兵器の削減に賛成投票するに違いない、と私は確信している。

一度死んだらおしまい

こんにち世界の核大国が保有する核弾頭が五万以上にのぼることは、公然の秘密だ。このことは事実上、**この地球の住民一人当たり平均3・5tの爆発物をもつ**ことを意味する。ところが、現状にあきたらずにまだ新しい戦略兵器の開発を求める声をわれわれはほとんど毎日のように耳にしている。いいかえると、数量の上でも性能の点でも軍拡競争は止まるところを知らないのである。

核戦争を未然に防ぐという問題に心を痛めているのが学者だけでないことはいうまでもない。平和を維持し核戦争による破滅を防止する必要は、今世紀のもっとも大きな問題であり、国際政治の上でこれより重大な問題はない。

その属する国こそ違え、どの国の学者も、核戦争がひとたび起これば文明世界全体が必ず滅びることを理解しているので、団結して共同の闘いをたたかっている。ところで、たまたま私は水爆の生みの親の一人であるエドワード・テラー、それに、残念ながら今日でもなお広島、長崎への原爆投下が正しかったと認めていることで名を知られている米国の学者ユージン・ウィグナーの二人と親しく話を交わす機会があったが、二人とも、ひとたび核戦争が始まったら、数十億の人間が死んでしまうことをよく承知していた。それどころか、その死に方がいかに恐ろしいものであるか、どちらの学者もだれよりも分かりやすく説明してくれた。しかし、これだけ分かっていてもこの二人は、滅亡への道をたどることをやめようとはしないのである。

すべての国の学者は、軍縮の道を歩んで核兵器の凍結と削減をめざすことこそ、この地球上の生命を維持する唯一の現実的可能性であることを国民によく説明する責務がある(もっとも誠実な学者はもうそうしている)。これこそ世界を破滅から救う道なのだ。これは人類が行うこの種の最初の実験であるが、最後の実験になるかもしれないのである。

兵士、捕虜、それから学者

——ウラジーミル・フルソフが歩んだ道

本誌記者 ビクトル・スベンチャンスキー
カメラ V・スホドリスキー他



ブレスト要塞の残骸にすがって泣くウラジーミル・フルソフ(1961年夏、M・アナニン撮影)

右足のズボンの中はからっぽの、背が高い男が、ブレスト要塞の崩れ落ちた死骸にとりすがって涙を流している……

一九六一年の夏に撮られたこの写真は当時多くの新聞に掲載された。

この人の名はウラジーミル・フルソフ。生物学博士、教授、カザフ共和国の首都アルマアタ市のカザフ国立大学で自然保護の講座をもっている、ソ連旧参戦軍人委員会の名誉会員だ。

この人はロシア人だが、中央アジアのキルギス共和国で生まれ、育った。一九四〇年、大学1年生を修了した19歳の夏に陸軍に召集された。配属された部隊は、ベロルシア共和国のブレスト要塞に駐屯していた第一二五狙撃連隊であった。

一九四一年6月22日──ファシスト・ドイツがソ連を攻撃したその日から戦争が始まったのである。

ほかの町に戦火が及んだのはそれから1日あとか、1週間後か、1月後であったが、一〇〇年あまり前西部国境に築かれたこの古い城塞町のブレストに戦火が達したのは開戦直後であった。

前線は東へ遠ざかっていったが、包囲されたブレスト要塞は戦い続け、降伏を潔しとせず、重傷者以外の将兵が一人もいなくなってから初めて陥落した。



戦跡メモリアル「ブレスト英雄要塞」の彫像の一つ──『渇き』。

だが、それはひと月あとのことで、戦いの火ぶたが切られた6月22日にはフルソフは戦友たちとともに要塞の防衛に奮戦していた。

激戦が続いた。要塞めがけてドイツ軍の戦車隊が攻撃をかけてきた。そのときのことをフルソフはこう回想している。「なにかひどい衝撃を受けた。意識が戻ったとき、自分の体に触ってみた。右側のズボンのポケットから下のところがずたずたになっていて、足もなんにもない。骨がめちゃめちゃに折れた右足は、さっぱり訳が分からないが、後ろの方へ曲がって頭の上のところにあった……」

やがて、フルソフにとって一番恐れていたことが始まった。捕虜になったのだ。負傷兵を抑留する収容所をたらい回しにされた。最初は捕まったブレスト、それからポーランドへ移され、ビャワ・ポドリャスカ、次にザーモシチ、次にトールニへと、各地の収容所を転々とした。そこは、すでに戦いで身も心も傷ついた人々をさらに飢えと拷問で痛めつけ、その人格を傷つけて、かれらが人間であることを忘れさせようとする場所であった。

全員がその苦しみを耐え抜いたわけではない。フルソフは頑張り通したひとりだった。もっとも、最初のうちは絶望にうちのめされ、タオルで首をつろうとしたこともあった。よく動ける者は脱走の準備を少しずつ重ねた。脱走が成功したこともあった。介助医だったナージャ・シュムスカヤも脱走に成功したひとりだった。世間は狭いとはよく言ったもので、そのナージャにフルソフは、戦後アルマアタでひょっこり再会した。

その人々を支えていたものはなにか。なにがその人たちに力を与えたのか。

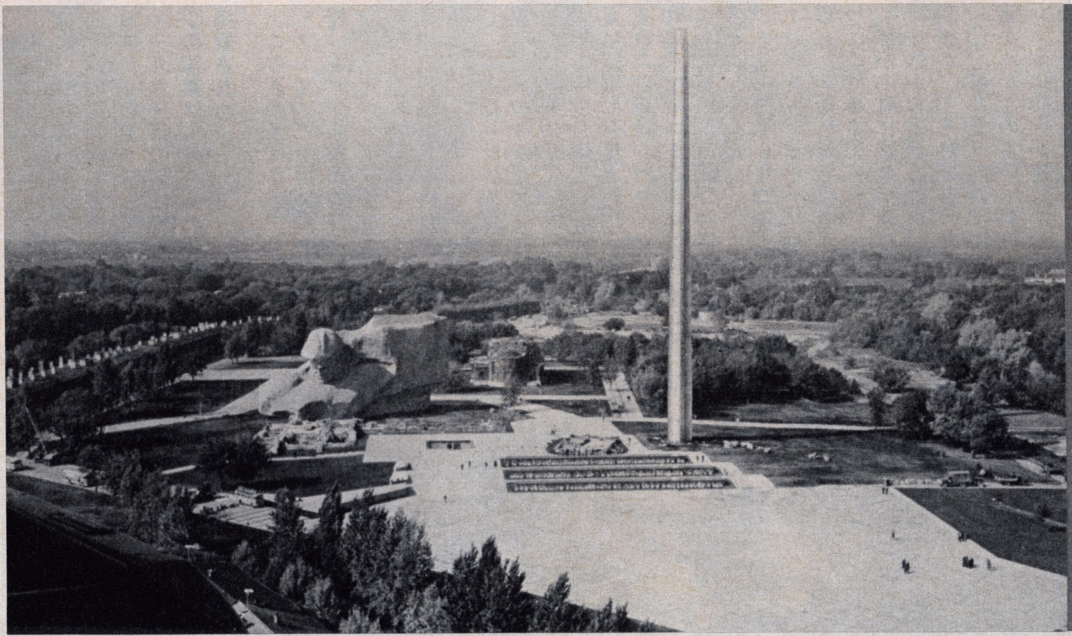
フルソフは「それは必勝の信念です」と答える。

トールニの収容所に抑留されていた人々は一九四五年ソ連軍に解放された。

フルソフは家路についた。家の者は、もう一九四一年当時からフルソフが戦死したものと思いこんでいた。なにしろ戦争中一本の手紙も家へ書かなかったし、こんども帰るのを知らせようがなかった。そのフルソフがだしぬけに家のしきいに姿を現したのである。涙で母親の両目はふさがり、母親は泣きながら、フルソフにすがりついた。

「ゲオルギーや、私の息子の……」

「ママ、ぼくはウラジーミル



現在のブレスト要塞。ところどころにかつての要塞の廃虚が残されている。

なんだけど」

フルソフ家には息子が二人いた。一九二三年生まれの弟のゲオルギーから「無事帰還する」との便りがとどいたところであった。二三年生まれの青年一〇〇人のうちで戦線から生還したのはたったひとりという割合であるが、ゲオルギーはそのひとりだった。

こんな幸福を両親に贈ってくれた運命の女神は、弟のゲオルギーが乗った列車が遅れて、帰ってくるとは思ってもいなかった兄のウラジーミルの方が、弟の帰宅予定の時刻に着くといういたずらをしたのであった……。

運のよい両親である。息子が二人とも前線から戻ってきたからだ。ただ二人の兄弟に残った足は全部で2本だった。弟のゲオルギーは右足、兄のウラジーミルは左足しかない。

ウラジーミルは大学に戻り、卒業した。妻をめとり、一九五三年に博士候補の学位をとる論文を書き、六五年には生物学博士になった。子供たちも父親の例にならった。娘のナタリアと息子のオレーグも生物学博士候補だ。孫も大きくなり、オレーグ(父と同名)は12歳、ウラジーミルが7歳。ウラジーミルという名は祖父にあやかった。

一九六一年にフルソフはかつて自分の血を流したブレストの土地を訪れた。ブレスト要塞防衛20周年の年のことである。この頃にはブレスト市は旧要塞の崩れかかった廃虚に取り巻かれた中にいくつも彫刻が並んだ戦跡メモリアルとなっていた。フルソフはあのときの防衛戦に参加したほかの参加者たちと一緒に、その崩れた要塞の残骸にすがりついて涙を流した。

戦跡に立っている彫刻の中にひとりの兵士の像がある。戦友たちに飲ませる水を汲もうと、要塞のそばを流れる小川をめざして地面をはっている姿の彫刻だ。右手に自動小銃を持ち、前方に伸ばした左手は鉄かぶとをにぎっている。顔にはのどがからからに乾いても水を飲めない苦しさが浮かんでいる。包囲された要塞には水は一滴もなかったのだ。

もちろん、石像の兵士は動けるはずがない。小川のところまであと4、5mをはって行って、のどの渇きをいやすことは永遠にできない。ここを訪れる人たちは小川の水を手に汲んで、石像の兵士の鉄かぶとの中に注いでやる……。

二〇〇〇万のソビエト人の生命を奪った戦争は、その苦しみを双肩にになって戦った人たちの記憶にも、また新しい世代の想像の中にもいまなお生きつづける。

人類の歴史が始まって以来この地球上で実に一万四五一三の戦争が起こったが、第2次世界大戦は一番酷烈なたたかいであった。五〇〇〇万の人命が失われた。が、その戦争が終わってからも世界は実に一〇〇回以上も局地戦争を目撃した。

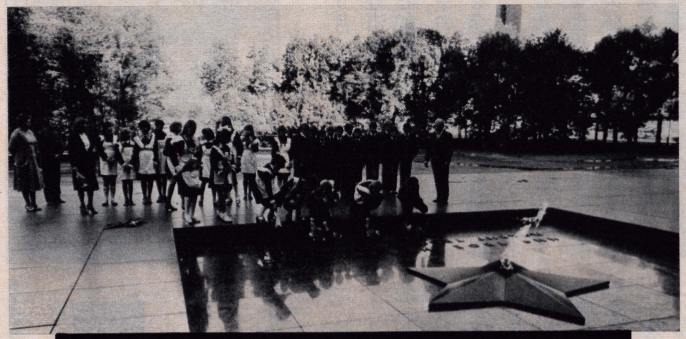
一度はじまったら最後、文明を滅ぼし生命そのものを滅ぼさねばやまない核戦争を、言葉と実際の行動によって未然に防ぐことが、かつての従軍兵士であり現在学者である自分の義務だとフルソフは考えている。

生物学者のフルソフは講義の中で、進化を保障し、地球上の生命と理性の存在そのものを保障している遺伝情報の安定した伝達システムが核戦争で根本的に変化してしまう可能性があることを学生たちに力説する。同時に、旧参戦軍人としてフルソフは戦争反対の会合や集会に出席し、かれ自身が昔なめた数々の苦しい体験を語って、聴衆に軍拡の停止と戦争の防止を訴えている。



同名の孫ウラジーミルを抱くフルソフ教授

平和の授業で始まった新学年



9月1日、クレムリンの城壁のそばにある無名戦士の墓に花を捧げるモスクワ35中学校の生徒たち

ソ連全国の学校で行われた「平和の授業」の一つ



9月1日からソ連の小中高校（10年制中学校）の新学年度が始まったが、小中高校の全児童生徒4500万人の新学期最初の授業は、「平和の授業」で始まった。この授業はソ連教育省、コムソモール（共産青年同盟）中央委員会、ソ連平和擁護委員会の提唱で実施されたもの。

「平和の授業」は、校庭や講堂、教室をはじめ、先の大戦の戦死者の記念碑前で行われ、教師、旧参戦軍人、学者、文化人、各地の平和擁護委員会の活動家らが講師となって、いまの平和を回復するために払われたおびただしい犠牲、世界の運命への重大な懸念、新たな戦争に反対するソ連国民の闘い、核軍拡停止・軍縮にかんするソ連政府の建設的な提案などについて話した。

子供たちに平和と友好の精神を植えつけることは、ソビエト教育学の根本原則の一つである。ソ連の学校教育制度は戦争や暴力を賛美したり、他国民への憎しみをあおったりする要素をすべて排除している。

ソ連の小中高校生は反戦運動にすすんで参加しており、いろいろと創意に富んだ活動を定期的に行い、あらゆる平和擁護キャンペーンを大々的に支持している。

「平和の授業」は、平和、諸国民間の友好協力・反軍拡・反核戦争の闘争に役立ちたいと願う子供たちの強い気持ちをさらに高めた。

長期漁業協定は両国の利益に

――日刊水産経済新聞のアンケートに対する
カメンツェフ・ソ連漁業相の回答



ことしの9月、東京の日刊水産経済新聞（水産経済新聞社発行）は同紙創刊35周年を記念する行事の一環として、「国際化の中の日本漁業」をテーマに特別記念号を発行し、ソ連、米国、英国、カナダ、ノルウェー、ニュージーランド、オーストラリア、メキシコ、ソロモンなど世界の主要な水産国の漁業担当者およびFAO（国連食糧農業機関）の首脳などに、日本との間に横たわる重要問題についてアンケートを行い、その回答を掲載した（9月28日号）。同紙に掲載されたV・M・カメンツェフ・ソ連漁業相の回答を紹介します（資料提供＝水産経済新聞社）。

――5カ年計画に基づく貴国漁業の主要な発展方向をお聞かせください。

「ソ連邦食糧計画」によって提起された食品物増産にかかわる課題の解決にあたり、漁業には大きな役割が与えられています。漁業部門に課された具体的な課題は、今後の魚および水産物の漁獲増大のために相当な努力を要求するものです。

一九八五年には水産食品の生産を四二〇万tまで、また一九九〇年には四三〇―四五〇万tまで増大し、水産缶詰もそれぞれの年には三〇億標準缶および三二億標準缶まで増産しなければなりません。

とくに注意を払わねばならないのは、水産製品の品目を豊富にし、新しい品を開発することであり、またその品質と味を向上することです。

第11次5カ年計画期中に、漁業部門に従事する者は、改善された品目の製品の生産を23・1%増加させなければなりません。つまり、くん製、干物乾物、背肉冷くん食品は16%、特別処理および調理を施した魚は21%、フィレーは23%、活魚は43%それぞれ増産しなければなりません。

漁業の最も重要な課題は、漁獲される原料を効果的に、より合理的に利用することです。魚およびほかの水産物の75%以上が食品生産に向けられなければなりませんが、その際、漁獲された魚の40%は加工処理されたかたちで販売に出さねばならず、加工時にでるクズもの一切も実際上利用しなければなりません。

また内水面における漁業養殖業のいっそうの発展に力を注がなくてはなりませんが、今回の5カ年計画の期間中に淡水産高級魚の生産を1・8倍に、また池中養魚生産高を1・5倍に増やすことになっています。

わが国の漁業発展のもうひとつの方向として栽培漁業の発展がありますが、これは将来、水産製品の生産面において重要な地位を占めることになると思われます。

ソ連邦の漁業分野における一連の発展の方向をただいまご紹介しましたが、これらは、世界でも有数の漁業国である日本と互恵の科学技術協力をベースにして、より効果的に、またより短時日に実現され得るものだと考えています。

わが国では魚族資源の再生産と保護の問題にも大きな注意が払われています。現在ソ連邦には一五〇カ所の養魚施設があり、それらの施設では毎年、サケ・マス類およびシグ族サケ（Co-regonus）の幼魚を約一〇億尾、チョウザメ類の幼魚を一億尾以上、淡水産スズキ類、コイ類、カマス類、フナ類などの幼魚を九〇億尾以上生産しています。

わが国ではまた、水資源の合理的利用および魚族の生息環境の保全に関する分野においても一貫した作業が行われています。これらの目的のため、種々の水域に廃棄される排水をきれいにする浄化施設の建設が進められています。船団に属する船舶は、海水汚染を防止する手段を備えています。

――日ソの科学技術関係における成果とその発展の展望についてはどうお考えですか。

科学技術協力に関する一九七八年の協定に基づきソ日漁業委員会が設置され、その定期会議が毎年11月にモスクワと東京で交互に開催されています。双方は資源の維持と合理的利用の問題を討議し、北西太平洋における水産動植物に関する資料の交換を行い、次年度における科学技術協力の計画と方向を決定しています。

こうした計画に基づいて、双方は北西太平洋のサンマ、サバ、イワシ、イカおよびスケソウ資源の共同調査ならびに漁業のさまざまな分野における専門家の交流を実施しています。

日本の水産会社や組織ともさまざまな方面での協力が実施されています。

近い将来、太平洋漁業海洋学研究所（TINRO）と函館水産試験場との間の魚および水産物の加工分野における協力協定の締結が計画されています。

――日ソ漁業協定および漁業の分野における科学技術協力協定は一年ごとに締結されています。日ソ友好関係の維持のためには期間5年の長期協定を結んだ方がベターであるとお考えですか。

漁業の分野におけるソ日関係は肯定的な方向で発展してきています。両国の長期にわたる協力は、われわれが種々多様な問題を検討し、解決することを可能にしていますが、われわれが北西太平洋において全く同一の資源を利用していることからしますと、それは極めて当然なことです。こうした問題の解決を促進しているのが弾力的に作成された両国の条約法律上の基盤です。

一九七七年の協定の長期的基盤への移行は、新しい海洋法条約署名採択後における現在の情勢に合致するものではないかとソ連側は考えています。協力範囲をいっそう拡大することとならんで、協定の有効期間を延長することは、両国の利益に適うものであり、両国の関係をさらに安定した基盤に据えるものでありましょう。

一九七八年の科学技術協定については、双方の反対がなければ、この協定の規定には、自動的に順次一年間延長されるというメカニズムが盛り込まれていますので、この協定は、現在も事実上そうした性格を有していると私たちは考えています。

――日本は国際捕鯨委員会の決議に対し異議申し立てを行いましたが、その結果、商業捕鯨に反対するアメリカ合衆国は、自国の二〇〇カイリ水域における日本漁船に対する漁獲割当量を削減しました。捕鯨国と共通の立場をとっておられる貴国は反捕鯨国の立場についてどうお考えですか。

一九八五―一九八六年からの商業捕鯨全面禁漁実施決議は国際捕鯨委員会によって、その権限ある機関である科学委員会からのこの事柄に関するなんらの勧告もなしに採択されたものです。票数をただ機械的に利用することによって反捕鯨国ブロックは一九八二年の第34回国際捕鯨委員会年次総会において、この決議の強行採択に成功しました。この決議は、いろいろな種類のクジラの捕獲資源評価に関する現存の科学的資料に矛盾するものであり、本質においては政治的な行為です。

ソ連邦はほかの多くの捕鯨国と同じく、そのような決定には同意できずに、国際捕鯨取締条約の第五条（第三項）に基づき、国際捕鯨委員会事務局に対し異議申し立てを行いました。このようなわけで、全面禁漁はソ連邦には関係ないでしょう。

わが国は、世界の海のクジラ資源の維持と回復が必要だという意見には全く賛成です。わが国はまた、厳格な科学的根拠に基づき、国際捕鯨委員会の枠内での厳格な国際管理のもとで、頭数からみてその捕獲が可能である種類のクジラの、合理的で制限された捕獲の確保を目的とした、現行の国際条約に基づく捕獲規制の原則にしたがっています。

現在委員会によって定められている捕獲枠は、許容範囲の最小値であり、クジラの資源状態にとって安全な水準にあり、信憑性のある科学的資料に立脚しています。たとえば南半球では、一九八三―一九八四年の漁期において、六六五五頭までのミンククジラの捕獲が許可されていますが、これはこのクジラの総頭数の2%以下の数字です。

――日ソ漁業関係において合弁会社の設立がなぜ必要だとお考えですか。この会社の枠内でどのような活動を実施されるおつもりですか。

漁業の分野における合弁会社の設立は、思いますに、両国関係の現在の水準に適合するものでありましょうし、互恵の協力を拡大する可能性をもたらすものではないでしょうか。双方は会社を通じて、船舶の修理、補給、魚および水産物の販売、海洋生物資源の漁獲の計画実行といった、双方にとって関心ある問題を解決できるのではないでしょうか。

合弁会社は、パートナー間に共通の利害関係があってこそ設立が可能だと申し上げなければなりません。ソ連側からはそうしたパートナーは全ソ漁業船舶公団（ソブルイブフロート）が務めることになるでしょう。

そうした合弁会社の活動分野はかなり広い範囲に及ぶものとなりましょうし、合弁会社は、協力をいっそう発展させるのに有望な方式であると思います。そのような協力の相互利益というものは、それは疑いのないものであって、漁業の分野における両国関係の安定強化の面で重要な意義をもっています。

――水産業の若い専門家代表団の相互交流は日ソ友好強化の面で有益ではなかろうかと私たちは考えています。大臣のご意見はいかがでしょうか。

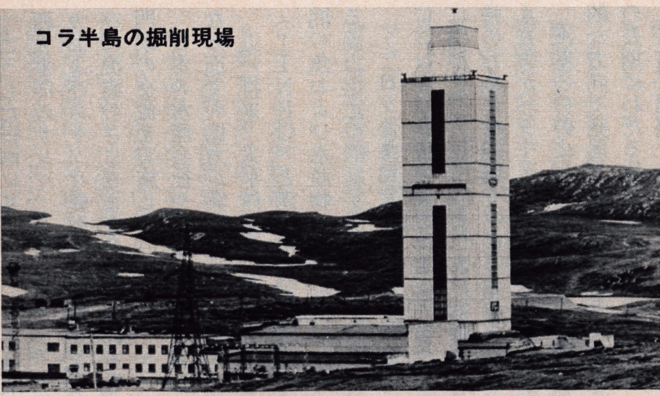
全国鮭鱒流網漁業組合連合会が、ソ連邦の漁業の現況とソ連邦諸都市の名所についての知見を広めるために、若い漁民代表団を毎年わが国に派遣しているのを存じています。

今年もそうしたグループがモスクワを経由して、いわゆる「シルクロード」に沿って中央アジアにまいりました。いままでの通り、私たちはこの方々を漁業省にお迎えして、関心をもっておられる質問についてお答えいたしました。

この機会をお借りして、日本の漁民の皆さまに、平穏な海と大漁と平和な空をお祈りいたします。

話題を拾う

世界一深い掘削井


コラ半島の掘削現場

ソ連欧州部の北にあるコラ半島で進められている超深掘削井の掘削深度はこのほど一万一六六九m（計画目標は一万三〇〇〇m）に達し、世界一深いこのボーリング孔から鉱石試料が採取された。

現在世界のあらゆる有用鉱物は、深さ五〇〇〇mまでの地殻の最上層から採取されているが、それ以上の深い地層が開発されれば、人類に必要な鉱物・原料資源に関するわれわれの考えは変わるだろう。

コズロフスキー・ソ連地質相は「超深ボーリングは科学技術上の最大級のイベントであり、この掘削によって、第一に地質学者は地殻構造を直接研究調査でき、第二に地球深部の有用鉱物の探査、開発の科学的基礎づくりが進み、第三にこれまでの経験を踏まえて地殻深部掘削の新しい技術が開発される」と語った。

コラ半島の掘削井の掘削には、スベルドロフスク市のウラル重機械工場製のボーリング装置ウラルマシ一五〇〇〇が使われている。この装置の名称の数字は、装置が一万五〇〇〇mの深さまで掘削できることを示している。大きな土圧と高温のとほうもない難条件のなかでウラルマシ一五〇〇〇は故障もなく順調に作動している。


ボーリング装置「ウラルマシ―15000」

ソ米鳥学者の協力


オカ自然保護区の空を飛ぶツルの群れ


ソデグロヅルを見るアーチボールド博士(左)とオカ自然保護区希少種ツル飼育場長ウラジーミル・パンチェンコ

ソ連欧州部のリャザン州にあるオカ自然保護区はソ連の一五〇の国立自然保護区の一つ。ここにはツルの希少種を飼うソ連最初の飼育場があって、世界に三〇〇羽ぐらいしかいないソデグロヅルがいる。

「ソデグロヅル」計画には、ソ米両国の環境保護面の協力のわく内で活動している米国の学者たちも参加している。このほど鳥学者のジョージ・アーチボールド氏がウィスコンシン州の飼育場からソデグロヅルの卵をオカ保護区に運んできた。この卵は現地のクロヅルの巣で育てられることになった。

家族アンサンブル

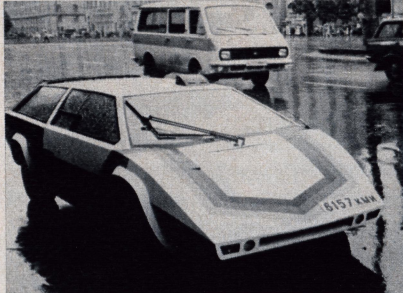

父親のマナフ・マメドフ（右端）と6人の息子たち

マメドフ家の民族楽器アンサンブルは、アゼルバイジャン共和国サリヤヌイ村の文化会館のアマチュア芸能サークルに加わっており、各地で公演して評判になっている。

アゼルバイジャンの民族的メロディーや歌をレパートリーとするアンサンブルは、全ソ・アマチュア芸術祭で金賞を獲得したし、一九八一年9月にはスペインで公演して好評を博した。

趣味が職業に


昨年の全ソ・レースでグランプリを獲得した車の運転席に座るクルイキン


▲クルイギン設計のスポーツカー“グランツーリズム”

ソ連欧州部の北東部にあるコミ自治共和国のウフタ市で、最近まで鉄道局の職長をしていたアレクサンドル・クルイギンの趣味は自動車設計とオートレース。1年半がかりで小型車ジグリをベースにしたガラス強化プラスチック製の車（最大時速一七〇km）を作り、一九八二年の手づくりカーの全ソ・レースでグランプリを獲得した。いまクルイギンはモスクワ自動車工場で新型車の設計にたずさわっている。

社会主義社会の理論と実践を知る旅

——労働大学の第4回訪ソ学習交流団

歴史学博士候補　ユーリー・ゲオルギエフ
カメラ　V・ビャトキン他



▲労働大学学習交流団の一行はソ連の社会・経済発展について一連の講演を聴いた。



◀国民経済成果博覧会(モスクワ)の中央パビリオンでソ連経済発展地図を見る一行

日本の労働大学は多彩な活動を通じて、日本の勤労者の国際主義的伝統を継承し、発展させている。労働大学は一九七二年以来、ソ連共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義(ML)研究所(ソ連共産党の理論研究センター)と学術的、実務的交流を進めてきており、その交流の一環としてML研究所の招きで労働大学の活動家と聴講生のグループがよくソ連を訪問し、現実の社会主義の理論と実践を具体的に知るために学習ゼミナールを開催している。

さる8月11日から24日まで、一三二名の労働大学第4回学習交流団がモスクワ、レニングラードを訪れ、ソ日学習ゼミナールに参加した。今回のゼミナールのテーマは「ソ連——マルクス、エンゲルス、レーニンの社会主義国家に関する思想の具現」だったが、訪問の時期が、ちょうどマルクスの没後一〇〇年と生誕一六五年(ことし)やソ連邦結成60周年(昨年12月)の直後だったこともあって、ゼミナールはとくに意義深いものになった。

学習ゼミナールのテーマはゼミの全体集会や分科会、分散会での著名なソ連の学者や専門家の講演の中で全面的に取り上げられ、参加者たちはソ連の現在の社会・経済的発展段階——成熟した社会主義の段階について十分な情報を得た。さらにゼミは三つの分科会、五つの分散会にわかれて活発な討論を行い、学習交流団の一行はあらゆる質問についてソ連の専門家から回答を得、意見の違う相手と論争し、自分の疑問を解く機会をもった。

モスクワの労働組合運動大学を会場



労働組合運動大学の講堂で行われた学習ゼミナール



にして行われた講演や討論、つまり発達した社会主義の成果や諸問題を理論的に学ぶこと以外に、学習交流団のために、ソ連における共産主義建設の実際を知る機会もつくられた。例えばゼミ開催中の一日を利用して参加者は四つのグループに分かれて、モスクワの幾つかの国営工場を訪れ、工場のコムソモール（共産青年同盟）、労働組合、党の活動家たちとじっくり懇談し、労


言葉を知らなくても意思は通じる。


右　一行はレニングラードのピスカリョフ記念墓地で行われた「不戦の誓い」集会に参加した。
オートメ・ライン工場（モスクワ）の青年労働者の家に招かれて……

働条件や賃金、勤労者の経営参加について説明を受け、工場、クラブ、スポーツ施設を見学した。

学習交流団の一行はまた、モスクワ郊外のゴーリキー記念コルホーズを訪れて、近代的な畜舎やコルホーズ員の住宅を見学し、コルホーズで赤いバラやカーネーションの花束をおみやげにもらった。

もちろん、ソ連の青年との交流の会や夕べも数多く開かれた。モスクワのオートメ・ライン工場の青年労働者は工場の文化宮殿に同じジダーノフ区の多くの企業で働く青年たちを集めて、労働大学一行との交流の会を開いた。この会合では日ソ双方の代表のあいさつやアマチュア芸能コンサートがあり、そのあとゲームやダンス、ディスコの会などがあった。

この会のあと、交流団の多くの団員は同工場の労働者の家庭を訪れた。この時に生まれた友情は日曜日に行われたモスクワ川遊覧ハイキングの船上でも深められた。モスクワ郊外クリャジマ貯水池のラードスチ船着場の岸辺で繰り広げられたレクリエーションやゲーム、遊覧船上での歌や踊りは、オートメ・ライン工場の労働者たちと学習交流団の一行に楽しい思い出を残した。

また労働大学の一行は、モスクワの建設工労組所属のピオネール・キャンプ「ミールヌイ」（モスクワ郊外）を訪れ、ピオネールたちに広島の小学生たちからの手紙を手渡し、ソ連の小学生との文通を望む日本の子供たちの願いを伝えた。日が落ちたあと学習交流団の団員たちは、キャンプファイアーを囲んでピオネールたちと平和の歌をうたった。

交流団の団員たちがとくに待ちのぞんでいたのは、レーニンの生涯と一九一七年の10月革命の歴史にゆかりのある場所の訪問だった。赤の広場のレーニン廟に献花し、「クレムリンのレーニンの執務室と住居」博物館を訪れ、レーニンが晩年を過ごしたモスクワ郊外のゴルキの別荘を見学した。レニングラードでは、10月革命の司令部にな

ったスモーリヌイや、その砲声が10月革命の武装蜂起の合図になった巡洋艦オーロラ号、革命前レーニンが一時身を隠していたラズリフ湖畔など革命ゆかりの地を訪れた。一九一七年にソビエト政権の樹立が宣言されたスモーリヌイの講堂では、学習交流団一行とソ連共産党の古参党員たちとの会合が行われた。

レニングラードのピスカリョフ記念墓地では反戦・平和の大衆集会が開かれ、ソ日両国民の核破局反対・平和擁護の共同闘争を訴える声が高らかに響き渡った。労働大学の一行はこの集会に、日本から訪れた「不戦の誓い」代表団やレニングラードの社会団体の代表と共に参加した（本号3－9ページ参照）。労働大学学習交流団を代表して広島の助田光恵さんが集会であいさつした。発言した人たちは異口同音に、第2次世界大戦中のレニングラード封鎖の犠牲者や広島、長崎の原爆犠牲者は、新たな世界戦争を防止するために全力を尽くせ、と生きている人々に訴え、要求していると語った。集会参加者は、軍拡競争の抑制、平和と諸国民の安全の強化をめざす最近のソ連の平和提案を支持した。

※　※

労働大学学習交流団の篠藤光行団長は今回のソ日学習ゼミを総括して、ゼミは大成功だったと思うと語り、次のように強調した。

「ソ連滞在中、全団員は、日本で行われている反ソ、反社会主義宣伝がソ連の現実をいかにひどく歪めているかを自分の目で確かめることができた。私たちは、労働者階級が政権を握ったソ連では勤労者がソ連共産党の指導の下に政治、経済、社会、文化面でたえず成功を収めていることを確認した。また、全面的に発達した個性を育成し、すぐれた資質を開花させるために、ソ連では大変な努力が払われていること





▲日曜日のモスクワ川遊覧のあと、美しいクリャジマ貯水池の岸辺で行われたモスクワの青年労働者たちとの交流会で。

クリャジマ貯水池でのレクリエーション



自己紹介？

も確信した。そして更に、ソ連の人々がどれほど平和を熱望しているかをじかに知ることができた」

第4回労働大学訪ソ学習交流団はソ連滞在中、ロシア語の「団結」という単語を題字にした新聞を発行していた。その最後の号には参加者の次のような短い感想が掲載されていた。そのうちの一部を紹介しておこう。

「すばらしい。言葉で印象を伝えるなんて、むりだ」（兵庫・下司正彦さん）

「社会主義は人々が人間らしく生きる社会だということを見た」（香川・中内康起さん）

「社会主義は平和の力だと確信した」（熊本・山田力さん）。



〝子守りは疲れるよ……〟
（カメラ　B・ブダン）

短信アラカルト

五〇〇〇万人の学童に無料で教科書

例年どおり、ことしもソ連では9月1日から新学年が始まった。この日、ソ連のすべての学童は無料で教科書を受け取った。ソ連で初めて教科書が無料になったのは一九七八年。このときは1年生だけが対象だった。翌年には2年生と3年生が無料になり、次に4年生と5年生、次いで6年生と7年生……という具合で、ことしは最後の10年生までが無料になった。

現在、ソ連では五〇〇〇万人の学童が初等および中等教育課程で学んでいる。これらの学童の教科書代が、ことしからはすべて国家の負担になったのである。

レーザー光線でへんとう炎の治療

慢性へんとう炎は最もポピュラーなノドの病気の一つだが、ソ連ではレーザーを使ってこの病気を治す新しい方法が開発され、臨床に導入された。

へんとう炎はしばしば、心臓病、腎臓病、関節リューマチを併発する。

へんとう炎の最も効果的な治療法を研究するうちに、ソ連の学者たちはレーザー光線の利用を思いついた。レーザー光線には炎症を抑え、血管を広げ、痛みを鎮める作用があり、新陳代謝を促し、組織の回復を速める。

治療法は、週に6回、10分ずつ低エネルギーのレーザー光線をへんとうに照射する。これを14―16週つづけるが、すでに5―6週目から効果が現れる。ノドの痛みと不快感が取れ、発赤が小さくなり、浮腫が消える。患者の体調全体がよくなり、心臓や関節の痛みが軽くなる。

新型採炭機で生産性アップ

シベリアのクズネック炭田で、地下の厚い炭層を掘るための新しい、生産性の高い総合採炭機が稼働し始めた。交替制でこの採炭機を使って働く作業班は1昼夜に一万一〇〇〇tの石炭を採掘した。これは現在ソ連で稼働している採炭機の能力の10倍に相当する。この採炭機を開発したのはカザフ共和国のノボカラガンダ機械工場。

一九七〇年から一九八二年までのあいだにソ連の採炭量は年間六億二四〇〇万tから七億一八〇〇万tに増えた。この伸びは、主として機械化のレベル向上によってもたらされた。機械化は同時に、炭鉱労働者の労働条件の軽減、改善にもつながっている。機械化率は一九七〇年には全作業の25・2%にすぎなかったが、一九八二年には70・2%に達した。

一九八五年までのソ連の採炭量の増加分（約一億t）は主として露天掘りによってまかなわれるが、それにもかかわらずソ連では地下採炭技術の開発に関心が払われている。近い将来、無人の石炭採掘・搬出機を開発し、導入することが計画されている。ウクライナ共和国のゴルロフカ機械工場ではすでにリモートコントロール式の採炭機の生産が始まった。

復刊される〝ソ連の博物館〟誌

ソ連には国立の博物館が約二〇〇〇、民間の博物館が一万二〇〇〇ある。それらの所蔵品は五二〇〇万点にのぼる。参観者の数は絶えず増えており、一九三〇年には約二〇〇〇人だったのが一九八二年には一億六〇〇〇万人に達した。

博物館の活動は隔週刊の雑誌「ソ連の博物館」によって紹介される。戦前に刊行されていたこの雑誌は一九八三年12月に復刊される。この雑誌の紙面で読者は博物館の仕事や博物館事業の理論や歴史について、個々のユニークな展示品や研究者の探求や発見、個人のコレクションや収集家について知ることができるようになる。

ラッコの養殖場

カムチャツカ半島の東、コマンドル諸島のメードヌイ島にラッコの養殖場が建設されている。イタチ科のこの貴重な毛皮獣はアリューシャン列島のいくつかの島とコマンドル諸島に生息している。

一九五五年にはメードヌイ島に六〇〇頭いたのが、一九六二年には一二〇〇頭にまで増えた。長い中断期間ののち、一九七二年に初めてラッコはかつての生息地、コマンドル諸島のもう一つの島――ベーリング島に住みついた。現在、両島には約二〇〇〇頭のラッコが住んでいる。

ラッコの主な餌はイガイ。メードヌイ島のあまり大きくない海水をたたえた湖にはイガイがたくさんいる。養殖場を作るために、湖はネットで仕切られた。一方はイガイの〝畑〟で、もう一方は〝水族館〟になっている。湖のわきには、ラッコの幼獣を順化させるための小さなプールがいくつか作られた。こうして一大〝ラッコ牧場〟が出現するだろう。

ノーボスチ通信特派員報告

シャベルがあれば……

S・ボロベツ記者（ロンドン）

「地面に穴を掘り、家のなかからドアを2枚もってきて、穴にかぶせ、その上に1mの厚さに土をかけなさい……シャベルがあれば、誰でも退避壕がつくれます」

これで放射能から身を守れというのだから、実にたちが悪く、ばかばかしく、かつ無責任なことばだが、これを言ったのが米国防省高官のひとりT・ジョーンズだから、驚きだ。

残念ながら、このジョーンズ氏は先頃イギリスの北部ニューカッスルで開かれた英国の核実験の目撃者の会合には出席しなかった。核実験は一九五二一五八年のあいだに太平洋上とオーストラリア内陸で行われた。

……この実験では爆心から3kmちょっと離れた地点に少数の兵士と科学技術陣が待機していて、爆発直後観測班が汚染地域へ送りこまれ、爆心からさまざまな距離に置かれた兵器が衝撃波を受けてどうなったかを調べた。

……キノコ雲の観測に発進したオーストラリア軍用機の搭乗員が持ちこんだ朝食をなにげなくラップからとりだそうとしたとき、放射能測定器の針が動いて目盛り盤の右の端へくっついた。

オーストラリアの原住民はこの核実験のことをなにも知らない。放射能汚染地域への立ち入りを禁止することなど、だれも思いつかなかったし、放射能のために原住民がどのくらい死んだかを知る人もいない。

ニューカッスル集会の出席者たちは英国国防省が被爆者と、いまとなっては病院のカルテだけが被爆を証明している人々の家族に補償金を支払うよう要求した。これら被爆者の運命こそ将来の警告として役立たなければならない。

核爆弾から身を守るにはシャベルがたくさんあればよいなどという者のことばは、かれらが恥知らずにも人間の命を大切に思っていないことを天下にさらけ出しているのである。

米国流の相互理解

Y・ソボレフ記者（ニューデリー）

パキスタンに新型攻撃兵器を供与するという米国政府の決定は、インドの政界、一般世論を憂慮させている。ナラシマ・ラオ外相は、パキスタン潜水艦への米国製ハプーン型ミサイルの装備は南アジア諸国間の軍拡競争を新たなラウンドに導き、亜大陸に緊張と不信の空気を生むだろうと声明した。

ナラシマ・ラオ外相の発言を論評するにあたってインドのマスコミは、米国はこの地域に認められた情勢の安定化を許すまいとしているのだと見なしている。周知のように、南アジア7カ国の外相は、つい最近、ニューデリーで種々の分野での協力にかんする共同コミュニケに調印した。同時に、ヤクブ・カーン・パキスタン外相は、特に自国の領土を外国の基地に提供しない相互義務を規定した二国間不可侵条約締結の問題に関して、インドの指導者たちと協議を重ねた。

だがまさにこれが、南アジアにおける米国の軍国主義的政策にパキスタンをなお一層引き入れようとしているワシントン政府の気に入らないのだ。ワシントンはパキスタンに軍事援助をすることによってインド・パキスタン間に新たな緊張の火種が生じ、ニューデリーが米国の指令に従順にならざるを得なくなることを計算している。

インドの自主独立の対外政策に影響を及ぼそうと、ワシントンは経済制裁に至るまで、実にさまざまな圧力のテコにすがっている。たとえば、最近パリに集合した世銀の融資銀行団は、対インド財政援助の削減に関する〝意外な〟決定を採択した。同時に、米国はアジア銀行や米国人の管理下にあるその他一連の財政機関による対インド信用供与を凍結した。

インドのマスコミは、インドを米国の勢力軌道に戻そうとするワシントンの新たな試みを、〝米国流の相互理解〟の成果と名づけている。

繁盛する麻薬商売

A・ニコラエフ記者（ベルン）

一九八二年にスイスでは一〇九人が麻薬で死亡した。スイス各紙は司法、警察当局が発表したこのデータを第一面に大見出しで掲載した。それは実際に〝新記録〟である。これまで麻薬による死亡者の数はふた桁であった。

麻薬中毒者数の正確なデータはないが、次のような数字はわかっている。麻薬の密輸、不法所持、販売、使用に関係してベルン警察が一年間に手がけた事件はざっと一万二〇〇〇件にのぼったが、この数字から判断すると、数万人のスイス人が麻薬に関係していた。

麻薬取引は犯罪者を増やす。麻薬を手に入れるカネのない中毒患者は麻薬を手に入れるためにはどんなことでもやってのける。

ヘロインその他の麻薬取引の規模は広がる一方だ。特に昨年はスイスで〝コカイン・ブーム〟が起こったが、これは西側の多くの国にも共通する。一九八一年にスイス警察が押収したコカインは11kgだったが、八二年には48・5kgにはね上がったのである。

当局は麻薬取引の国際シンジケートと必死に闘っているのだが、このヤミ商売は盛んになる一方で、暗黒街のボスたちに途方もない儲けを得させている。

ソ連の新聞記事から

（一九八三年9月後半—10月前半）

ソ連共産党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議を開き、内外政策の数々の問題を審議した。

会議ではさる9月28日に発表されたY・V・アンドロポフの声明が、全世界で大きな反響を呼んだことが指摘された。この声明は非常に大きな政治的意義をもつ文書であり、核戦争の脅威の防止と世界平和の強化をめざすソ連共産党とソビエト国家の方針を深く全面的に表明している。

ソ連共産党中央委政治局はソビエト人のけだかい感情や全世界の善意の人々の連帯を高く評価するとともに、レーニン的平和政策をあくまでも信奉する態度を再び確認し、危険なもくろみを実行しようとする米国とNATOのいかなる企てにもソ連はしかるべき返答を与えることができ、ソ連の言行がくい違わないことをあらためて言明した。

（プラウダ紙10月9日号）

人間と生物圏

〔ミンスク27日発〕　自然のバランスを崩すことなく豊かな自然を利用する課題に取り組んでいる学者・専門家が一同に会して、第1回国際生物圏保護区会議がきょうミンスクで開幕した。ユネスコの第20回総会（一九七八年）の決定によって開催されたこの会議には、世界各地域の自然保護区の今日と明日を結びつける、最もアクチュアルな問題が提起された。

環境保護や自然保護区域の組織に関する共同研究・作業の初めての具体的結果が検討され、生物圏の総合的研究の基本課題が審議されよう。

本会議の開催地がソ連に決まったことは、ユネスコの〝人間と生物圏〟計画、その他大きな国際計画の実現に果たしたソ連の貢献の大きさが認められたことを意味する。ベロルシアだけでも自然保護区は全領域の約5%を占めている。近い将来、この数字は2倍に増える予定である。〝人間と生物圏〟計画の実現にはベロルシア共和国の42の科学研究機関と大学が参加している。

（イズベスチヤ紙9月28日号）

〝土地改良83〟展

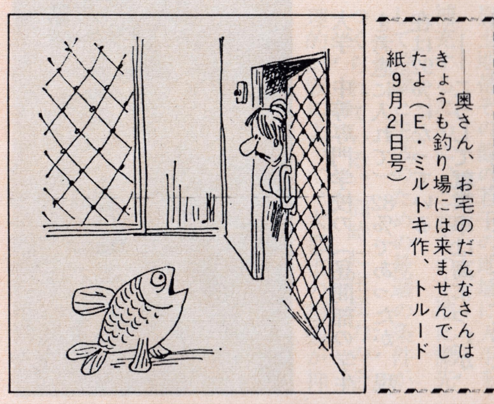
10月14日、モスクワの総合博覧会場クラスナヤ・プレスニャで国際見本市〝土地改良83〟が開かれ、農作物の安定した収穫を保証する条件を作り出すための機械、設備、道具、資材が展示された。見本市のスローガンは「収穫を増進する土地改良」。16カ国の約一〇〇の商社が参加した。

（ソビエツカヤ・ロシア紙10月15日号）

日本海岸のピオネール・キャンプ

国家委員会が全ソ・ピオネール・キャンプ「オケアン」（大洋）の第一期工事分を検収した。このキャンプはナホトカの近くの日本海に面した森の中にあり、学校や運動場を付設した最初の建物がこのほど完成したもの。すぐ隣に更に3棟の建物が建設中。六〇〇人の子どもたちが10月25日にオープンするこのピオネールの町の最初の住民になる。全部の建物が完成すると、「オケアン」は二〇〇〇人以上の子どもたちを受け入れられるようになる。

（イズベスチヤ紙10月13日号）



——奥さん、お宅のだんなさんはきょうも釣り場には来ませんでしたよ（E・ミルトキ作、トルード紙9月21日号）

世界柔道選手権

モスクワのルジニキ・スポーツ宮殿で世界柔道選手権が始まった。世界47カ国の選手が7つの重量級と無差別級でタイトルを争う。

19世紀末、日本の教師嘉納治五郎は、自分の考案した格闘技が世界中でこれほどの人気を集めるようになると考えただろうか。長い間、柔道は日本だけで行われていた。しかし間もなく欧州に、次いで他の諸大陸にも根づいた。今日では80カ国以上が国際柔道連盟に加盟している。

ソ連で柔道が行われるようになったのはそれほど古いことではないが、ソ連選手の国際的な活躍はかなりのもので、世界、欧州、オリンピックのチャンピオンが生まれている。ソ連の柔道人口は現在一五万人を数える。

（プラウダ紙10月14日号）

モスクワで国際切手展

「社会主義諸国切手展83」が昨日モスクワで始まった。

ソ連や社会主義諸国の郵便切手収集家が準備した一四三のコレクションが七八〇の展示台に陳列された。この切手展は、ユネスコのイニシアチブでことし行われている国際コミュニケーション年を記念して開かれたもので、「平和と国際協力のための切手収集」がモットーになっている。

（コムソモリスカヤ・プラウダ紙10月15日号）

労働力資源の問題をどう解決する?

ソ連経済の緊要問題の一つ——労働力資源の問題について、本誌編集部はウラジーミル・アペリヤン経済学博士に聞いた。

一九七〇年代から労働力資源が伸び悩みの傾向にあり、そのため労働力資源の問題を早急に解決しなければならなくなっている。

——統計データによると、一九七一年から八〇年までの10年間に約二四〇〇万人が労働可能年齢に入った。これはかなり多い数だと思うが……

しかし七〇年代末に伸びは激減しはじめた。たとえば一九七六—七七年の労働力資源の年平均の増加数は約二八〇万人であったが、2年後には一八〇〇万人に落ち込み、一九八〇年には一五〇万人にまで減った。

——減少傾向は今後も続くか?

予測では一九八一—九〇年のソ連の労働可能人口の総増加数は、前の10年間の約1/4になる。しかも年金受給者数は前よりも急速に増えよう(年間約一〇〇万人)。これは二〇年代末—三〇年代初めに生まれた多くの世代が、年金生活に入るからだ。

——しかし労働可能人口の自然増は、労働力を補充する唯一の源ではないのか?

長年追加の労働力となってきたのは、主に家庭の主婦と個人の副業従事者(主に婦人)であった。いまこうした人々は、伝統的な女の職場(たとえば軽工業や食品工業)だけでなく、他の多くの産業部門でも、重要な役割を果たしている。一九七九年の人口調査データによると、個人副業経営従事者数は一九五九年に比べて1/20近くに減っている。だからこの労働力資源の補充源ももう大して役立たなくなっている。

いまソ連の労働可能人口のほとんど全部が事実上働くか学ぶかしている。一九五九年の国民経済従事者の割合は大学、中等専門学校の(昼間部の学生を考慮に入れて)82%であったが、現在は92%になっている。

——こうして就業率は高まったが、同時に多くの地域では人手不足が見られる。つまり労働力資源不足が起こっているというわけか?

あれこれの種類の資源の絶対的不足ということは、計画経済の条件のもとではありえないと思う。問題はむしろ、その時の人口学的状態とか、資源利用の新しい条件とか、経済発展のあらゆるファクターの均衡を最良のものにする必要性とかに、柔軟によく適応できないことにある。

労働力を追加誘致する源泉が縮小したからといって、これは社会的生産を拡大するための労働余力が全般的に枯渇したことを意味しない。たとえば年金生活者をパートタイムで使うことは、余りやられていない(パートタイムの国民経済従事者は労働者・職員総数の0・5%弱)。

さらにもっと重要なのは手労働従事者数を減らす問題、とくに補助作業——荷役・運搬・格納作業の省力化の問題である。一九八二年初めソ連国家計画委員会は補助作業の省力化促進の総合計画を採択した。専門家筋の見るところでは、新しい専門機械が生産されたおかげで、ことし中にはやくも荷役関係の求人は激減する。

七〇年代末からソ連は産業用ロボットの増産を計画的に進めている。一九七五年のソ連のロボット生産台数は一二〇台であったが、一九七八年には五八〇台、一九八〇年には一五七九台、一九八二年には五四〇〇台に達した。あと数年もすれば世界の生産台数の半分に達すると見られ、求人数は大幅に減るだろう。

産業部門間、各地域間の従業者の再配分や労働のより合理的な組織、労働時間の無駄減らしなどにも、労働力を節約できる大きな余力がある。

労働力資源の問題を解決するカギは、経済の集約化のテンポをスピードアップすることであり、根本課題は新しい労働力を経済面に引き入れることではなくて、あくまでも現在の労働力をもっと有効に生かすことである。

人口の変動と経済

ノーボスチ通信経済解説記者 グレブ・スピリドノフ

人口問題はつねに経済専門家や社会学者などの注目のマトになってきたが、ソ連経済が集約的発展方向をとり、国が大規模な社会問題に取り組んでいるいま、人口問題はとくに緊要な問題となっている。こうしたわけで、一九八五年に任意抽出法による住民の社会・人口動態調査を実施することになったのはまことに適切で、この調査によって一九七九年の人口調査後の人口構成の変化がつかめるし、八〇年代末—九〇年代の経済・社会発展計画の策定に必要なデータが得られよう。

一九七〇年と一九七九年の全ソ人口調査後の期間のデータの分析によって、現在すでに人口学上の重要な変動や人口構成の変化の主な傾向がつかめる。まず第一に、ソ連の人口が三〇八〇万人増えて、現在二億七二五〇万人であることを指摘できる。ソ連の人口の増加率は先進資本主義諸国全体よりも高いが、それでもなお現在の人口の状態は、ソ連経済に数々の深刻な問題を提起している。

ご承知のとおり、ソ連は第2次世界大戦で二〇〇〇万人という大きな犠牲者を出したが、その結果労働可能人口は大きく減った。本来ならばいま戦争で死んだ人々の孫が社会に出るころである。しかしソ連は戦争の傷跡のこのいわゆる「第2波」をいまもろにかぶっている。ソ連経済は人手不足に伴う数々の困難にぶつかっており、しかも近年中に労働力資源の急増は望めない。人口学的状態は悪く、出産率は相対的に低く、平均寿命は上がっている。

他の経済先進諸国と同じく、ソ連でも農村から都市へ、小都市から大都市への人口の移動は続いている。一九七〇—一九八二年中に農村地域から都市へ移住した人数は九〇〇万人余りで、いま都市人口はソ連の総人口の64・4%を占めている。しかしここ数年は農村からの移動が減る傾向にある。それはソ連食糧計画の実現に伴う政府レベルの離村防止対策がかなり効いたことも見逃せない。農業労働の技術装備率が上昇し、農村青年の職業教育に好都合な条件がつくられ、農村の根本的再編成、住宅や文化・サービス施設、幹線輸送路の建設に多額の資金が投入されている。農村住民の実質収入も急ピッチで増えている。

シベリア、極東、ロシア共和国の非黒土地帯その他の若干の地域に人手を補充するために、これらの土地に優先して労働と生活のための最適の条件がつくられている。同時に生産力の合理的配置によって、大都市の膨張が抑制され、中小都市の発展が推進されている。ソ連では毎年ガス下水道施設や生産施設をもつ都市が20ばかり新設されている。

農村住民の移動はソ連社会の社会構成を変えており、労働者・職員数は増え、コルホーズ農民の数は減っている。一九七〇—八二年中に労働者数は一五五〇万人増えて、現在は人口の60・9%を占めている。ソ連は計画経済の国であり、労働可能人口の常時完全雇用が確保されていて、都市における労働力の増加は、不安の種となるどころか、逆にこの先の社会・経済的進歩の重要な前提となっている。

住民の生活水準の順調な上昇や保健の発達にともなって、ソビエト人の平均寿命は大きく伸び、それと同時に年金受給年齢者の数も増えた。現在ソ連の年金受給者は五二四〇万人で、人口の1/5近い。その多くはまだまだいくらでも働けるくらい元気である。国はこうした人々に働くチャンスを与えており、現在八〇〇万人の年金受給者が工場やサービス業などで働き続けており、賃金とともに年金の全部または一部をもらっている。

一九八五年の任意抽出式社会・人口調査によって、経済専門家や計画機関は、国の今後の経済的、社会的発展計画の策定に人口学的要因をより合理的に生かし、人口の動きの管理を改善することができよう。



“ライキン劇団”のために脚本を書きたがる劇作家は多い。ウラジーミル・シナケビチ（右）もその一人。ステージでの即興的演技が生まれるまでには多くの人の大変な下準備がいる（左がライキン）。

笑いを通して真実を語る

——寸劇の王様アルカジー・ライキン

キーラ・キリロワ　カメラ　R・クチェロフ

風刺家は万が一にもコンクールで入賞することはないと言う。なぜならば審査員席に座っているのは風刺家が風刺の対象として取り上げるような人物ばかりだからだ……

私はこの一節をアルカジー・ライキンに語って聞かせた。ライキンはソ連で最も高名な演劇人の一人だ。ライキンはそれを聞くとアハハと笑い、「じゃあ、私は例外として見なけりゃならんのかな？」と言った。

ライキンは別に自慢したわけではなかった。ライキンは、いろいろな国の新聞が「コミックの天才」、「軽演劇のパガニーニ」と呼び、チャールズ・チャップリンと比べてみるほどの有名なコメディアンである。しかしライキンには、社会主義労働英雄、ソ連人民俳優の名誉称号やレーニン賞など、祖国ソ連の最高の栄誉がすべて与えられているのである。

ライキンの人気の高さはちょっと信じられないほどだ。ライキンがテレビに出るとなったら、その時間は家族みんながテレビの前に釘づけになること間違いなし。ライキン出演の出し物の切符が運よく手に入ったとしたら、友だちみんなからうらやましがられること請け合い。

さて、こうしてあなたは今、劇場にいる。いよいよライキンのご登場——エレガントで、しゃきっとし、生真面目な顔。客席に向かって、実に淡々と、笑わせてやろうという魂胆などこれっぽちも見せずに、数行のせりふをしゃべる。……あなたはどうしてそうなったか気づきもしないだろう！　観客の前のライキン——同時にライキンでない、別の顔（何というごう慢さ、うぬぼれめ！）、別の声（尊大で、〃大物気取り〃）。この人物がひどくあけすけに語り、本当にあなたの共感を呼ぶのだ。

「何といろんなポストを転々としたことか！　科学研究所に行かされたこともあったっけ。それはもう大変だった、とても。難儀な人ばかりで。たとえば、あのクズネツォワ教授。彼女を呼びました——

〃どうぞ、おかけなさい。私の論文を読んだかね？〃

彼女が答えます——

〃まさかこんな……練習問題に本気で取り組めるとお考えではないでしょうね。あなたがお書きになったところを見てごらんなさい——≪年ごとにわれわれの弱電流はますます強くなっている……≫ですって、めちゃめちゃでしょう！〃

〃もっとちゃんと答えなさい、クズネツォワ同志、あなたの研究室は何と取り組んでいるのかね〃

きっと唇を結んで、〃最近の5年間は半導体の研究を行っています〃とクズネツォワ。

考えても見て下さい——5年間ですよ！

〃5年もあれば半導体だけじゃなく、全導体の研究が出来るんじゃないかね！〃——彼女に分からせようとします——〃考えて見たら、分かるだろう？〃

クズネツォワ教授はかんしゃくを起こし、顔をまっ赤にした。

〃ばかの程度がエネルギーだったら——これは彼女が私に言っているんですよ！——パンチューホフ同志、あなたはかなり巨大な発電所を養えるでしょうよ！……〃」

観客席には大笑いどころか張りさけるようなうめき声。今になっても、このセリフを紙に書き移すだけでも、私はおかしくてしょうがない。多分、頭の中でライキンの姿が浮かび、ライキンの声が聞こえるからだろう——ライキンは人物の特徴を正確につかみ、イントネーションを細やかに誇張する。——ライキンの見事な所作、まるで同時に二つの顔——鈍いパンチューホフの顔と彼を笑う俳優自身の（陽気ではない、いやむしろ、悲しそうな）顔を合わせ持っているかのように豊かな表情……



才能豊かな俳優たちがライキン（中央）と一緒に演じる。ライキンはソリストで劇団員はオーケストラにたとえられよう。

プロパガンダについて

読者が断片だけでもいいから読めるように、この小作品のテキストを下さいと頼んだら、ライキンはびっくりした——「まさか雑誌に載せるつもりではないだろうね？　風刺文学のジャンルの確立に決定的影響を与えたロシアの偉大な作家、ゴーゴリ（一八〇九—一八五二）の有名な意見があるでしょう——〃これを書いてもいいのだろうか？　このことについて公表しても？……心が痛む……外国人は何と言うだろう？……われわれは愛国者ではないのかと思うだろう…〃」

ライキンは皮肉っぽく、おどけた調子だったが、非常に真剣な顔で言った——「劇団はソ連以外にもずい分公演して回りましたし、ここにも外国人のお客さんがしばしば見に来ます。特に演劇人や作家がいっぱい来ますが、楽屋に私を訪ねて来ることもあって、〃こんなことを舞台から発言できるなんて、本当ですか？〃と一様に驚くのですよ」

私たちは笑った。ライキンは続けた。「さあて、これにはどう答えましょう？批判の必要性にかんする、われわれにとっては絶対的なレーニンの言葉——

〃ひとりよがりの楽観主義ほど低級なものはない〃を引用すればいいのかな？欠点に対する不寛容さは、それなしではうっ血や病気を避けられない、社会の一種の健康的な血液循環である、を引用するのか？　党の文書、共産党大会や中央委員会総会の雰囲気自体が常にわれわれをこの考えに引き戻している、と言えばいいのか？　悪いものを憎まずしていいものを愛せはしない。だから風刺家もまた宣伝家である……」

たった今、ライキンは年を取り、疲れているように見えた（この俳優はすでに70歳を越しているし、約3時間に



素顔のソ連人民俳優アルカジー・ライキン

も及ぶ独演の舞台がはねたあと、こうして対談しているのだ)。だが、今またライキンの目は若者のように光り輝いている。ライキンは話を続ける。
「自分の〝反主人公〟たち――あらゆる怠け者、じょう舌家、無関心な御都合主義者、もったいぶった浅学の徒を、おもしろおかしく観客に見せることによって、彼らのもたらす実害は少なくなり、人々は彼らを見分け、彼らと闘うことを覚えるだろうと私は信じています。そうすることによって私は、こういうタイプの人間がはびこれない社会的風土が確立されるのを助けていると信じます。そうすることによって私は、人間らしさ、誠実さ、善を宣伝しているのです。ここで宣伝という的確な言葉を避けるつもりは全然ありません」

笑う時は…まじめに?

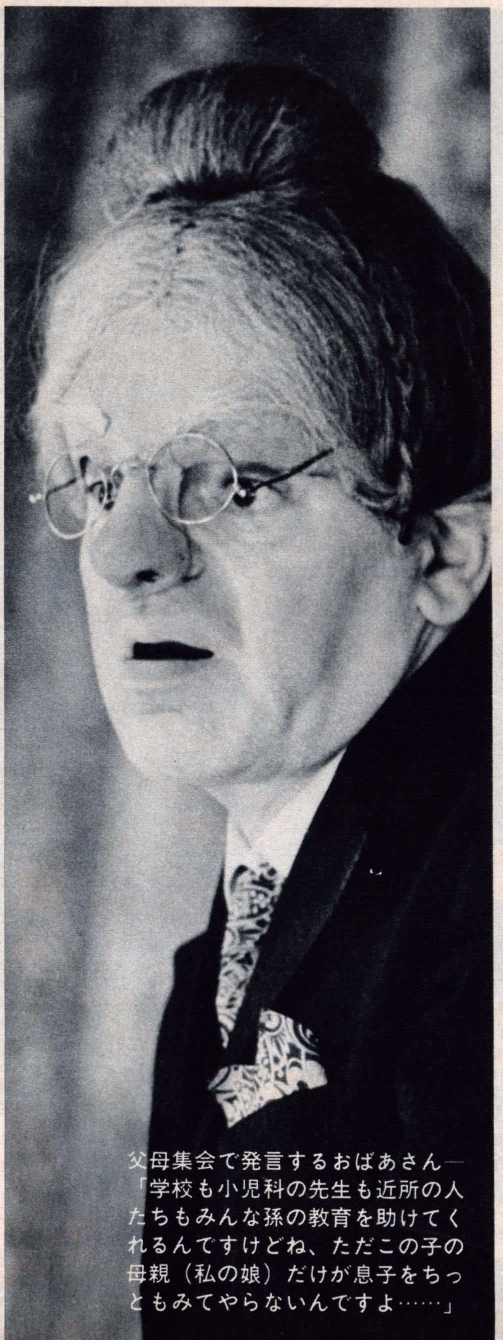
アルカジー・ライキンの芸の研究者たちは、ライキンが軽演劇で歩んできた道を〝前人未踏のもの〟と言っている。実際、ライキン以前は、軽演劇は芸術性と演技でも、構想のスケールでも、また、風刺と善意や悲しみとのほとんど考えられないような組み合わせにおいても、これほど驚くべき高さには到達していなかった。とくにこの場



大都会であろうと小さな農村の会場であろうと客席はいつも満員。年齢や職業、性格に関係なく、観客はみなライキンを一言で理解する。



これは学校の父母会を取り上げた5分ほどの出し物で、ライキンが独演する。この教育専門家は教育については何でも知っているが、実は子供がいないし、子供が好きでもない……



父母集会で発言するおばあさん――「学校も小児科の先生も近所の人たちもみんな孫の教育を助けてくれるんですけどね、ただこの子の母親(私の娘)だけが息子をちっともみてやらないんですよ……」



サービス部門の従業員もよくライキンの槍玉に挙がる。これは洋服の仕立て屋――「仕立てがまずいからって怒らなくてもねえ。自分の服だって、ほら、ズボンが短いでしょ。その代わり上着の袖は長いんですよ。みっともないって? でも、手が温かくていいもんですよ……」



ライキンが演じる人気者の一人――〝理解されない者〟。日曜日、妻に博物館に誘われた。「絵画、彫刻、騎士の大広間…こんなのどうだっていいんだ…きょうはもう2時半だっていうのに一杯も入っていないんだから」。もちろん、この一杯というのはお茶とかコーヒーのことではありません……。

合の悲哀はきわめて痛切なもので、ライキンが告白的なモノローグを口にする時、彼自身の目にも涙があふれ、われわれ観客は、まだ笑い終わらないうちから、もうノドの奥に何かつかえるものを感じるのである。

彼はいつもこうだったわけではない。レニングラード演劇大学の陽気でチャーミングな学生は、一九三〇年代にみんなと同じように物真似からはじめた。彼は青年劇団に入り、ここでいくつかの役を演じたが、やがて、有名な演出家フセボロド・メイエルホリド（一八七四－一九四〇）に見出され、メイエルホリドの劇団に招かれた。

恐らくまさにこの時、どの俳優の経歴にも必ず現れる、〝ミスター・チャンス〟に出会ったのだろう。病気で出られなくなった役者の代役（セリフもない大した役ではなかったが）をライキンがつとめたのだ。ライキンはこの〝セリフもない〟役を、「テアトル」誌が特に批評するほど見事に演じた。この戯曲はもうとうに忘れ去られてしまったが、奇しくも『生活のはじまり』という題だった。ライキンの新しい生活もこの時から始まったのだ。成功のとりこになることなく、彼は劇団を出て軽演劇の世界へ身を投じた。他の作者の構想に縛られているのはライキンには窮屈だった。彼は自分の言葉を語りたかったのだ。

ライキンは次第に〝声高に〟、はっきりと自分を語るようになった。罪のない冗談からはじまって辛らつなパロディーに移り、機知に富んだ笑い話から風刺のきいた寸劇に進んだ。そして、強烈な個性には何か磁力のようなものがあるが、ライキンの周りにも徐々に志を同じくする俳優や戯曲家が集まるようになった。ついに一九三九年、ソ連初の寸劇劇団——レニングラード国立寸劇劇場が結成された（去年の秋、この劇団は根拠地をモスクワに移し、ソ連寸劇劇場になった）。

この寸劇劇団結成以来の芸術指導者であり、もちろん看板俳優でもあるライキンは、結成の頃を思い出して次のように語っている。

「私たちの劇団には平和な〝子ども時代〟はまったくありませんでした。一九四一年、ヒトラー・ドイツがソ連に対して恐ろしい戦争をはじめました。これは誰にとっても剣が峰でした。自分の場所を見つけなければなりませんでした。気づいたら無関心派の側に立っていたということのないように」。

劇団は前線を回り、軍の飛行場、軍艦、出征軍の各部隊で公演した。劇団も戦ったのだ——自分の武器、笑いという強力な武器で。そしてライキンは戦士として大祖国戦争戦闘勲章を授与された。

ライキンの最新作は『劇場陛下』と名づけられている。ライキンは観客に語りかける——生活の〝舞台〟ではわれわれの誰もが数多くの役を演じている。家では夫または父親、職場では指導者あるいは平の従業員、病院では医者か患者……われわれは自分の役割を立派に演じているだろうか？　演技者が役を作るだけでなく、役が演技者を作ることをわれわれは知っているだろうか？

「目的を達成するにはごますりの役を演じなければならないということをあなたが知っているとしよう。別の方法はない……つまり、もちろん別の方法もあるんだが、それはおそろしく厄介で、必ずしも気楽にやるわけにはいかないということだ。さて今あなたはごますりの役を演じ、演じながら胸の中では、目的を達したらすぐさま仮面を脱ごう、そしたらみんなは、本当は私が何て誠実で、高潔な顔の持ち主かということをすぐに見てとるだろう、と考えている。

だが、仮面はもうとれないのだ。もうあなたの皮膚に癒着してしまっている……」

これはおかしくも、しゅん厳な寸劇だ。ライキンはあたかも仮面を持ち上げるような仕草をする。仮面の下に隠れているありとあらゆる御都合主義者、うそつき、恥知らずな収賄者あるいは単にひとりよがりのばか者を暴き出そうとするかのように。ひょっとすると、この鏡に自分の顔が映っている人もいるのではないだろうか？……

実際、アルカジー・ライキンの息の長い創作活動には感心する。その秘けつは何だろう？

「目を閉じず、耳をふさがず、つまり、あるがままの人生を見、人生のあらゆる問題に……そう、自分の健康に対するのと同じように接すれば、それは可能です。芸術には秘密があります（芸術だけではないですが）。もしあなたが冷たい人で、あなたがやったり、言ったりすることがあなたを興奮させ、心配させ、〝痛ませ〟ないなら、この秘密を見つけることは不可能です。名人芸も、才能も助けてはくれません。観客は分かります——あなたを信用しません。芸術家になれるのは、自国の生活を非常に個人的な事として感じられる市民だけです。何を引っ下げて舞台に出るのか、何を愛し、何を憎むのか、何のために自分の言葉を語りたいのか——これを正確に知らなくてはなりません。ただ自分を見せることにだけあくせくするのなら、優雅なファッションモデルの仕事につけばいいと思う……」

☆

☆

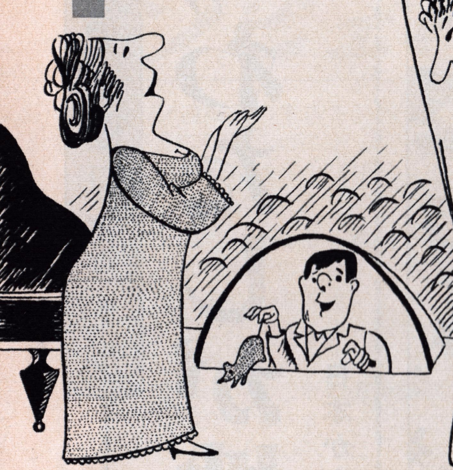
☆

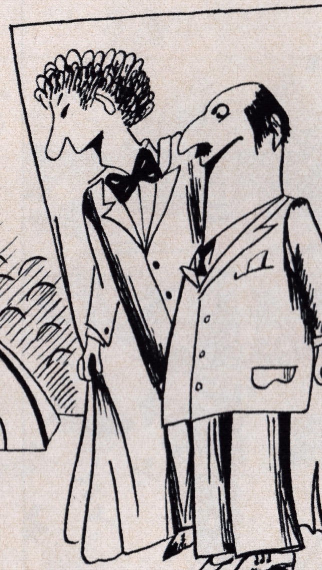
アルカジー・ライキンの左にいるのは息子のコンスタンチン。モスクワのソブレメンニク劇場に最近まで有名な俳優。今シーズンから親子で共演するようになった。

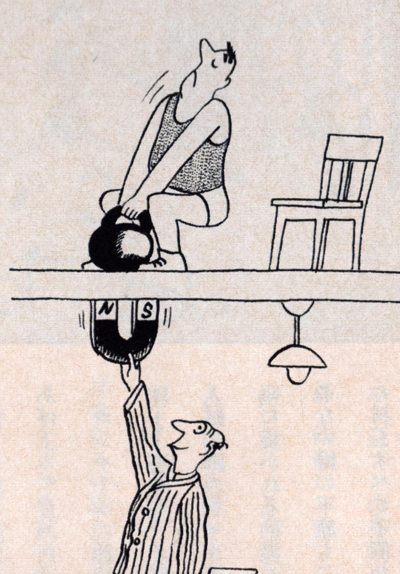


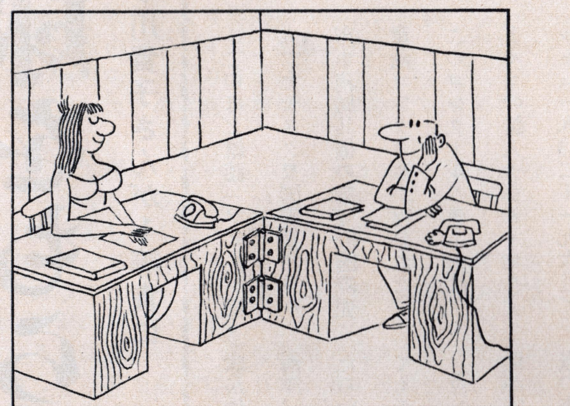
ユーモア

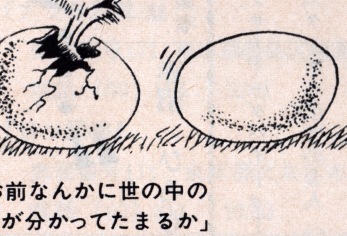
「すぐに高いラの音が出せるようになるさ」

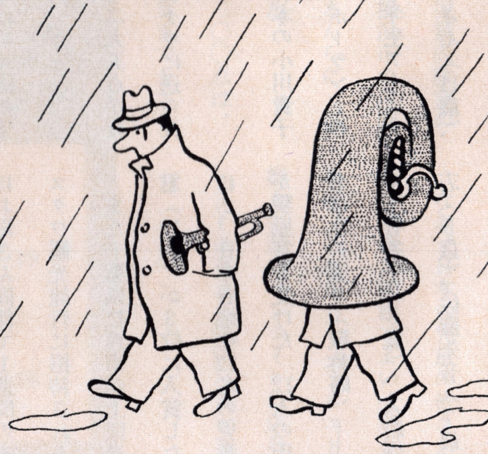












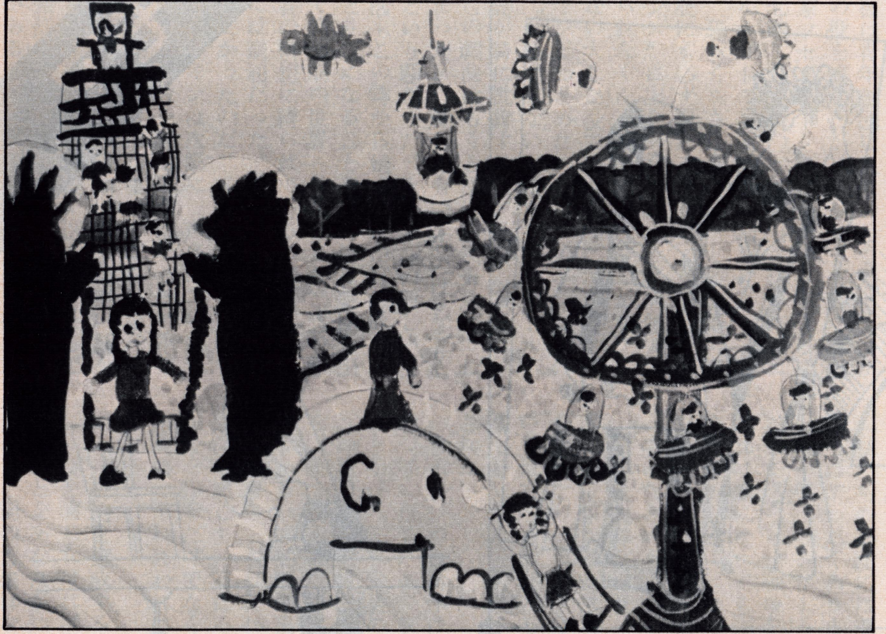
「お前なんかに世の中のことが分かってたまるか」

国際児童画コンクール

〝わたしが地球をもらったら…〟

──日本からも小川貴子さんが1等賞に

「ソビエト婦人」誌
日本語版責任編集者　赤沼　ひろし



1等賞の小川貴子さんの作品

このほど雑誌「ソビエト婦人」とモスクワ国際書籍見本市事務局共催の第4回国際児童画コンクールが行われた。

このコンクールのテーマは、トルコの詩人ナジム・ヒクメット（一九〇二－一九六三）の詩の一節〝地球を子供らにあげよう〟だった。

コンクールの趣旨は、全地球──海洋も、北極の氷も、人跡未踏のジャングルも、太陽に焼かれる砂漠も、果てしのない緑の平原も、大小の町や村もすべて子供たちに任せたと仮定して、どうしたら地球が住み良くなるか、地下や海洋、宇宙の資源をどう使ったらいいかを子供たちに描いてもらおうというものだった。

コンクールには44カ国の子供が応募し、約一万三〇〇〇点の作品（うち二九五点が日本から）がモスクワに送られてきた。

1等賞は、日本の小川貴子さん（8歳）、ポーランドのポズナニ市の小学生アーニャ・アダムコビチさん（11歳）、インドのレヌ・マンさん（12歳）、ソ連のアリョーナ・ピツラさん（カラガンダ市）とオクサーナ・ダバイドゥーリナ（クルスク市）の5人（いずれも女子）で、コンクールの規定により、お父さんまたはお母さん同伴で1週間のモスクワ観光旅行に招待される。

また千葉県松戸市の上田光君（12歳）が3位に入賞したほか、日本各地の12名の児童が奨励賞を受けた。12人の氏名は次の通り（敬称略）──木下智香子（8歳）、入船崇志（5歳）、佐藤朱音（7歳）寺尾真由美（5歳）、兼清聖（8歳）、豊原あつし（6歳）、中山静香（8歳）、古賀修二（5歳）、森上まさよ（9歳）、山本耕平（7歳）、森 佳奈（7歳）、鹿野良子（11歳）。この12人にも賞状と記念品が贈られる。

「ソビエト婦人」誌編集部は、子供たちの絵を集めて児童画コンクール事務局に送る労をとって下さった日本の関係団体──ユネスコ美術教育連盟の甲斐浩さん、海外と文化を交流する会の松岡裕子さん、千葉県松戸市の児童画教室の大隈武夫さん、横浜市の洋画研究所の森秀男さんらに、感謝の意を表明した。

また優秀作品三〇〇点は、9月6日から12日までモスクワで開催された国際書籍見本市の会場に展示され、数十万人の入場者に感銘を与えた。

なお、日本の児童の皆さんが、学習と図画でよい成績をあげ、これからも「ソビエト婦人」誌のコンクールに応募して下さるよう切望します。



3等賞の上田光君の作品

ロシア語のページ

АБВ

NHKテレビ ロシア語講座から(11月前半)

テレビでロシア語を学ぼう!

この欄では、NHK教育テレビ・ロシア語講座のご協力を得て、同講座のテキストから主な表現や単語その他を紹介させていただきます。原則としてロシア語の単語や文には発音を表記しませんので、是非テレビの放送で実際の発音に親しんで下さい。

(11月2、3日放映)

きょうの表現

Онá больнá?

彼女、病気?

⊙больнá は形容詞 больнóй「病気の」の短語尾女性形。

きょうの単語

①красúвый 美しい ②интерéсный おもしろい
③хорóший よい ④плохóй 悪い
⑤дорогóй (値段が)高い ⑥дешёвый 安い

(11月5、7日放映)

きょうの表現

Óчень вкýсно.

とてもおいしい

⊙óчень「とても」、「非常に」。
⊙вкýсно は、ここでは形容詞 вкýсный の述語副詞形。

きょうの単語

①вкýсно おいしい ②скýчно 退屈だ
③жáрко 暑い ④хóлодно 寒い
⑤трýдно むずかしい ⑥легкó やさしい

(11月9、10日放映)

きょうの表現

Э́то винó лýчше.

このワインの方がいい

⊙винó「ワイン」。крáсное(赤)と бéлое(白)があり、слáдкое(甘口)と сухóе(辛口)があり、крéпкое(強い)と слáбое(弱い)があり、その他いろいろある。

きょうの単語

①винó ワイン ②вóдка ウォトカ
③пúво ビール ④сок ジュース
⑤кóфе コーヒー ⑥чай お茶

(11月12、14日放映)

きょうの表現

Мóжно посмотрéть?

見てもいい?

⊙мóжно「~してよい」述語副詞。
⊙посмотрéть「見る」動詞不定形。同じ意味の動詞 смотрéть の完了体という形。

きょうの単語

①смотрéть 見る ②курúть タバコを吸う
③писáть 書く ④читáть 読む
⑤идтú 行く ⑥звонúть 電話する

(11月16、17日放映)

きょうの表現

Вы читáете по-япóнски?

あなた、日本語が読めるの?

⊙читáете は читáть の現在形、主語が вы の時の形。
⊙по-япóнски「日本語で(を)」副詞。
⊙日本語では、外国語が「読める」「話せる」「できる」というが、ロシア語では通常「読む」「話す」といえば十分で、「できる」という意味のことを補う必要はない。

きょうの単語

①дéлать ~する ②изучáть 学ぶ
③рабóтать 働く ④отдыхáть 休む
⑤слýшать 聞く ⑥отвечáть 答える

NHKテレビ・ロシア語講座のテキストは、最寄りの書店でお求め下さい。書店にない場合は、日本放送出版協会(郵便番号150 東京都渋谷区宇田川町41—1、電話03・464・7311)へお問い合わせ下さい。

今日のソ連邦
一九八三年11月合併号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3－9－13・電話03－447・3536）

定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）